熊本県文化財調査報告　第39集

中小野・矢ノ下・目抜・アケサン

―― 中小野遺跡 ――
―― 矢ノ下・目抜遺跡 ――
―― アケサン古塔碑群 ――

1980

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第39集

中小野(なかおの)・矢ノ下(やした)・目抜(めんげ)・アケサン

1980

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した「中小野遺跡」、「矢ノ下・目抜遺跡」、「アケサン古塔碑群」に関するものであります。

中小野遺跡では、古墳時代の住居址及び歴史時代の遺構を、矢ノ下・目抜遺跡では中世の墳墓群等を、またアケサン古塔碑群では碑文及び民俗学的調査の成果を集録しました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施に当りましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和55年１月８日

熊本県教育長　井　本　則　隆

例　　言

1、本書は、九州縦貫自動車道建設に伴なう埋蔵文化財調査報告書である。

2、現地の調査は熊本県教育庁文化課が実施した。担当者は江本直、丸山武水（中小野遺跡）、緒方勉、高木正文、（矢ノ下・目抜遺跡）、上妻信寛、島津義昭、安田宗生、板楠和子、横尾泰宏（アケサン古塔碑群）である。

3、各本文、実測・写真は各担当者で実施し、遺物の写真撮影は江本直・白石巌があたった。

4、出土遺物等の整理については熊本県文化財収蔵庫で行った。

5、本書の編集は各調査員協議のうえ、隈昭志があたり、佐藤征子、西町圭子の協力をうけた。

本　文　目　次

中小野遺跡
第Ⅰ章　序説……1
1．調査に至るまで……1
2．調査の経過……2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……4
1．遺跡の位置および立地……4
2．周辺の歴史的環境……7
第Ⅲ章　遺跡の調査……10
1．調査地の状況と各トレンチの設定……10
2．A地区の遺構と遺物……13
3．B・C地区の遺構と遺物……31
4．まとめ……37
第Ⅳ章　周辺の遺跡……41
1．長谷寺の五輪塔……41
2．娑婆神峠の石畳道……45
第Ⅴ章　むすび……47
矢ノ下・目抜遺跡
第Ⅰ章　序説……51
1．遺跡の位置と環境……51
2．調査に至るまで……51
第Ⅱ章　調査……54
1．溝と土壙……54
2．墳丘状盛土と木棺土壙墓……56
3．出土遺物……59
第Ⅲ章　まとめ……61
アケサン古塔碑群
第Ⅰ章　調査概要……65
第Ⅱ章　板碑と銘文……65
第Ⅲ章　関連調査……68
1．湧水池に祀られる神仏……68
2．板碑周辺の石造物……84

第Ⅳ章　まとめ……85
附論
1．つづの山遺跡（高木正文・緒方勉）……87

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……5
第2図　遺跡の位置と調査区……6
第3図　遺跡地形図……11・12
第4図　A地区遺構配置図……14
第5図　第1号住居址実測図……15
第6図　第1号住居址出土土器実測図（001～003）……17
第7図　第1号・第2号住居址出土土器実測図（004～014）……18
第8図　第2号住居址実測図……20
第9図　第3号住居址実測図……21
第10図　第3号住居址出土土器実測図（015・016）……23
第11図　第3号住居址出土土器実測図（017～024）……24
第12図　第3号住居址出土土器実測図（025～030）……27
第13図　第3号住居址出土土器実測図（031・032）……28
第14図　第3号住居址・表土層出土土器実測図（033～042）……29
第15図　溝状遺構・C地区出土土器実測図（043～046）……32
第16図　長谷寺五輪塔実測図（1・2）……42
第17図　長谷寺五輪塔実測図（3・4）……42
第18図　長谷寺五輪塔拓影……43
第19図　長谷寺五輪塔拓影……44
第20図　遺跡位置図……52
第21図　天ノ下・目抜遺跡（地形と地番）……53
第22図　遺溝配置図……55
第23図　木棺土壙墓……57・58
第24図　盛土礫中混入の石器と陶磁片……60
第25図　遺跡位置図……65
第26図　板碑実測図……66
第27図　板碑全景……67

第28図　板碑拓影……69・70
第29図　板碑拓影……71・72
附1第1図　遺跡の位置とその周辺……90
附1第2図　遺構配置図……93・94
附1第3図　出土遺物……95
附1第4図　出土泥塔……96
附1第5図　熊本県内出土泥塔……99

表　目　次

第1表　住居址計測一覧表……33
第2表　第1号住居址出土土器一覧表……34
第3表　第2号住居址出土土器一覧表……35
第4表　第3号住居址出土土器一覧表……35
第5表　第3号住居址出土土器一覧表……36
第6表　その他の出土土器一覧表……37
第7表　『肥後国誌』にみられる妙見……80
第8表　両書の対照表……82
第9表　『国郡一統志』にみられる妙見……83

図　版　目　次

図版1　上：調査地遠景……103
　　下：調査地遠景……103
図版2　上：調査前の状況（果樹園）……104
　　下：第1号(左)・第2号(右)住居址の検出状況（東側から）……104
図版3　上：第1号・第2号住居址（南側から）……105
　　下：第1号住居址土器出土状態……105
図版4　上：第1号住居址……106
　　下：第2号住居址……106
図版5　上：第3号住居址……107
　　下：第3号住居址遺物検出状況……107
図版6　上：第3号住居址断面……108

図版６、下：第３号住居址断面……108
図版７　上：第３号住居址断面……109
　　下：第３号住居址断面……109
図版８　上：第３号住居址遺物出土状況……110
　　下：第３号住居址遺物出土状況……110
図版９　上：第３号住居址遺物出土状況……111
　　下：第３号住居址遺物出土状況……111
図版10　上：第３号住居址遺物取り上げ後の状況……112
　　下：第３号住居址ピット状遺構……112
図版11　上：溝状遺構……113
　　下：第３号住居址ピット状遺構……113
図版12　第１号住居址出土土器（001～003）：第６図……114
図版13　第１号・第２号住居址出土土器（004～014）：第７図……115
図版14　第３号住居址出土土器（015・016）：第10図……116
図版15　第３号住居址出土土器（017～024）：第11図……117
図版16　第３号住居址出土土器（025～030）：第12図……118
図版17　第３号住居址出土土器（031・032）：第13図……119
図版18　第３号住居址・表土層出土土器（033～041）：第14図……120
図版19　溝状遺構・Ｃ地区出土遺物（043～046）：第15図……121
図版20　上：婆婆神峠の手前にかかる眼鏡橋……122
　　下：石畳道の残骸……122
図版21　上：雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）……123
　　下：雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）……123
図版22　上：雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）……124
　　下：雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）……124
図版23　上：石畳道の残骸……125
　　下：雑草に覆われた石畳道……125
図版24　上：石畳道の残骸……126
　　下：石畳道の残骸……126
図版25　上：雑草の除去作業風景……127
　　下：雑草の除去作業風景……127
図版26　上：雑草除去後の石畳道（東側から）……128
　　下：雑草除去後の石畳道（東側から）……128

図版27　上：雑草除去後の石畳道（西側から）……129
下：雑草除去後の石畳道（東側から）……129
図版28　上：雑草除去後の石畳道……130
下：雑草除去後の石畳道……130
図版29　上：雑草除去後の石畳道……131
下：雑草除去後の石畳道……131
図版30　上：雑草除去後の石畳道（西側から）……132
下：長谷寺の五輪塔……132
図版31　上：長谷寺の五輪塔（正安四年銘）……133
下：正寿寺に残る過去帳……133
図版32　上：第３号住居址出土土器……134
下：調査に参加した人達……134

中小野遺跡

第Ⅰ章　序　説

1．調査に至るまで

日本道路公団の九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋～八代）建設計画に伴ない、熊本県教育委員会（社会教育課）では昭和46年度に国庫補助をうけて松橋～八代間の文化財分布調査を実施した。その時点での調査は、道路幅200 mの範囲を踏査し、33ヵ所の遺跡がチェックされた。その一つが、中小野貝塚（下益城郡小川町）で、『文化財分布調査報告書』（昭和46年3月、熊本県教育委員会）によると、「前田堤の北側にひろがる貝塚で、調査されたことはないが、畑や道路、宅地の一部で層が検知される。貝塚の範囲、時期、包含状況、特色等明らかでない。縄文中後期の貝塚とも言われている。」と記載されている。

その後路線が決定し、昭和49年度に日本道路公団の委託をうけて、熊本県教育委員会文化課が調査を行うことになった。調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	岩崎辰喜（文化課長）
	田辺哲夫（元文化課長）
調査総括	隈　昭志（文化課文化財調査係長）
調査員	江本　直（同学芸員）
	丸山武水（同調査員）
	安達武敏（同調査員）
整　理	上野辰男（同主幹）
	山城仁恵（同嘱託）
調査事務局	田辺宗弘（同課長補佐）
	浜田　勝（同元課長補佐）
	栗崎辰之（同元主幹・管理係長）
	村田一美（同元主幹・文化財係長）
	村上孝司（同管理係長）
	松本　巽（同元管理係長）
調査協力	日本道路公団福岡建設局（松橋工事事務所）
	下益城郡小川町教育委員会
	長谷寺、正寿寺

2．調査の経過

昭和49年５月１日、下益城郡小川町に所在する発掘調査予定地である年の神遺跡、中小野遺跡、アケサン古塔碑群の３ヵ所の遺跡の状況を調べるため文化課の松本健郎技師、島津義昭学芸員と筆者の三人で現地に行き踏査を行った。

その中で中小野遺跡については、調査対象物として、小規模の貝塚があり、約1,600㎡を対象面積とし、調査には約３ヵ月を要するであろうことを報告した。また、地元の区長宅を尋ねて、５月中旬から発掘調査を実施する予定であることを伝え、調査に対するご理解とご協力をお願いした。

翌日には調査の計画を行い、調査に必要な器材のとりまとめを行った。現場への調査器材の運搬は５月14日に年の神古墳調査現場と一緒に行うことにした。中小野区長宅にも５月16日から調査を開始する旨と、作業者５～10名を集めてもらうように連絡をした。

５月14日、熊本県文化財収蔵庫と塚原古墳発掘事務所から調査器材を載せ現地に運搬した。

５月15日、再度中小野区長宅を訪ずれ、依頼していた作業者10名が決定し、翌５月16日から調査を開始することにした。

５月16日、現地に行き作業者と会し、作業内容について説明したあと発掘調査を開始した。調査地は STA 39＋40～43＋60地内とし、その間に通る二本の道路によってＡ～Ｃの三区に分けた。作業はＡ～Ｃ地区における雑草の除去作業と、Ａ地区のトレンチ設定からはじめ、午後からはＡ地区の一部のトレンチの掘り込みをはじめた。遺構・遺物の出土する範囲を各地区の各トレンチで調べることを当初の目的とした。

５月17・18日はＢ・Ｃ地区にもトレンチを設定し、Ｃ－１・２トレンチは一部掘りはじめた。Ｃ－１トレンチからは五輪塔片や銭貨が出土しはじめた。以下、一週間ごとの調査経過は次のとおりである。

５月21日～25日、Ｃ－３・４トレンチ掘りを行う。Ｃ－３トレンチ上層には貝殻が混じる。Ｃ－４トレンチでは遺物は出土しない。24日、文化課の栗崎辰之主幹・隈昭志文化財係参事が調査のため現地を踏査。

５月27日～６月１日、Ｃ－４・５トレンチ、Ｂ－３・４トレンチ掘りを行う。Ｃ－２トレンチの近くは、付近の人は祟があるとして立入らないところであった。５月27日、近くの正寿寺の僧侶に供養のための読経をしてもらった。この日文化課の西野英俊主事も現地を踏査。

６月３日～８日、Ｂ－４トレンチは３日に終了し、再度、Ａ地区の調査に移る。Ａ－２～４トレンチ掘りを行ったが、Ａ－３トレンチに住居址一軒を検出した。出土した土器は古墳時代のものと判断できた。８日は雨のため作業を中止する。

6月10日～15日、A－4・5トレンチ掘りを行う。A－4トレンチでも2軒の住居址が出現し、合計3軒となった。いずれの住居址から出土する土器にも大きな時期差はなく同一時期のものであった。また、A－4トレンチでも青磁片の出土があり、中世の遺構が存在する可能性がもたれた。14・15日は道路公団の監査があるため調査を中止し、文化課で待機した。

6月17日～22日、丁度、梅雨期にあたり17・18・21・22日は降雨のため調査を中止した。A地区は3軒の住居址や溝の出土があったことから、A－1～4トレンチの周囲は、全面的に表土を剝いで調査を行うことにした。12・13の両日はこの表土剝ぎを行った。なお、このA地区の表土剝ぎの排土作業に使用するために、ブルドーザーを17日搬入した。文化課の田辺哲夫課長・隈参事が踏査、指導を受ける。

6月24日～29日、先週にひきつづきA地区の表土剝ぎ作業を行った。途中25・26日は、周辺遺跡の調査として娑婆神峠に一部残っている石畳道の除草・清掃作業を行い写真撮影を済ませた。

7月1日～6日、同じくA地区の表土剝ぎ作業を進めた。連日の炎天続きで作業者は疲労気味である。来週中にはこの作業にメドをつけ、住居址や溝遺構の検出と掘り込みを行う予定で作業をつづけた。

7月8日～13日、A地区の表土剝ぎ作業に並行して第1号住居址のプランを検出し、掘り込みを行った。12日には熊本大学法文学部井上辰雄教授が来訪された。

7月15日～20日、16～18日の三日間降雨があり作業が遅れることしきりである。

7月22日～27日、A地区の表土剝ぎ作業をひきつづき行い、第2号住居址はプランを検出したあと床面まで掘り込みを行う。また、A－4トレンチの東側の溝は、全体的に検出することができた。

7月29日～8月3日、表土剝ぎ作業を継続して行った。先週検出した溝を掘り込んだ結果、青磁片が出土する。調査地の「字」は「城丸」であり、中世遺構の可能性が非常に強いと思われるが、溝以外の遺構は認められない。8月2日には第1～第3号住居址の床面までの掘り込みと清掃作業を終了し、写真撮影も終えた。

8月5日～10日、第1～第3号住居址の実測と遺物のとり上げを行い、平板測量を行った。また近くの長谷寺の木造十一面観音立像と五輪塔の写真撮影を終える。

8月13日、調査現場から調査器材や遺物を撤収し、熊本県文化財収蔵庫に運び調査を終了する。

（江本）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置および立地

調査地は行政区、熊本県下益城郡小川町大字中小野字城丸・平ノ山・尾崎に位置し、国土地理院、昭和51年10月発行50,000分の1「八代」によれば、図幅の北から12.5cm・東から 4.5cmの交点にあたる。

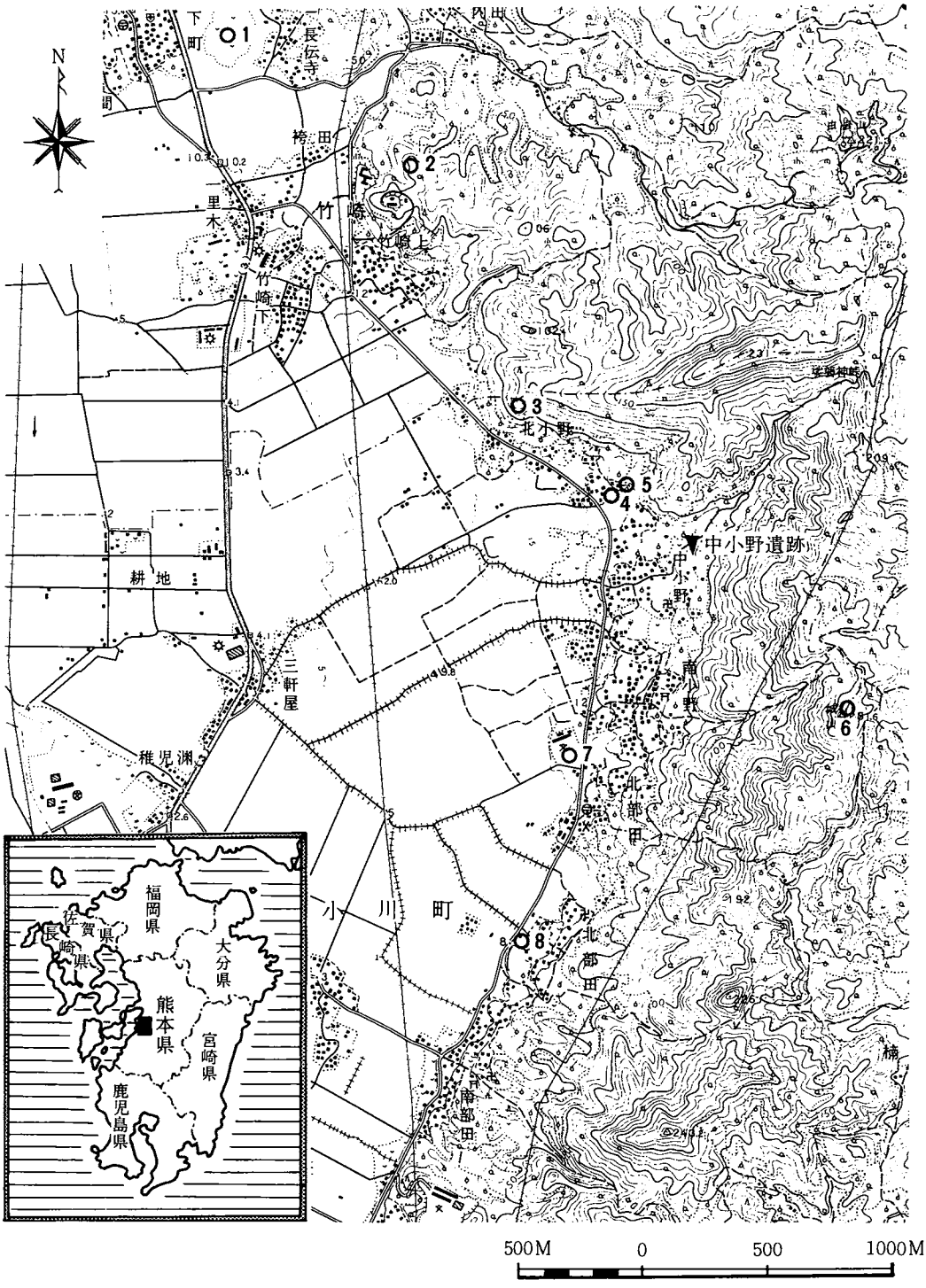
熊本市から小川町へは約30kmの距離があり、国道3号で南下すれば宇土市・松橋町を経て約40分で到着できる。調査地へは、途中、松橋町竹崎で国道3号から左手に折れ、細い山裾の旧道を南下して北小野を過ぎ、約2kmで中小野の集落に着く。この集落の東側が調査地である。

不知火海はもともと宇土半島の基部深くまで入り込んでいたもので、海岸線は国道3号付近まででであったといわれる。西および南側に広がる八代平野は、江戸時代の加藤清正時代や細川藩時代、さらには大正・昭和の現代に至るまで長く続けられてきた大規模な干拓事業によってなされたものである。広大な水田地では稲作はもとより蘭の栽培が最も盛んで、その生産量は全国一を誇っている。

東側は白岩山（221m）、城山（282m）、日岳（243m）などの小山塊によって閉ざされている。小川町付近の地質は中世代白亜紀の前期に属し、片麻岩と花崗岩との境界をなしているといわれる。また、城山の西麓からは、八代―田ノ浦へ約37kmに亘って日奈久断層線がつながっている。平野から急傾斜をもつ斜面は石垣をもって耕地化され、主に蔬菜や果樹が栽培されている。

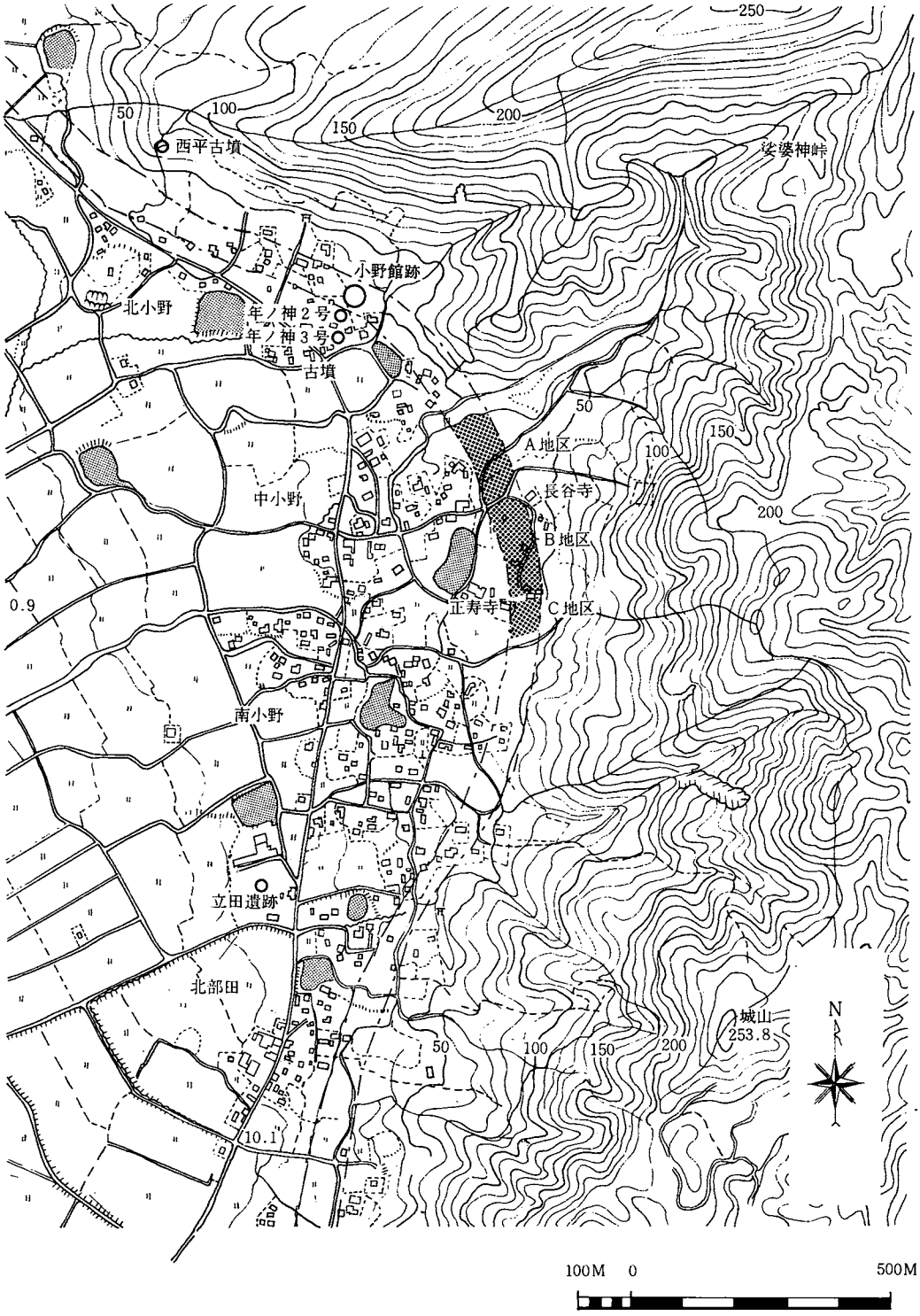
集落は、これらの山麓にでき、北小野、中小野、南小野、北部田、南部田、小川らの集落が形成されている。また、山麓と水田地との境を縫うようにして、薩摩街道と称される旧道が南北に走っている。

山麓一帯には多くの湧水池がみられ、飲料水などの生活水ともされるが、その多くは溜池に集められる。東側の断層崖から抜けでた河川に大野川・浅川・谷合川・砂川などがある。江戸時代をはじめとして現代まで続けられてきた干拓事業によって、水田の面積は大きく広がったが、これらをまかなうのには、以上の河川ではあまりに不充分である。したがって付近には、湧水を利用した溜池が多くつくられ、水の不足をおぎなっている。松橋町につくられた大規模な萩尾の溜池をはじめとして、竹崎の溜池、年の神溜池、池田溜池、榎原溜池、前田溜池、谷口溜池、立田溜池、瀬戸溜池、高倉溜池、魏田池などがつくられ、県内でも最も溜池の多い地域となっている。



1．豊福城跡　2．竹崎城跡　3．西平古墳　4．年ノ神１号古墳
5．年ノ神２号古墳　6．小野城跡　7．立田遺跡　8．高倉遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図　遺跡の位置と調査区

参考文献
原田敏明　「干拓および海岸線進展図」『歴史地図』文画堂　1957
江上敏勝　「原始」『竜北村史』　竜北村教育委員会　1973
桑原憲彰　「遺跡の地理的概況とその位置」『竹崎城』熊本県教育委員会　1975
熊本縣土木史　「熊本年鑑」　熊本年鑑社　1956
松本唯一ほか　「風土」『熊本県史総説編』熊本県　1965

2．周辺の歴史的環境

中小野遺跡の周辺遺跡について、宇土半島南基部にあたる下益城郡松橋町から小川町、さらに、砂川の左岸の八代郡竜北町付近までの範囲についてみてみたい。

縄文時代の遺跡について北からみると、まず松橋町古保山A・B・C遺跡[註1]が知られる。古保山遺跡は中小野遺跡と同じく、九州縦貫自動車道の建設に伴い、昭和47年、熊本県教育委員会によって事前の発掘調査が実施されたものである。遺跡はA・B・Cの三地区に分けられており、出土した遺物は、C遺跡からこの地方では最も古い早期の押型文土器が見られ、集石や土壙・柱穴などの遺構が検出されている。またA地区からは晩期土器の出土がある。古保山遺跡は海岸から約5km程内陸にはいった台地上にあり、海岸寄りの遺跡とは性格を異にすると理解しておきたい。

貝塚を見ると、松橋町大字曲野・曲野貝塚＝御領式、大字大野・松橋大野貝塚＝三万田・御領式、大字両仲間・仲間貝塚＝阿高式・石鏃、大字豊福・宮島貝塚＝轟・曽畑式・獣骨など、がある。出土した土器から見ると貝塚形成の時期は宮島―仲間―松橋大野―曲野貝塚という変移[註2]が一応考えられようが、前期から後・晩期と続いた状態を示し、時代が新しくなるにしたがい海岸近くから次第に台地へと上っていく傾向を示している。

小川町には、引地貝塚[註3]がある。

砂川の左岸、八代郡竜北町では、明治12年、E・モースが発掘を手がけた大野貝塚や、後期土器の型式名となっている西平貝塚をはじめ、四ツ江・土穴瀬・段貝塚[註4]がある。各々の貝塚の状況や出土遺物などについては、昭和48年4月に刊行された『竜北村史』[註5]に詳しいが、各貝塚の主な出土土器を記してみれば次のとおりである。

西平貝塚＝押型文土器、塞ノ神、並木、御手洗B、鐘ヶ崎、西平式

四ツ江貝塚＝轟、曽畑、阿高、南福寺、三万田式

土穴瀬貝塚＝阿高、御手洗A、出水式

段貝塚＝黒色無文土器

以上のように松橋、小川、竜北町の縄文時代については、早期では古保山C遺跡と西平貝塚に押型文土器の出土が見られる。前期には宮島貝塚と四ツ江貝塚から塞ノ神、轟、曽畑式土器

が出土し、今後、本格的な発掘調査が行われれば、従来問題になっている、塞ノ神、轟、曽畑式土器の前後関係を知る上に絶好の遺跡となるに違いない。中期には、大野、四ッ江、土穴瀬貝塚に阿高式土器の出土がある。後、晩期では出土数も多く、古保山A遺跡、松橋大野、西平、大野、四ッ江、土穴瀬貝塚から、南福寺、出水、御手洗A、鐘ヶ崎、西平、三万田、御領、黒川式土器が出土する。

これらの出土土器からみるとこの地区においては、県内に出土する縄文土器のほとんどが出土していることになる。その中で松橋町、竜北町に比べて小川町での貝塚が少ないことは特徴的である。

弥生時代では、海岸に面したところでの遺跡数は一般的に少ない。例にもれず、松橋町では前田遺跡や久具遺跡に可能性がもたれているにすぎない。小川町では高倉遺跡、小野立田遺跡[註6]に後期土器が出土しているが、詳細はわからない。竜北町では、近年、水田の圃場整備事業[註7]の際、後期の土器が確認され、現在の国道3号よりも西側の水田下に今後発見される可能性がでてきている。[註8]

次に古墳時代をみてみたい。松橋町では、著名な前方後円墳の松橋大塚があり、豊福古墳、狐塚古墳と続く。北・東部の台地にはいれば、その数は非常に多くなる。小川町では、北小野に年の神1・2号を含め3基の古墳がある。竜北町では、古式の土師器を出土し方形周溝墓の可能性がもたれる高塚東原[註9]をはじめ、壮大な前方後円墳の野津古墳群[註10]、大野窟古墳[註11]、装飾古墳[註12]の高塚古墳などがあり、南に続く宮原町から八代市へかけての山麓一帯にはさらに多くの遺跡が存在している。[註13]

中世時代については昭和50年、熊本県教育委員会が刊行した『竹崎城』[註14]に、周辺の中世関係の遺跡について詳しく報告されている。

松橋町に豊福城や竹崎城がある。豊福城は中世から近世にかけての過渡期の城郭で、石垣を有していたといわれ、外堀や内堀が残っている。名和氏と相良氏の領域支配と交通要衝地獲得のための攻防の地である。竹崎城は八代平野を一望のもとに見渡せる小高い山頂部に設けられたもので、頂上部に平場があり、望楼が築かれていたものと考えられている。このほか腰曲輪や重複帯曲輪状遺構群が設けられている。小川町では中小野遺跡から小谷をはさんで、すぐ近くにある北小野で中世の柱穴群が検出され小野館跡と考えられている。

以上のように周辺の遺跡を見ていると、縄文時代から古墳時代は、松橋町と竜北町にくらべて小川町は概して遺跡が少ない。とくに古墳は3基だけで、その数、規模ともに大きな差異がある。

この理由として、長期にわたって大規模な干拓が進められるにしたがい、遺跡の存在する台地が破壊されたのか、もしくは、東の山魄から流出した土砂、流水によって埋没や流されてしまったことなどが考えられよう。しかしながら古墳は、生活面よりもかなり高い位置に築造されるのが普通であり、流出したり埋没される可能性は少ないし、墓域として破壊されることも

少ないはずである。とすれば、縄文時代～古墳時代をとおして、小川町の当時の海岸地区には環境的に住みにくい状況があったのではないだろうか。

①山麓は急斜面で、生活面や耕作面が狭い面積であった。

②湿地や沼地を呈し、魚や貝類など獲得しにくいところである。

③山麓で崖崩れや山水による自然災害が多い。

④塩害のため水田耕作等の被害がある。

⑤砂川もしくは谷川等の氾濫原である。

以上のようなことが考えられるのである。それが古代もしくは中世時代等になり交通要路としての価値が高まり、また、ある程度の干拓や開墾が行われ、新たな時代を迎え、さらに江戸時代以降をとおして大規模な干拓事業が進み、今日の広大な平野が形成されたと思われるのである。註15

（江本）

註１．高木正文教示。昭和54年度、報告書刊行予定。

註２．「熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表」 昭和51年度、熊本県教育委員会　1976

註３．註２に同じ

註４．富田紘一「旧石器・縄文時代の熊本」『新熊本の歴史１』熊本日日新聞社　1978

註５．江上敏勝「原始」『竜北村史』竜北村教育委員会　1973

註６．村井真輝教示

註７．註２に同じ

註８．昭和52年度に行われた野津地区の水田の圃場整備の時に発見される。

註９．富樫卯三郎、松本雅明「小川町年ノ神古墳一二十体近くの人骨の出土」『熊本史学第15・16号』1959

註10．花岡興輝「八代郡龍北村における土師器埋没遺跡について」『熊本史学第11号』1957

註11．乙益重隆、石人石馬研究会他、「野津古墳群」『五ッ穴横穴群』附論２　熊本県教育委員会　1979

註12．三島格「大野窟古墳」『五ッ穴横穴群』附論３　熊本県教育委員会　1979

註13．江上敏勝「原始」『竜北村史』竜北村教育委員会　1973

乙益重隆「通史」『宮原郷土誌』宮原町公民館　1959

井上辰雄『火の国』学生社　1970

松本雅明・乙益重隆『竜峰村史』竜峰村史跡研究会　1961

村井真輝・島津義昭他、『五ッ穴横穴群』熊本県教育委員会　1979

江本直『立神ドトク遺跡』熊本県教育委員会　1979

註14．桑原憲彰・田辺哲夫他、『竹崎城』熊本県教育委員会　1975

註15．村井真輝との討議をもとにしてまとめたものである。

第Ⅲ章　遺跡の調査

1．調査地の状況と各トレンチの設定

調査地を北側から見るとSTA 39＋00は丁度谷合川の中央部にあたる。北側は狭い水田を挾み、北小野集落の民家へとつながっている。この谷合川は東側の山麓で集まった山水が流れだすもので、通常はさしたる水量はないが、梅雨時や大雨の時は多量の水が流れる。水とともに流れる砂礫による被害をなくすため、調査地の東側には砂防ダムが設けられ災害を防いでいる。少量ながら、溜池的性格も有している。STA39＋80には娑婆神峠越えの県道「下郷」―「北新田」がある。以前は牛馬車でも峠越えの往来がなされていたが、現在は、峠付近は人がやっと歩いて通れる程度に荒れている。2ヵ所にメガネ橋をつくり、石畳をなして頻繁な往来のなされていた以前のおもかげは感じられない。この谷合川と県道とにはさまれた部分は「字」は「城丸」で、海抜約34～36mにあたり平地をなしている。数枚の畑地に区切られ、調査にはいる前までは葡萄、蜜柑、蔬菜が植えられていた。

この県道の南側約80m地点に里道があり双手に分かれている。一方は、長谷寺の木造十一面観音立像が置かれ孝子源四郎の碑がある御観音堂へと続いている。この道の両側は急斜面につくられた段々畑があり、蜜柑の栽培がなされている。右手の里道は左に長谷寺を通り、中小野の集落の最も高い位置にある民家へと通じている。この県道「下郷」―「北新田」と御観音堂へと通じる里道とにはさまれた部分は、北側が水田、南側が一段高くなった蜜柑畑である。水田については、小谷をなしていたところであり、遺構の存在は考えられなかった。南側は一段高くなっており、トレンチを設け調査を行った。

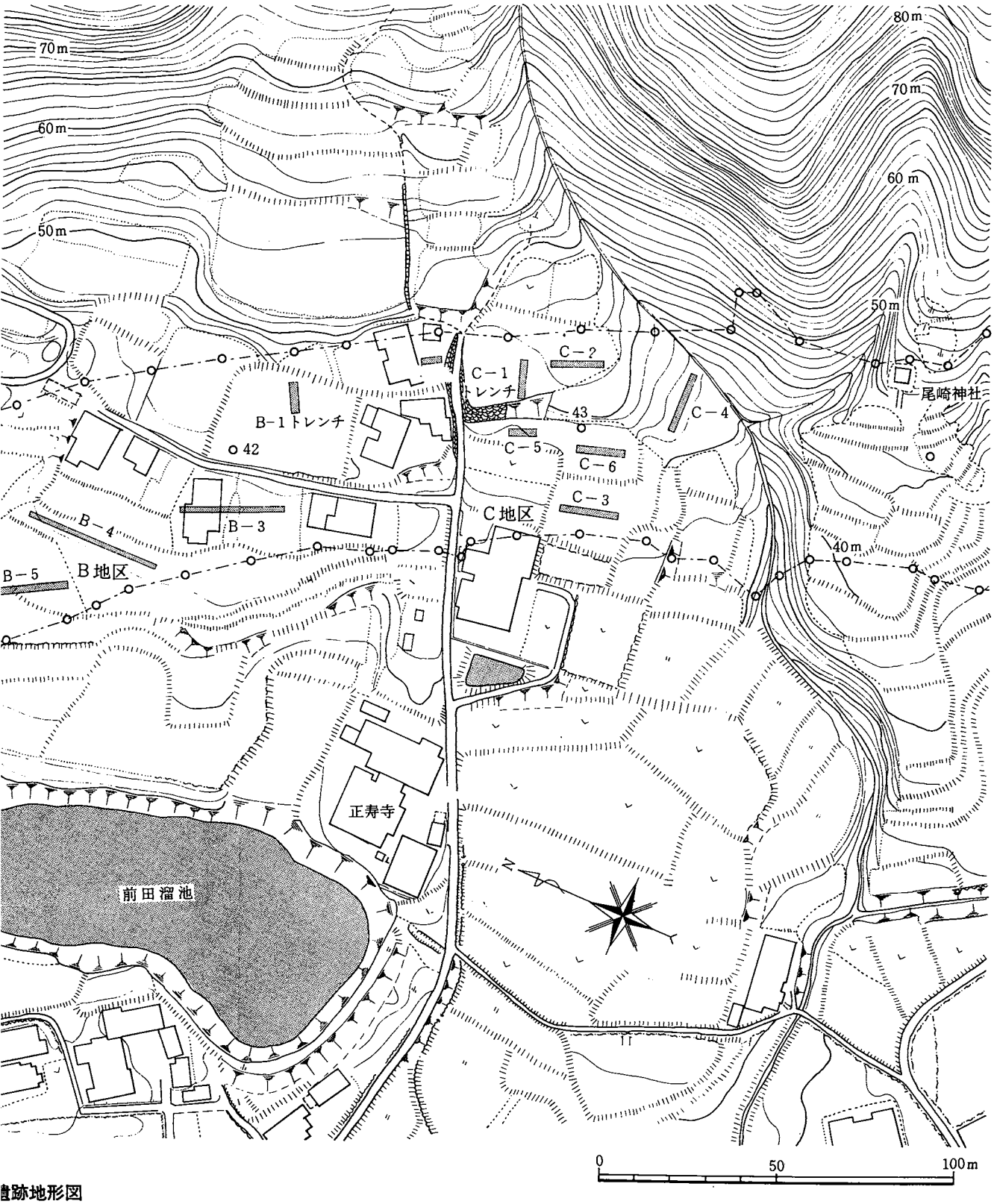
以上のように北側は谷合川そして南側は御観音堂へと通じる里道とにはさまれた部分をA地区と仮称した。

B地区は御観音堂へ通じる里道からSTA42＋60にある里道までとした。範囲としては非常に広いが、傾斜がかなり急な処に宅地や畑地がつくられている。したがって遺構や遺物の出土しそうなところは少ないが、STA41＋40の西側の畑地に可能性がもたれ、B―3・B―4トレンチを設定した。このほか、STA42＋20の崖面に貝殻がみられ、貝塚の可能性を持つことから、調査が必要と判断し、トレンチを設定した。またSTA42＋40～60の東の宅地の平場にB―1トレンチを設定した。

C地区は正寿寺から真東に登る里道から南側のSTA 43＋40の斜面上までとした。里道は真東に登るが、宅地を過ぎると双手に分れ急斜面に造成された蜜柑畑や墓地へと通じる。細い道で車の通行はできず、作物は人的運搬によらざるをえない。里道の両側には高い石灰岩を積み

県道下郷北新田
長谷寺
五輪塔
41
40
A−1トレンチ
A−2
A−3
A−4
A−5
A−6
A地区
37.5m
STA39+00
谷合川

第3図


80m
70m
60m
50m
40m
C−2
C−1
トレンチ
43
C−4
尾崎神社
B−1トレンチ
42
C−5
C−6
C−3
C地区
B−4
B−3
B−5
B地区
正寿寺
前田溜池
N
0
50
100m

遺跡地形図

上げた石垣がある。この石垣の南側への伸びは短く、十数mにすぎず、この石垣が切れた崖面に貝殻の露出がみられた。付近には縄文時代等の遺物は見られず、中世時代のものと思われた。この崖上における貝層の広がりを調べる目的でC—1・C—2トレンチを設けた。またC—2トレンチ付近はいく分高くなっており、作物も植えられず、荒地の状況を呈していた。この処を荒すと祟があるとされるところで、古墳もしくは墓地の可能性がもたれた。C—3・C—5・C—6トレンチでは斜面下における貝層の範囲を調べることを目的とした。C—4トレンチは南への傾斜面に造られた畑地に設けた。このC—4トレンチから南側は急斜面で落ちこんでいる。谷を越えた台地上には尾崎神社が祀られている。

2．A地区の遺構と遺物

A地区では3軒の住居址と溝を検出することができた。3軒の住居址はSTA 39+40の中心線をはさんだ両側に出土し、中心線から西側約15m地点に第1号住居址と第2号住居址とが南北に並び、中心線から東側約10m地点に第3号住居址が出土した。本来的には、これら3軒の住居址のほかにかなりの数にのぼる住居址が存在していたものであろうが、開墾や整地および耕作等によって消失したものと考えている。とくにSTA 39+50から南側は約50cm程段落になっており、南側の低い部分に客土し整地したものと考えられ、その際に住居址は消滅した可能性が強い。

第3号住居址は北側の約半分が崖のため失くなっているが、少なくともこの住居址が営なまれていた時においては、北側に平地が続いていたものである。谷合川の浸蝕によってこの部分が崩れて、現在の形状を呈したもので、十数mの幅で崩れさったものと推定され、その間に住居址が存在したであろうことは、充分考えられるものである。

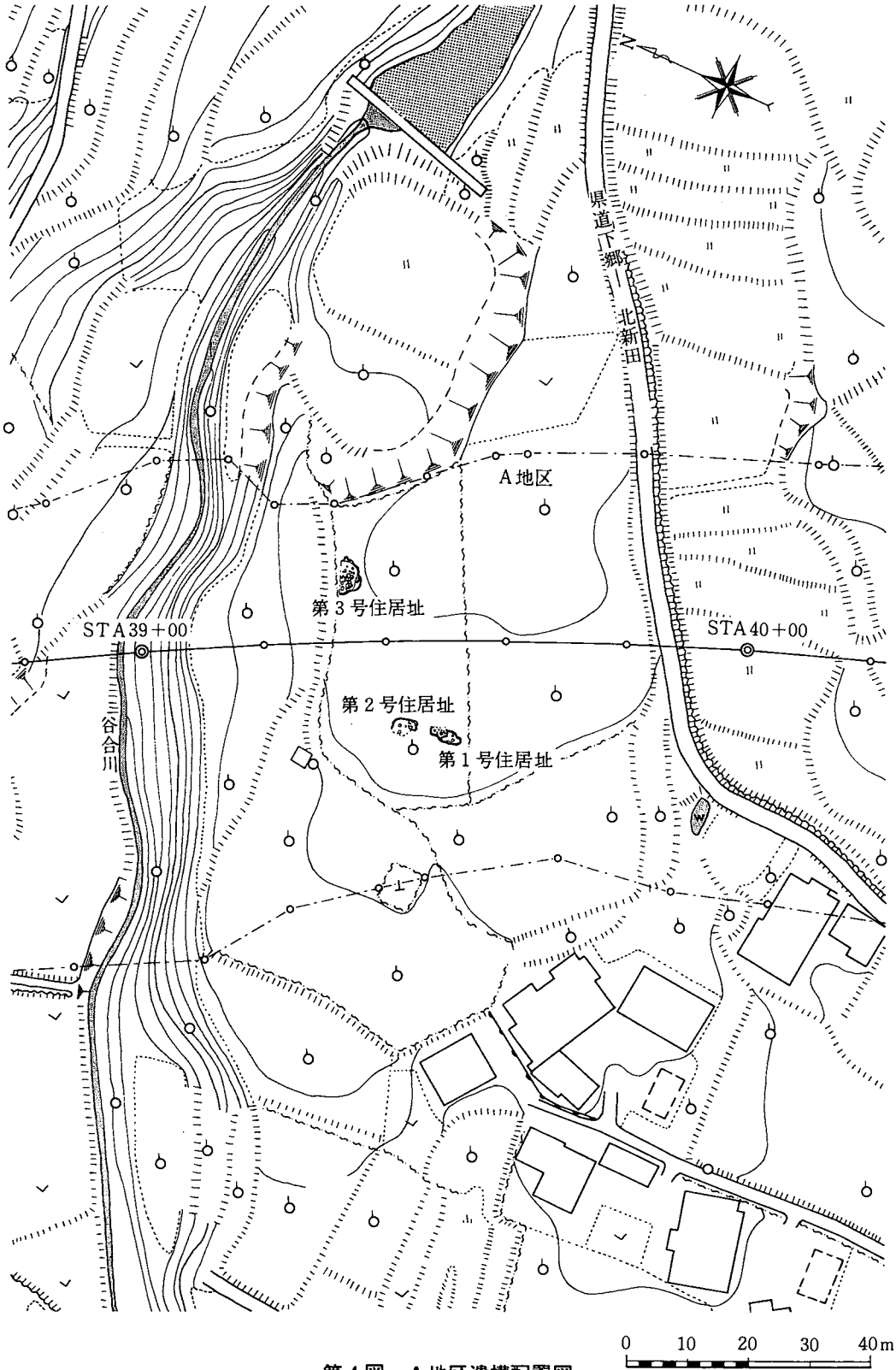
溝状遺構はSTA 39+60の中心杭から約1m東側を南へ流れており、蛇行する不規則な形状を呈している。底の一部が残っているだけであった。STA39+50付近から南側の段落ちは、溝状遺構がつくられていた時代以降になされたもので、この削平のため、そのほかの遺構の検出はできなかった。

なお、県道下郷—北新田と御観音堂への里道との間においてもうけたA—5～A—6トレンチには、遺構・遺物の出土はみられず、調査は行われなかった。

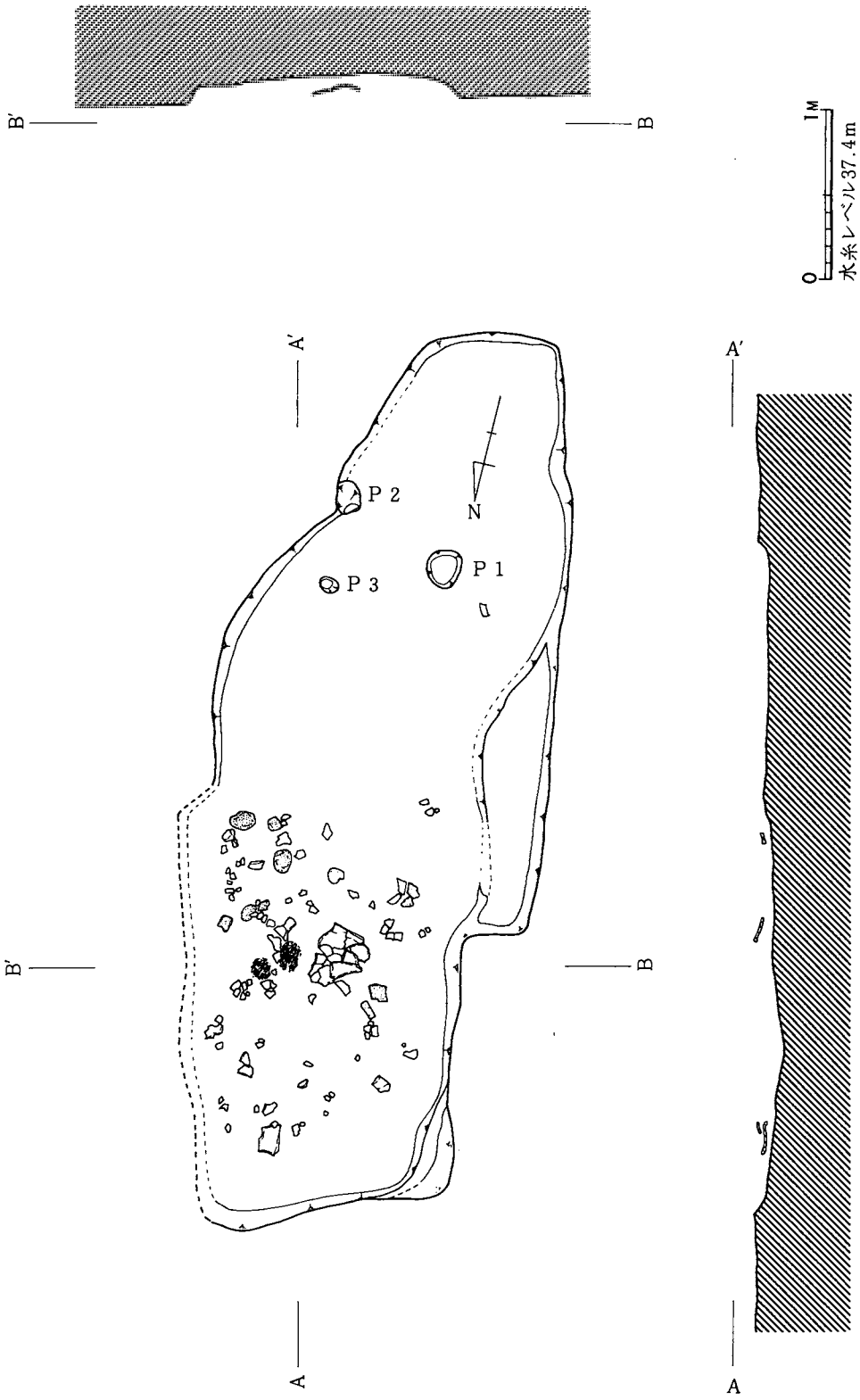
以下、第1号～第3号住居址と溝状遺構の状況および遺物について報告したい。

第1号住居址

第1号住居址の中心点はSTA 39+50.5の中心線から西15.8m地点に位置している。不規則な形状を示すが、北側の方形プランを呈する部分で主軸をとればN—14°—Eをなす。不規則と称した形状は北側に方形、南側に三角形状のいびつなプランで2軒の住居址が重なっているか



第4図　A地区遺構配置図



第5図　第1号住居址実測図

にある。住居址の東西両側には深い耕作の溝が走り、その間にきわどく残されたものであるが、東側も一部こわされている。一応、1軒の住居址として報告すれば、南北5.08m、東西2.09mを測るが、住居址としてさしたる大きさはもたない。住居址の内側に柱穴状の3個のピットが認められ、P1～P3の直径はそれぞれ23cm、20cm、11cmで、同じく深さは25cm、18cm、15cmを測る。住居址の外側には認められていない。

上面のほとんどが削平され、床面までは非常に浅く、最も深いところで15.6cmを測る程度である。床面は堅く踏み固められた状態を呈している。

遺物が出土したのは、北側の方形プランをなす部分が多く、狭い面積の中にかなり密集した状態で出土しており、床面直上での出土状態を示している。遺物の種類としては土師器の甕・壺・高坏・須恵器の坏蓋とがあり、実測が可能な12点を第6･7図に示した。土器のほかでは焼土やカーボン、それに河原石が土器と同じく北側部分に見られた。出土した遺物について述べれば次のとおりである。

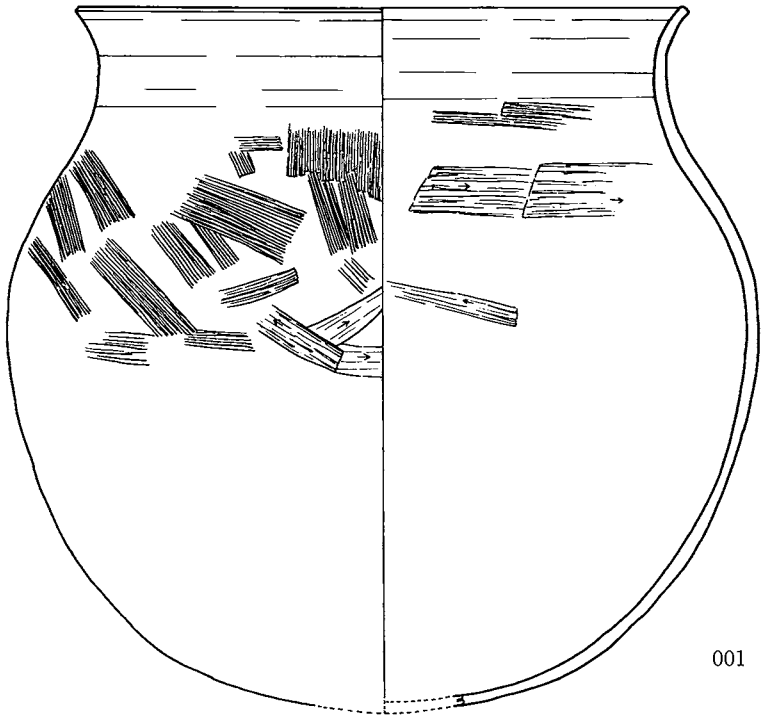
(001)大型の甕で口径24.7cm、器高は推定で28.0cmを測る。口縁はゆるやかに外反し、胴部は大きくふくらみ底部へと続く。底部を欠失しているが、まるくおさまるものであろう。口唇部はまるみをもつ。器厚は頸部から胴部が厚く5mmで、胴部下半から底部に下がるにしたがい薄くなっている。

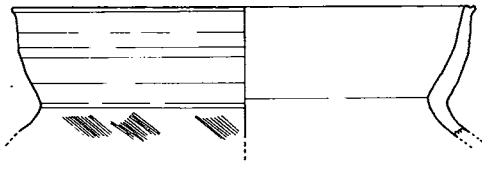
内面は頸部から胴部にかけて横方向を主調としたヘラ削りで、底部近くでは縦方向に行われている。外面はヘラ削りによる調整痕も認められ、そのあとハケ目調整を行っている。頸部付近は丁寧な仕上げである。外面のほぼ全面にわたって煤の付着がある。色調はにぶい赤褐色を呈し、砂粒混じりの胎土で、焼成良好である。

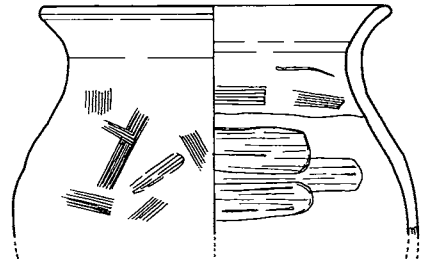
(002)壺の口縁部片で、口径は推定で18.6cmである。内弯しながら外反する口縁で口唇部は一条の線がはしり、断面は凹状を呈する。外面は頸部にハケ目調整が見られ、内面は手なで調整である。外面の色調は橙色で内面はにぶい黄橙色を呈する。胎土には砂粒が混じり焼成は良好であるが、器面は荒れている。

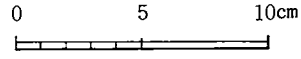
(003)壺の口縁から胴部近くまでの破片である。口径は推定で14.1cmを測る。口縁は外弯ぎみに外反し口唇部は丸みをもっている。外面は頸部から胴部にかけてハケ目による調整があり、口縁では手なでの跡が横にはしる。内面は横方向のヘラ削りを行ったあと手なでによる調整を行っている。色調は外面が明赤褐色、内面は橙色を呈する。胎土には砂粒が混じり焼成は良好である。器面の荒れは少ない。

(004)高坏の坏部である。口径は推定で14.7cmを測る。ほぼ直線の体部から折れて短い外反ぎみの口縁がつき端部は細くなっている。脚部は欠失している。外面には細かなハケ目調整が行われて胴部は縦方向、口縁部は横方向を主調としている。内面にも細かなハケ目調整がみられる。色調は浅黄橙色を呈する。砂粒の少ない良質の胎土を使用し、焼成が弱く器面が荒れてい

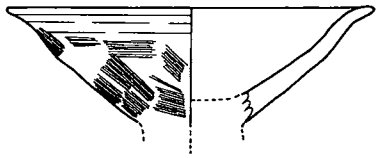




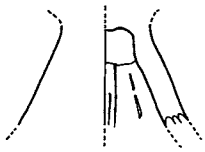




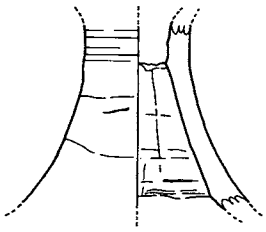
第 6 図　第 1 号住居址出土土器実測図（001～003）



004

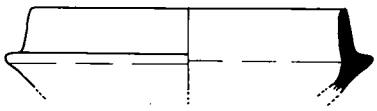


006

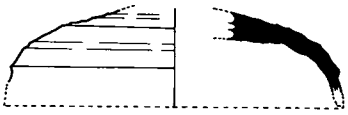


005

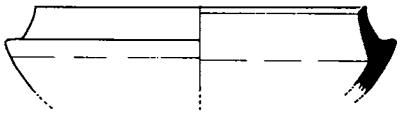
009



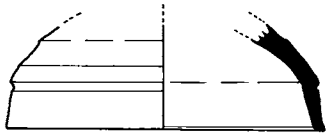
010



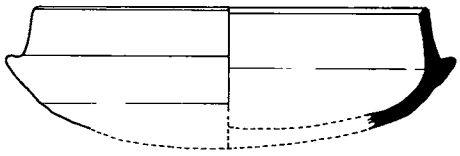
007



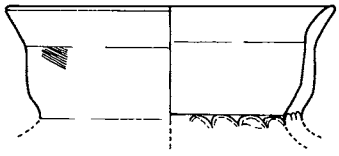
011



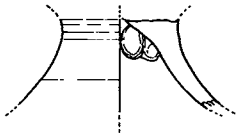
008



012



013



014

0 5 10cm

第7図　第1号・第2号住居址出土土器実測図（004～014）

る。

(005) 高坏の脚部片である。筒部の外面は手なでされ、内面はヘラ削りされている。色調は橙色を呈する。砂粒の少ない良質の胎土を用い焼成も充分である。

(006) 高坏の脚部片である。筒部の外面は手なでされ、内面はヘラ削りされている。色調は橙色を呈する。砂粒混じりの胎土で焼成は充分である。器面や割れ口は摩滅が進んでいる。

(007) 須恵器坏蓋の蓋である。推定で口径13.6cm、器高4.0cmを測る。器高は比較的高く、天井項部は平らに近い。体部は内弯しながら口縁部につづき、体部と口縁部は外面の稜によって分けられる。その稜は短く丸い。口縁部は外反して下り、端部は丸い。外面は天井部から稜近くまで回転ヘラ削り調整で、他は回転ナデ調整を行っている。内面は回転ナデ調整である。胎土はやや粗で細かな砂粒を含んでいる。焼成はやや弱く、色調は内外面とも青灰色を呈する。

(008) 須恵器坏蓋の蓋片である。口径は推定で11.7cmを測る。器高は高く、内弯しながら口縁部につづく。稜はなく一条の沈線がなされ、口縁は内弯ぎみに下がっている。口縁部端部は内傾する段を成す。天井部外面は約$\frac{3}{4}$が回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。胎土はやや密であるが、焼成はやや不充分で、表面は摩滅がみられる。色調は内外面とも灰色を呈する。

(009) 須恵器坏蓋の身片である。口径は推定で11.7cmを測る。たちあがりはやや内傾してのび、端部は内傾する段を成す。受部は水平にのび、端部は断面三角形をなす。内外面には回転ナデ調整が見られる。胎土はやや粗で白色砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。色調は内外面とも青灰色を呈する。

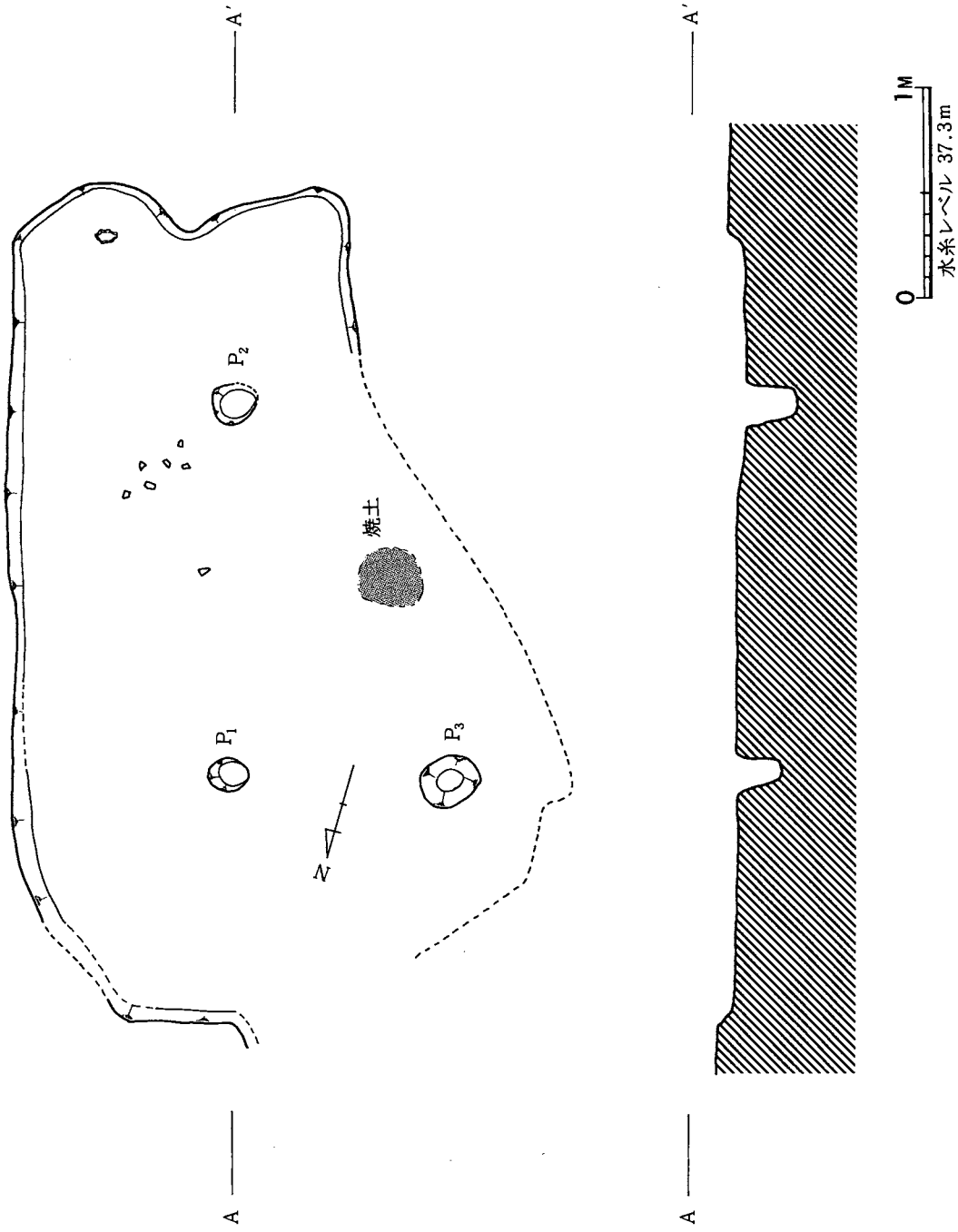
(010) 須恵器坏蓋の身片である。口径は推定で12.6cmを測る。たちあがりはやや内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび端部は丸みをもつ。内外面には回転ナデ調整が見られる。胎土はやや密で、焼成はやや不充分である。色調は内外面とも灰褐色を呈する。

(011) 須恵器坏蓋の身片である。口径は推定で13.3cmを測る。たちあがりは外弯ぎみに内傾してのび、端部は丸みをもつ。受部はほぼ水平にのび、端部は断面三角形をなす。内外面には回転ナデ調整が見られる。胎土はやや密で微砂粒を含んでいる。焼成は不充分で器面はもろい。色調は灰白色を呈する。

(012) 須恵器坏蓋の身片である。口径は推定で15.7cmを測る。たちあがりは内傾して上方にのび、端部は内傾する段を有する。受部はやや上外方へのび、端部は丸みをもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整をなし、他は回転ナデ調整である。胎土はやや粗で微砂粒を含んでいる。焼成はやや不充分で、器面は荒れている。色調は内外面とも灰白色を呈する。

第2号住居址

第2号住居址は第1号住居址の北約2m地点に位置している。第1号住居址と同じく不規則で多くの部分が壊されている。残された部分で主軸を求めればN—30°—Eをなす。形状は不規則で北側と東側にコーナを認めることができるのでいびつな方形を呈するものと考えている。



第 8 図　第 2 号住居址実測図

第 9 図　第 3 号住居址実測図

推定で南北4.2m、東西2.7m程度の大きさを有していたものであろう。住居址の内側には3個の柱穴が認められP1～P3の直径はそれぞれ18cm、20cm、29cmで、同じく深さは－20cm、－24cm、－10cmを測る。住居址の外側には認められない。壁はほとんどが破壊されてしまっており、東壁が一応確認できる程度である。床面も10cm弱が残されている程度である。床面は堅く踏み固められた状態を示している。

遺物の出土は非常に少なく、東側に土師器片が若干出土したにとどまった。床面上には一部焼土が認められた。出土遺物は次の2点が実測可能であった。

(013)土師器の壺の口縁部片である。頸部から内弯しながら立ち上がり、途中からさらに外反している。口唇部は丸みをもっている。内外面とも手なで調整が見られる。胎土には白色砂粒が多く混じり、焼成良好である。色調は明褐色を呈し、外面には煤の付着がある。ただしこの煤は割れ口にも認められることから、破片となったあとに煤が付着したものである。

(014)土師器の高坏片である。坏部との接合部分からすぐ下の部分にあたる。裾部以下を欠失。筒部上部には坏部と接合した際の指圧痕が残っている。外面にはハケ目調整と横ナデ調整が行われているが、回転ナデ調整であろう。内面は手なで調整が見られる。胎土は砂粒混じりで、焼成良好である。色調は明赤褐色を呈する。

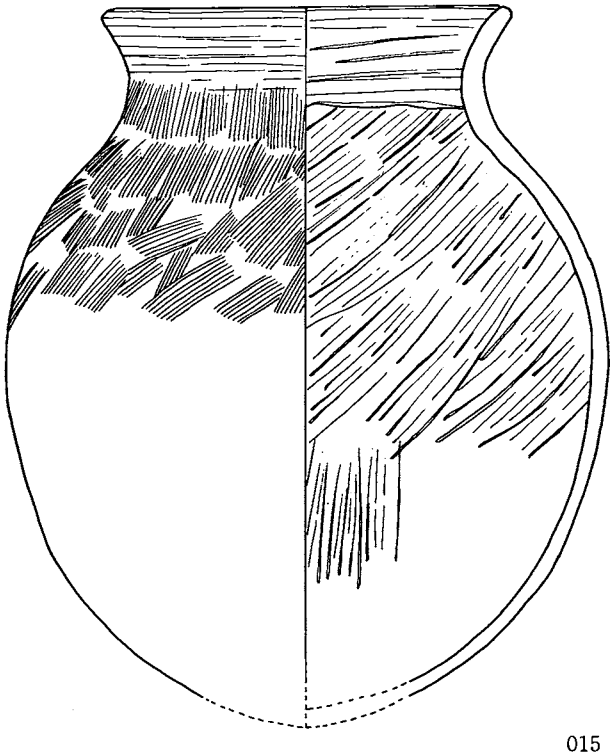
第3号住居址

第3号住居址は第1号・第2号住居址から東側約25m地点に位置している。形状は隅丸方形で、主軸はN－44°－Eをなす。北側の約$\frac{1}{3}$を失しているが、南側と東側のコーナを確認できた。長軸の大きさは5.08mで、短軸は3.5～3.6mと推定される。壁面は南側が比較的残っており約20cmを測る。南側のコーナ付近は不規則な形状でいくぶん高くなっていた。住居址の内側に3個の柱穴が認められ、P1～P3の直径はそれぞれ31cm、19cm、21cmで同じく深さは－25cm、－20cm、－16cmを測る。柱穴は住居址の外側では検出できなかった。床面は黄褐色粘質土層でやや凹凸があり、乾燥すると非常に固い。東隅近くに三角形状を呈するピットがあり、皿状に掘り込まれ、最も深いところで－20cmを測った。

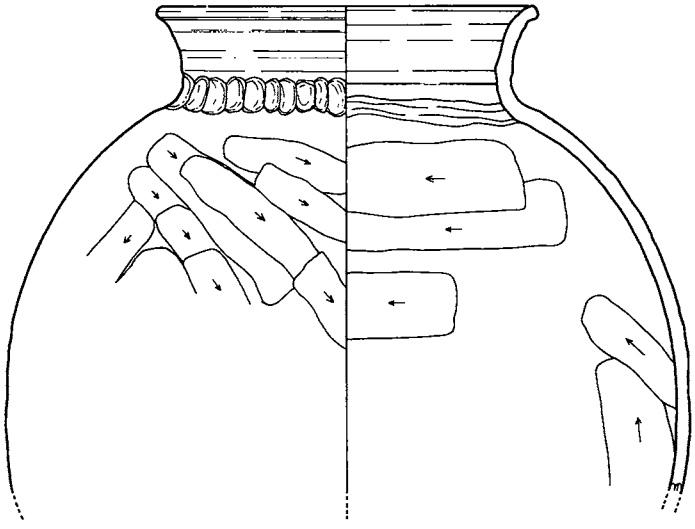
床面上から多くの遺物が出土した。須恵器の坏蓋は西壁近く、また土師器高坏の坏部は南隅近くから出土した。このほかは、ほとんどが破片となって散乱しており、20～30cm大の河原石も見られた。同じように皿状のピット内にも土器破片と河原石が見られた。南隅や皿状ピットの外側には焼土とカーボンが認められた。出土した遺物は次のとおりである。

土師器（015～031）

(015)ほぼ完形に復原できる壺である。口径は16.5cmで、器高は推定で28.6cmを測る。頸部が厚く外反した口縁で、口唇部は丸みをもっている。外面はハケ目調整が見られ、内面はヘラ削り調整があり、底部から胴部にかけては縦方向、胴部から頸部へは斜方向に行われている。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が混じり、焼成は良好である。



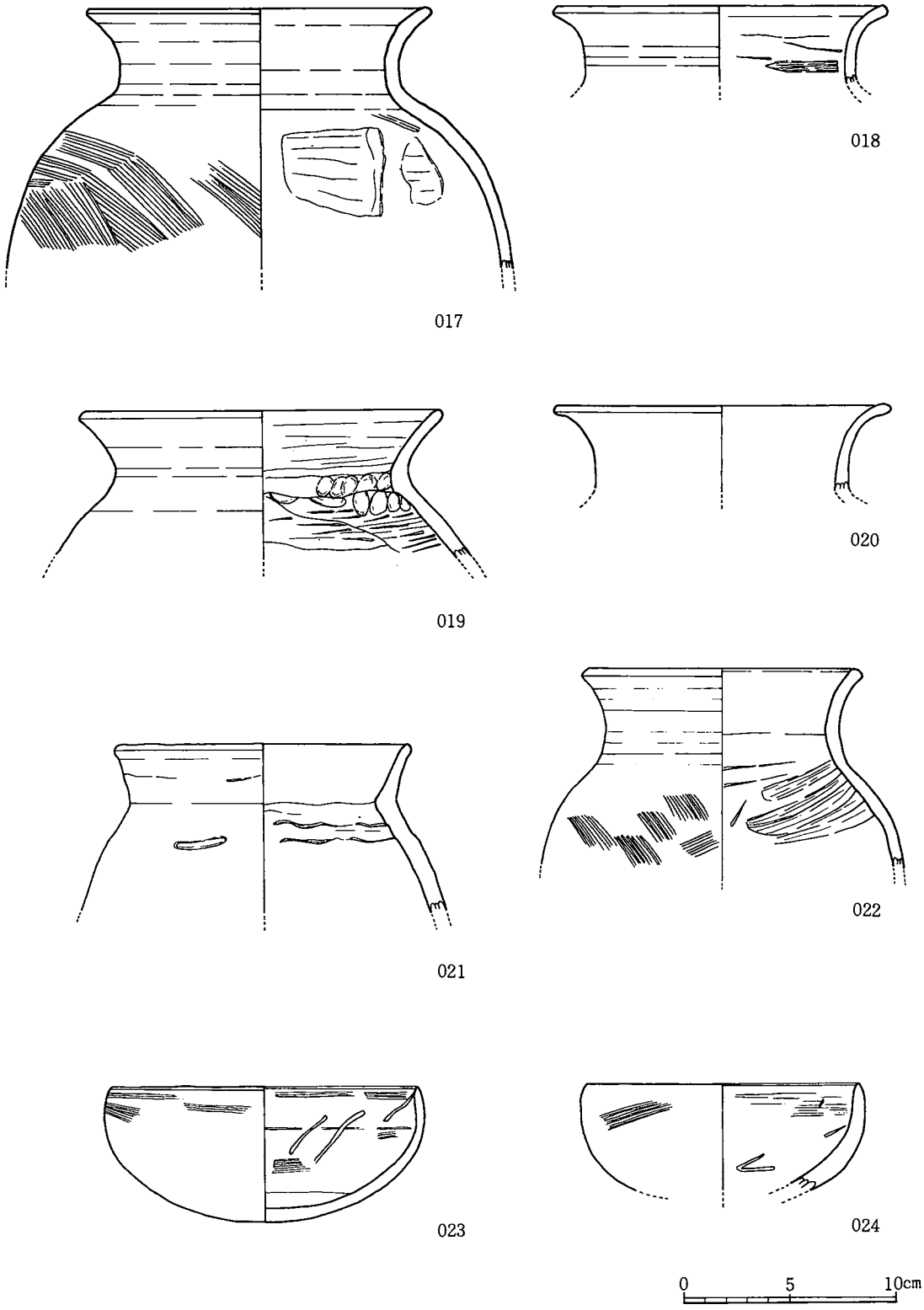
015



016

0 5 10cm

第10図　第３号住居址出土土器実測図（015・016）



第11図　第３号住居址出土土器実測図（017～024）

(016)胴部以下を欠失した壺で口径は15.3cmを測る。口縁部は外弯ぎみに外反しており、口唇部は丸みをもっている。外面はヘラなで調整が行われ、頸部には接合を行った指圧痕が見られる。内面はヘラ削り調整で胴部下半には縦方向、胴部から頸部にかけては横方向に行われている。色調は外面が暗赤褐色で内面は明赤褐色を呈する。胎土は砂粒混じりで焼成は良好である。

(017)胴部以下を欠失した壺で、口径は16.4cmを測る。口縁部は外弯ぎみに外反しており、口唇部は丸みをもっている。外面は粗いハケ目調整を行い、内面はヘラ削り調整のあと手なでを行っている。色調は明赤褐色を呈する。胎土には多くの砂粒が混じり、焼成は良好である。器面は荒れている。

(018)壺の口縁部である。口径は推定で15.8cmを測る。外弯ぎみに外反し口唇部は丸みをもっている。外面、内面は手なで調整が行われている。色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい赤褐色を呈する。砂粒混じりの胎土で焼成は良好である。

(019)甕の口縁部である。口径は17.3cmを測る。頸部が厚く外反した口縁で、口唇部は丸みをもっている。内面はヘラ削り調整を行っている。頸部には接合の際の指圧痕が残っている。色調は外面が浅黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。胎土には砂粒が混じり、焼成は良好である。器面は荒れている。

(020)壺の口縁部である。口径は推定で16.0cmである。外弯ぎみに外反し、口唇部は丸みをもっている。外面、内面は手なで調整が行われている。色調は暗褐色を呈し、砂粒混じりの胎土で、焼成は良好である。器面は荒れている。

(021)甕の口縁部である。口径は推定で14.1cmを測る。頸部が厚く外反した口縁部で口唇部は丸みをもつ。内面にヘラ削り調整が認められ、10mm内外の幅をもつ粘土紐の巻上げの接合も観察できる。色調は橙色を呈する。胎土は砂粒混じりで焼成はやや不充分である。器面は荒れている。

(022)胴部以下を欠失した壺である。口径は13.3cmを測る。頸部が比較的長く、外弯ぎみに外反した口縁で、口唇部は丸みをもっている。外面は櫛目調整を行い、内面はヘラ削り調整を行っている。色調は明赤褐色を呈する。胎土には砂粒が多く混じり、重たく感じられる。焼成は充分であるが、器面には荒れがみられる。

(023)埦形土器で口径14.6cm、器高6.4cmを測る。体部上半からややふくらみをもち内傾し、丸みをもった底部である。口縁部は先細り、口唇部は丸みをもっている。外面、内面は手なでのあとが残る。一部ひっかき痕がある。色調はにぶい橙色を呈する。密な胎土で微砂粒を含み、焼成はやや不充分である。器面は荒れている。

(024)埦形土器片で、口径は推定で13.1cmを測る。口縁部は体部上半からほぼ垂直に立ち上がる。体部はぶ厚く、口縁部へ先細りになる。口唇部は丸みをもっている。外面、内面に手なで調整を行っている。色調は明赤褐色を呈する。密な胎土で微砂粒を含み、焼成はやや不充分で

ある。器面は荒れている。

(025)埦形土器で口径は推定で15.4cmを測る。体部が深く、口唇部は丸みをもっている。内面は手なで調整を行っている。色調は明褐色を呈する。胎土には多量の砂粒が混じり、焼成は良好である。

(026)埦形土器片である。体部上位に稜を有し外弯した口縁部である。口唇端部は細く、丸みをもっている。外面、内面は手なで調整を行っている。色調は橙色を呈する。胎土は密であるが、焼成はやや不充分で、器面は荒れている。

(027)埦形土器片である。体部上位から屈曲しほぼ垂直に口縁部が立ち上がる。口唇部は丸みをもつ。外面はヘラ削り調整を行い、内面にはハケ目調整と手なで調整を行っている。色調は橙色を呈する。胎土は密で焼成は良好である。

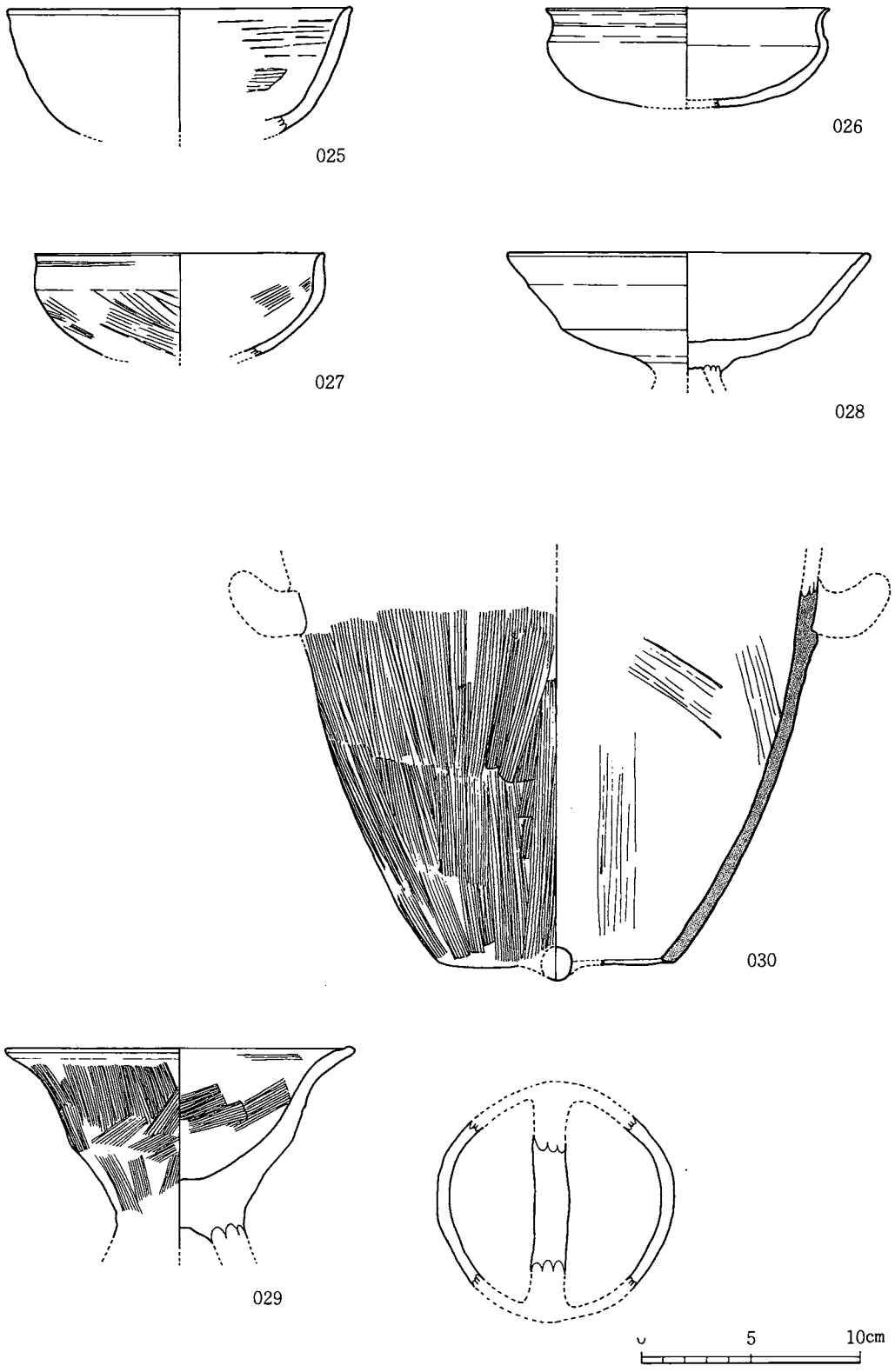
(028)高坏の坏部である。口径は16.7cmを測る。脚部は欠失している。坏部は上半部と下半部とを接合したもので、接合部には稜を有する。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。外面、内面には手なで調整が行われている。色調は明赤褐色を呈する。胎土には多量の砂粒が混じり、焼成は良好である。器面は荒れている。

(029)高坏の坏部である。口径は16.1cmを測る。脚部は欠失している。坏部の上半部と下半部との接合はなく、また、坏部と脚部との接合部分もなく、接合することなく一度につくられたものである。坏部の口縁は体部中半からくねりながら外反している。端部は丸みをもっている。外面、内面は櫛目調整と手なで調整を行っている。色調は明赤褐色を呈する。胎土には多くの砂粒が混じり、焼成は良好である。

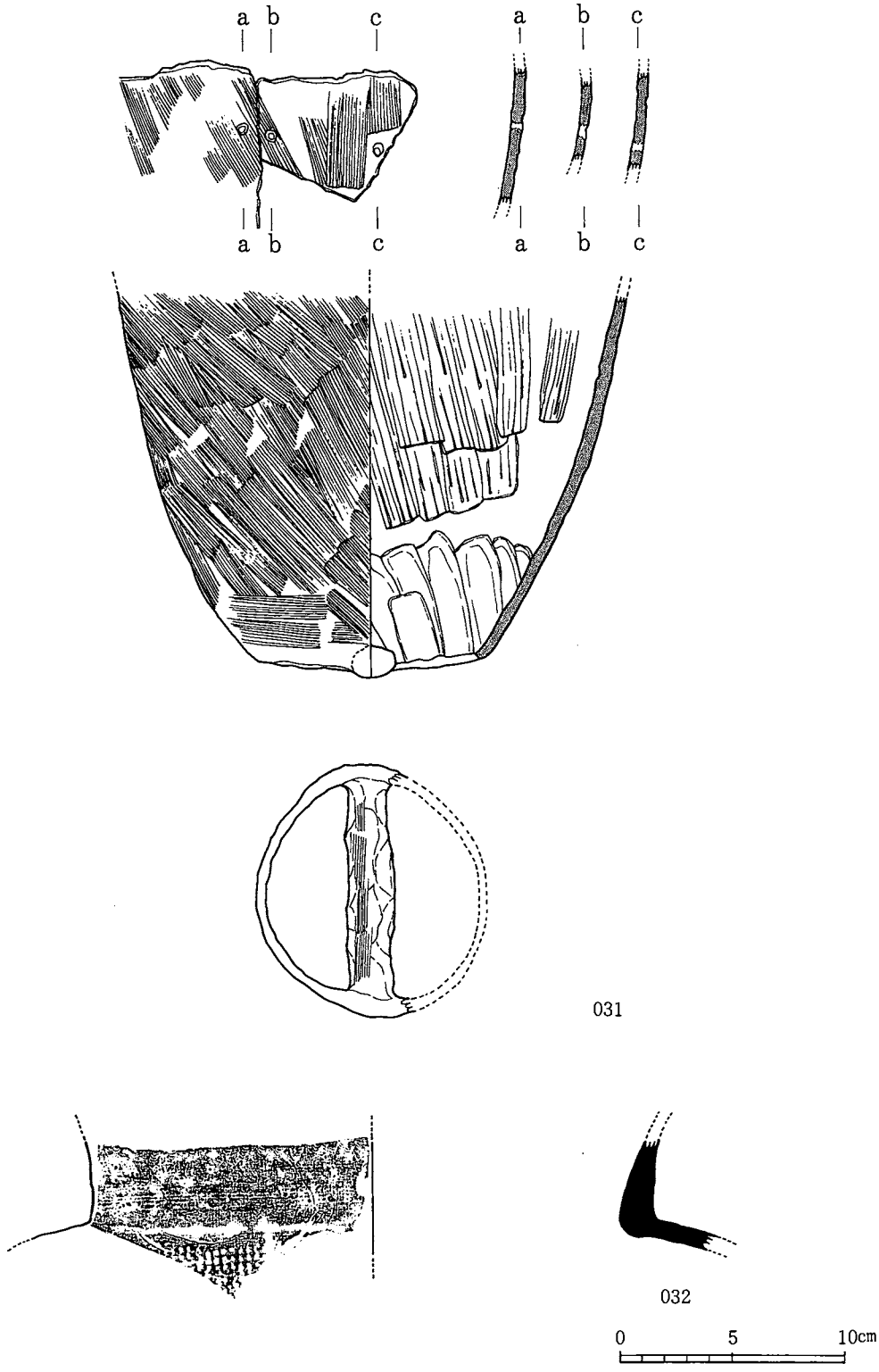
(030)甑である。把手の接合部分から上部を欠失している。底部径は推定で11.0cmを測る。胴部は底部からやや内弯しながら立ち上がっている。底部の中央にブリッジを通し、二孔を設けている。中央のブリッジはいびつな形状を呈するが、直径は1.5～1.6cmを測る。外面は縦方向を主調とした綿密な櫛目調整を行っている。色調は赤褐色で部分的には極暗赤褐色を呈する。胎土は砂粒混じりで3～4mmの大きなものも含まっている。焼成は充分である。

(031)甑である。胴部から上半を欠失している。底部径は11.2cmを測る。胴部は底部からやや内弯しながら立ち上がっている。底部径は11.2cmを測り、端部は丸みをもっている。底部の中央にブリッヂを通し二孔を設けている。中央のブリッジの直径は2.1cmである。手でにぎって整形したあと櫛目調整を行っている。外面は底部近くが横方向で、脚部は斜方向を主調とした綿密な櫛目調整を行っている。内面は底部近くは、手でおさえて調整し、脚部は縦方向でヘラ削り調整を行っている。器厚は最大で7mm程度で全体的に薄い。なお、3個の補修孔が穿たれている。色調は褐色および黒褐色を部分的に呈している。胎土には多量の砂粒が混じり、焼成はやや不充分で器面に荒れが見られる。

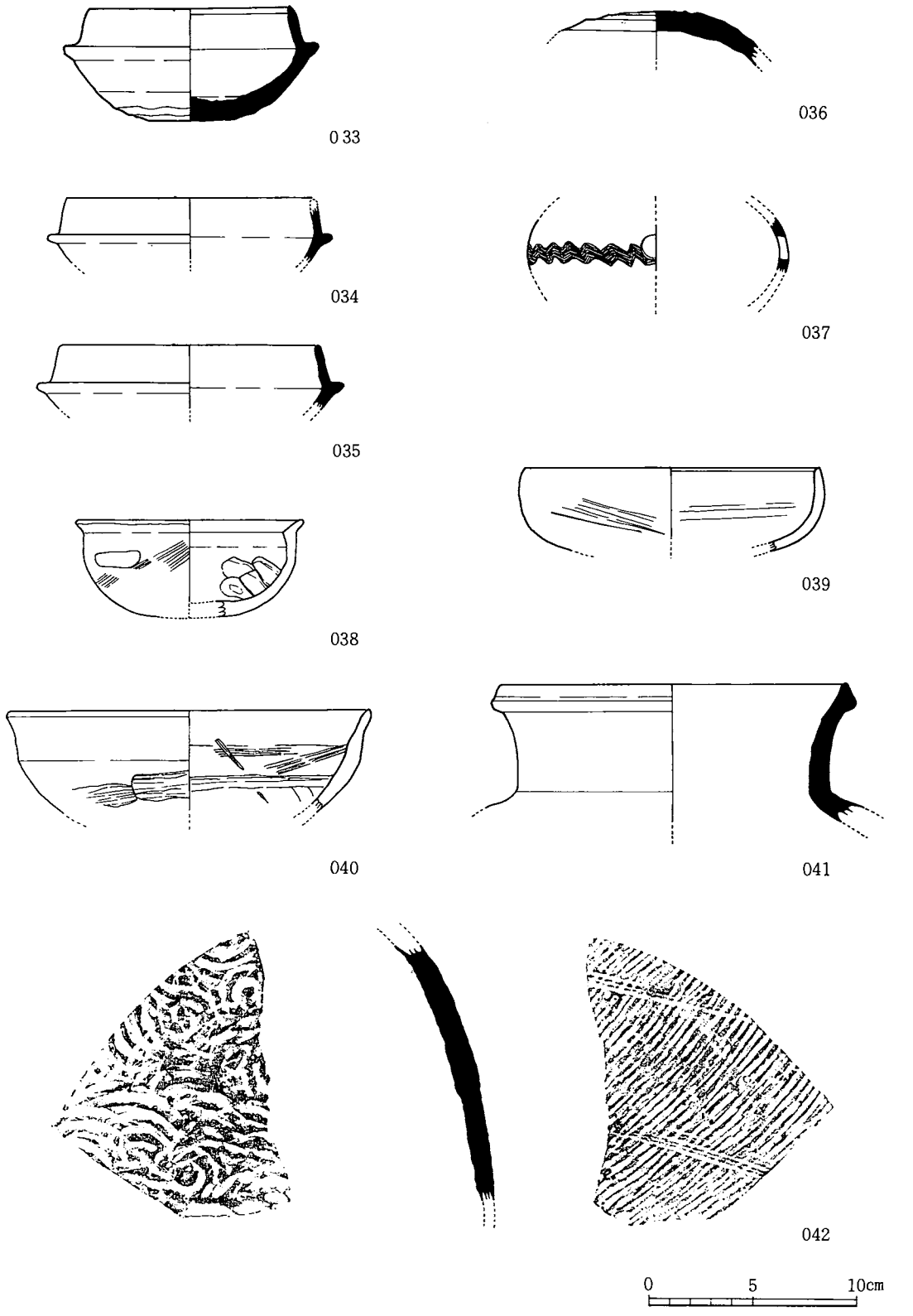
須恵器（032～037）



第12図　第３号住居址出土土器実測図（025～030）



第13図　第３号住居址出土土器実測図(031・032)



第14図　第３号住居址・表土層出土土器実測図（033～042）

(032)甕の破片である。口頸部は外反して立ち上がる。肩部は口頸部とほぼ直角に下外方へ張りだす。頸部上方に波状文が、また肩部外面に格子様叩きが認められる。巻き上げによる水びき整形で、回転ナデ調整を行っている。胎土は密で微砂粒を含む。焼成良好で堅緻である。色調は暗緑灰色を呈する。

(033)坏蓋の身である。口径は9.7cmで、器高5.5cm、稜径12.3cmを測る。たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸い。底部外面の$\frac{4}{5}$は回転ヘラ削り調整で、他は回転ナデ調整である。底部外面には×の窯印がなされている。胎土はやや密で白色砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。色調は青灰色を呈する。

(034)坏蓋の身の破片である。たちあがりは内傾しながらのびる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。器面に回転ナデ調整が認められる。胎土はやや密で白色砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。受部から下方に黒色の釉がかかっている。色調は青灰色を呈する。

(035)坏蓋の身の破片である。たちあがりは内傾しながらのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。器面に回転ナデ調整が認められる。胎土はやや密であるが、焼成がやや不充分である。色調は褐色を呈する。

(036)坏蓋の蓋の破片である。天井部は比較的丸い。天井部外面は回転ヘラ削り調整を行い、内面は回転ナデ調整を行っている。胎土はやや密で、焼成は良好である。色調はオリーブ灰色を呈する。

(037)鍑の破片である。体部に径1.4cmの円孔スカシと1条(7本)の波状文がある。回転ナデ調整が認められる。胎土は密で白色微砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。色調は青灰色を呈する。

このほか竈形土器の一部と思われる土器片が出土した。破片であり、実測がとれなかったので写真で報告した。(図版PL32)

その他の遺物

第1号～第3号住居址から出土した遺物のほか、表土層から出土したものと表採した遺物について報告しておきたい。

土師器(038～040)

(038)埦形土器である。推定で口径は11.0cm、器高は4.6cmを測る。短い口縁部を有し外反する。口唇部は丸い。外面は櫛目調整を行っており、内面は手なで調整で、一部指圧痕が残る。色調は外面が暗褐色、内面は明褐色を呈する。胎土には白色砂粒や雲母を多く含んでいる。焼成は良好である。

(039)埦形土器の破片である。口径は推定で14.3cmを測る。体部から口縁部にかけて、ややふくらみをもって内傾している。口唇部は丸みをもっている。外面、内面に手なで調整を行っている。色調は橙色を呈する。胎土は精良であるが焼成がやや不充分で器面は荒れている。

(040)埦形土器の破片である。やや外反する口縁部で口唇部は丸みをもっている。外面と内面にヘラなで調整が認められる。色調は明赤褐色を呈する。胎土は砂粒を含み、焼成良好である。

須恵器（041～042）

(041)甕の破片である。口径は推定で16.6cmを測る。口頸部は外弯して上がり、端部近くで断面が半円形の凸線を一条有し、端部は外傾する平面をなす。胎土はやや粗で、焼成は良好で堅緻である。色調は青灰色を呈する。

(042)胴部片である。外面に平行叩き、内面に円弧叩きが行われている。胎土はやや粗で焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。一部自然釉がかかっている。

溝状遺構

溝状遺構は STA 39＋60の中心杭の東側にあり、南側に向って流れる。蛇行した不規則な形状を示し、幅と深さをいくぶん増しつつ伸びている。全長約13m 、幅約60m 、深さ約25cmを測る。溝の中からは青磁片が出土した。中世時代の溝と考えられるが、他の遺構が不明であり性格は定かにしえない。

(043)青磁の碗である。復原すると口径は15.5cmで、器高6.7cm、高台径5.7cmを測る。体部はいくぶん丸みをもって立ち上がり口縁部はわずかに外弯する。端部は丸みをもっている。見込みには重ね焼き痕が残り、体部との境にはわずかな凹線がみられる。高台は削り出し整形である。内外面に灰オリーブ色を呈する施釉があり、貫入が見られる。胎土の色調は灰白色を呈する。

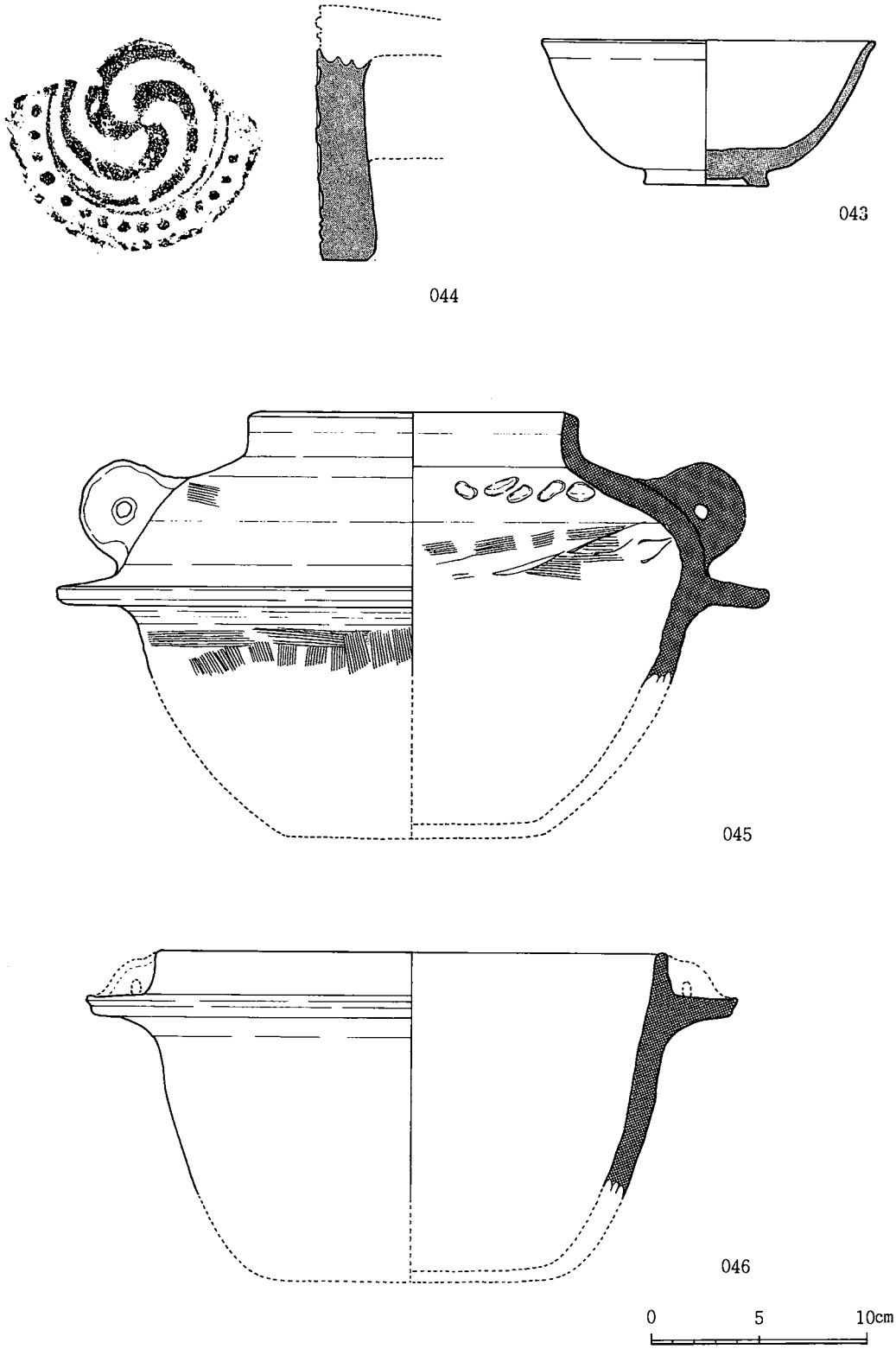
3．B・C地区の遺構と遺物

B地区は宅地や傾斜面が多いところであったが、可能なところを選んでB－1～B－5トレンチを選定した。しかし、宅地造成や畑地整地のためにもともとの地形が壊されたことも少なくなく、いずれのトレンチも耕作土の下は地山となり遺構や遺物は認められなかった。したがって以降の調査は行わなかった。

C地区も調査の可能な6ヵ所にトレンチを設けた。結果的には、C－1、C－5トレンチに遺物が出土した。C－1、C－5トレンチは、付近の崖面に貝殻が見られたことから、貝殻の出土する範囲を調べることを目的としたものである。

崖下にあたるC－5トレンチでは、表土および表土下約20cmに貝殻が出土したが、本来的な包含層ではなく、崖から落ちたものと判断された。

C－1トレンチは幅1.5m 、長さ6mで約1.5m掘り下げた。表土層約20cmの下は有機物を含んだ黒色土であった。この中に五輪塔の破片や巴瓦が出土した。また、トレンチの西壁近くにはピット状遺構があり、人骨片や20数枚の模造貨銭、それに羽釜と茶釜の土器片が出土した。



第15図　溝状遺構・C地区出土土器実測図（043～046）

出土した巴瓦と土器については次のとおりである。

(044)三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当径は12.1cm、厚さ2.5cmを測る。内区は左巻きの巴文で頭部は丸みを帯びている。尾は長く半周するあたりで他の巴と接している。内区と外区は圏線で画され、外区には小粒の珠文を配する。珠文は15個が数えられ、比較的規則的に並んでいる。もともとの数は30個程度であろう。裏面は指ナデによって調整を行っている。胎土は砂粒混じりで焼成はやや不充分である。色調はにぶい黄橙色を呈する。

(045)土製の茶釜である。復原すると口径は15.5cmで、つぼの部分の直径は33.2cmを測る。底部は平底をなすものと思われ、体部は内弯しながら立ち上がり体部上半につばと把手を接合している。つばの接合付近から大きく内弯し、口縁部は直行する。端部は平たく外傾している。つばと把手は体部と接合した部分からそれぞれ3.1cmと2.7cm外にでている。つばはいくぶん先細りになり端部は平たくなっている。2個の把手には直径1.2cmの小孔がある。外面には櫛目と横なで調整を行っており、とくにつばから下は粗い櫛目で、縦・横方向に綿密な調整を行っている。内面は櫛目のあと横ナデ調整を行い、一部指圧痕が見られる。なお、つばから下には煤の付着がある。胎土は砂粒混じりで、焼成は良好である。色調は灰オリーブ色を呈している。

(046)土製の羽釜片である。復原すると口径は23.7cmで、つばの部の直径は32.0cmを測る。底部は平底をなすものと思われ、体部は内弯ぎみに立ち上がり、上部につばを有している。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平たい。つばは3.1cmの幅でめぐり、いくぶん先細りになる。端部は平たいが一条浅い凹線がめぐっている。2個の把手が接合しているものと思われる。外面・内面には横ナデによる調整が行われ、外面には煤の付着がある。胎土は砂粒混じりで、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。　　(江本)

第1表　住居址計測一覧表

	形状	主軸方位	柱穴数	P-1	P-2	P-3 (cm)	柱間の長さ (cm)	出土遺物 土師器	出土遺物 須恵器
第1号住居址 第5図 図版4	方形 弧形	N-14°-E	3	大きさ 23×25 深さ −25	20×14 −18	11×12 −15	P-1～P-2：72 P-1～P-3：71 P-2～P-3：54	6点 第6・7図 (001～006) 図版12・13	6点 第7図 (007～012) 図版13
第2号住居址 第8図 図版4	長楕円	N-30°-E	3	大きさ 18×16 深さ −20	20×21 −24	29×23 −10	P-1～P-2：177 P-1～P-3：105 P-2～P-3：209	2点 第7図 (013～014) 図版13	
第3号住居址 第9図 図版5	隅丸方形	N-44°-E	3	大きさ 31×26 深さ −25	19×15 −20	21×18 −16	P-1～P-2：165 P-1～P-3：84 P-2～P-3：147	17点 第10～13図 (015～031) 図版14～17	6点 第13～14図 (032～037) 図版17～18

第２表　第１号住居址出土土器一覧表（土師器・須恵器）

土師器（001～006）

△は推定値

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
001	甕	底部欠失	口径24.7 △器高28.0	口縁部はゆるやかに外反。 胴部は大きくふくらむ。	外面にはヘラ削りしたあとハケ目調整 内面はヘラ削り調整	砂粒混じり	良好	にぶい赤褐色	煤が付着する	第６図	図版12
002	壺	口縁部	△口径18.6	口唇部に一条の線が走る。 内弯する。	外面はハケ目調整 内面は手なで調整	砂粒混じり	良好	にぶい黄橙色	器面は荒れている	第６図	図版12
003	壺	胴部以下欠失	△口径14.1	口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面はハケ目と手なで調整 内面はヘラ削りと手なで調整	砂粒混じり	良好	明赤褐色		第６図	図版12
004	高坏	坏部	△口径14.7	体部はほぼ直線。 口縁部は外反ぎみ。	外面・内面ともハケ目調整	砂粒の少い良質のもの	弱い	浅黄橙色	器面は荒れている	第７図	図版13
005	高坏	脚部片	不明		筒部の外面は手なで 内面はヘラ削り	砂粒混じり	良好	橙色		第７図	図版13
006	高坏	脚部片	不明		筒部の外面は手なで 内面はヘラ削り	砂粒混じり	良好	橙色	摩滅が進んでいる	第７図	図版13

須恵器（007～012）

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
007	坏蓋（蓋）	蓋破片	△口径13.6 △器高 4.0	天井頂部は平らに近い。 体部と口縁部は外面の稜によって分けられる。	外面は天井から稜近くまで回転ヘラ削り調整 内面は回転ナデ調整	砂粒を含みやや粗	やや弱い	青灰色		第７図	図版13
008	坏蓋（蓋）	蓋破片	△口径11.7	器高は高く、内弯しながら口縁部につづく。 口縁部端部は内傾する段をなす。	天井部外面は手が回転ヘラ削り調整 内面は回転ナデ調整	やや密	やや不充分	灰色	摩滅が見られる	第７図	図版13
009	坏蓋（身）	蓋破片	△口径11.7	立ちあがりはやや内傾。 受部は水平にのび、端部は内傾する段をなす。	内面・外面は回転ナデ調整	やや粗 白色砂粒を含む	良好	青灰色		第７図	図版13
010	坏蓋（身）	蓋破片	△口径12.6	立ちあがりはやや内傾。 受部は水平にのび端部は丸みをもつ。	内面・外面は回転ナデ調整	やや密	やや不充分	灰褐色		第７図	図版13
011	坏蓋（身）	身破片	△口径13.3	立ちあがりは外弯ぎみに内傾。 受部はほぼ水平にのび、端部は断面三角形。	内面・外面は回転ナデ調整	やや密 微砂粒を含む	不充分	灰白色	器面はもろい	第７図	図版なし
012	坏蓋（身）	身破片	△口径15.7	立ちあがりは内傾して上方に伸びる。 受部はやや上外方へ伸び、端部は丸みをもつ。	底部外面は回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整	やや粗 微砂粒を含む	やや不充分	灰白色		第７図	図版13

第3表　第2号住居址出土土器一覧表

土師器（013・014）

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
013	壺	口縁部片	不明	頸部から内弯して立ちあがり、途中からさらに外反する。。	内面・外面は手なで調整。	白色砂粒が多く混じる	良好	明褐色	煤が付着する。(破片になった後)	第7図	図版13
014	高坏	筒部片	不明		筒部上部に接合の圧痕が残る。 外面はハケ目と横なで調整。	砂粒混じり	良好	明赤褐色		第7図	図版13

第4表　第3号住居址出土土器一覧表（土師器・須恵器）1

土師器（015～031）　　△は推定値

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
015	壺	底部の一部を欠失	口径16.5 △器高28.6	頸部が厚く、外反した口縁部をもつ。 口唇部は丸い。	外面はハケ目調整 内面はヘラ削り調整	砂粒混じり	良好	赤褐色		第10図	図版14
016	壺	胴部以下を欠失	口径15.3 器高不明	口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面はヘラなで調整 内面はヘラ削り調整	砂粒混じり	良好	外面 暗赤褐色 内面 明赤褐色		第10図	図版14
017	壺	胴部以下を欠失	口径16.4 器高不明	口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面は粗いハケ目調整 内面はヘラ削りのあと手なで調整	多量の砂粒混じり	良好	明赤褐色	器面は荒れている	第10図	図版15
018	壺	口縁部片	△口径15.8	口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面・内面は手なで調整	砂粒混じり	良好	外面 にぶい褐色 内面 にぶい赤褐色		第10図	図版15
019	甕	口縁部	口径17.3	頸部が厚く外反した口縁部。 口唇部は丸い。	内面はヘラ削り調整	砂粒混じり	良好	外面 浅黄橙色 内面 にぶい黄橙色	器面は荒れている	第10図	図版15
020	壺	口縁部片	△口径16.0	口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面・内面とも手なで調整	砂粒混じり	良好	暗褐色	器面は荒れている	第10図	図版15
021	甕	口縁部	口径14.1	頸部が厚く外反した口縁部。 口唇部は丸い。	内面はヘラ削り調整	砂粒混じり	やや不充分	橙色	器面は荒れている	第10図	図版15
022	壺	胴部以下を欠失	口径13.3	頸部が比較的長く、口縁部は外弯ぎみ。 口唇部は丸い。	外面はクシ目調整 内面はヘラ削り調整	多量の砂粒混じり	良好	明赤褐色	器面は荒れている	第10図	図版15
023	埦形土器	底片	口径14.6 器高 6.4	口縁部は先細り、口唇部は丸い。 丸みをもった底部。	外面・内面は手なで調整	密で微砂粒を含む	やや不充分	にぶい橙色	器面は荒れている	第10図	図版15

024	椀形土器	破　片	△口径13.1	口縁部は体部上半からほぼ垂直に立上がる。口唇部は丸い。	外面・内面は手なで調整	密で微砂粒を含む	やや不充分	明赤褐色	器面は荒れている	第 10 図	図 版 15
025	椀形土器	破　片	△口径15.4	体部が深く、口唇部は丸い。	内面は手なで調整	多量の砂粒混じり	良　好	明 褐 色		第 12 図	図 版 16
026	椀形土器	1/2 片		体部上位に稜を有し、外弯した口縁部。口唇端部は細く、丸い。	外面・内面は手なで調整	密	やや不充分	橙　色	器面は荒れている	第 12 図	図 版 16
027	椀形土器	破　片		体部上位から屈曲し、ほぼ垂直の口縁部。口唇部は丸い。	外面はヘラ削り調整内面はハケ目と手なで調整	密	良　好	橙　色		第 12 図	図 版 16

第5表　第3号住居址出土土器一覧表（土師器・須恵器）2

No	器種	残存部	大きさ cm	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号
028	高坏	坏　部	口径16.7	接合部に稜を有する。口唇部は丸い。	外面・内面とも手なで調整	多量の砂粒混じり	良　好	明赤褐色	器面は荒れている	第 12 図	図 版 16
029	高坏	坏　部	口径16.1	坏部と脚部とは一度につくられたもの。端部は丸い。	外面・内面ともクシ目と手なで調整	多量の砂粒混じり	良　好	明赤褐色		第 12 図	図 版 16
030	甑	上半を欠失	底部径11.0	胴部は底部からやや内弯しながら立ち上がる。	外面はクシ目調整	砂粒混じり	良　好	赤 褐 色	底部に二孔をもつ	第 12 図	図 版 16
031	甑	胴部から上半を欠失	底部径11.2	胴部は底部からやや内弯しながら立ち上がる。	外面はクシ目調整内面はヘラ削りと手なで調整	多量の砂粒混じり	やや不充分	褐　色黒 褐 色	底部に二孔をもつ。3個の補修孔がある。	第 13 図	図 版 17

須恵器（032～037）

No	器種	残存部	大きさ cm	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号
033	甕	頸・肩部破片		口頸部は外反して立ち上がる。肩部は口頸部とほぼ直角で下外方へ張る。	巻き上げ技法による水びき整形回転ナデ調整	密で微砂粒を含む	良好で堅緻	暗緑灰色	頸部上方に波状文肩部外面に格子様叩き	第 13 図	図 版 17
033	坏蓋(身)	3/8	口径 9.7 器高 5.5 稜径12.3	立ち上がりは内傾してのびる。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。	外面の3/8は回転ヘラ削り他は回転ナデ調整	やや密白色砂粒を含む	良好で堅緻	青 灰 色	底部外面に×の窯印	第 14 図	図 版 18
034	坏蓋(身)	破　片		立ち上がりは内傾してのびる。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。	回転ナデ調整	やや密白色砂粒を含む	良好で堅緻	青 灰 色	一部に黒色の釉がかかる	第 14 図	図 版 18
035	坏蓋(身)	破　片		立ち上がりは内傾してのびる。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。	回転ナデ調整	やや密	やや不充分	褐　色		第 14 図	図 版 18

036	坏蓋(蓋)	破片		天井部は比較的丸い。	天井部外面はヘラ削り調整 内面は回転ナデ調整	やや密	良好	オリーブ灰色		第14図	図版18
037	瓶	破片		体部に径1.4cmの円孔。スカシと1条(7本)の波状文がある。	回転ナデ調整	密 白色微砂粒を含む	良好で堅緻	青灰色		第14図	図版18

第6表　その他の出土土器一覧表（土師器・須恵器・青磁）

土師器（038～040）　　△は推定値

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
038	椀形土器	破片	口径11.0 器高 4.6	短い口縁で外反する。 口唇部は丸い。	外面はクシ目調整。 内面は手なで調整	白色砂粒・雲母を含む	良好	外面 暗褐色 内面 明褐色		第14図	図版18
039	椀形土器	破片	△口径14.3	体部から口縁にかけてふくらむ。 口唇部は丸い。	外面・内面は手なで調整	精良	やや不充分	橙色		第14図	図版18
040	椀形土器	破片		やや外反する口縁。 口唇部は丸い。	外面・内面はヘラなで調整	砂粒を含む	良好	明赤褐色		第14図	図版18

須恵器（041～042）

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
041	甕	破片	△口径16.6	口頸部は外弯して立ち上がる		やや粗	良好で堅緻	青灰色		第14図	図版18
042	不明	胴部片			外面は平行叩き 内面は円弧叩き	やや粗	良好	青灰色		第14図	図版なし

青磁（043）

No	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	挿図番号	図版番号
043	碗	½	△口径15.5 器高 5.7	体部はいくぶん丸みをもつ。 口縁部はわずかに外弯する。	見込みに重ね焼き痕が残る 高台は削り出し整形	良好 灰白色	良好	灰オリーブ色		第15図	図版19

4．まとめ

以上、A～C地区から出土した遺構、遺物について報告したが成果につきまとめてみたい。

A地区は山麓に形成された小規模の舌状台地上に位置し、台地下には谷合川や湧水があり水利の便に富む。生産活動をなす耕作地は、山麓下の沖積地が求められる。今日の広大な八代平

野の多くは中世時代以降に大規模に行われた開拓によりなされたものである。それ以前における水田地は現在の国道3号よりも東側に求めるべきである。当時の海岸線が、現在の国道3号付近にあったとされるので、耕作の可能な沖積地の面積はかなりしぼられるに違いない。

A地区の字名「城丸」地区において3軒の住居址を検出したが、出土した遺物、とくに須恵器[註1]から判断して6世紀前半から中頃の所産と考えることができる。付近は耕地整理による削平や耕作等によって、住居址をはじめとした遺跡は壊された可能性が強い。平坦地を存する丘陵上であり、もっとも住居に適するところであることから、面積的に見て、この平坦地には少なくとも10軒程度の住居が営まれていたものと考えている。この住居が営まれた地区の東側は急峻な傾斜面であり、住居を営み難い。とすればこの住居を営んだところが、この地区での最も高いところにあたるといえよう。したがってこのほかの住居の営まれる場所は現在の民家がある山麓の下手へと伸びていたものであろう。

さて、3軒の住居址は切り合うことなく存在した。したがって各住居址の前後関係を直接的に知るには至らない。出土遺物の少ない第2号住居址の比較は除くとして、第1号住居址と第3号住居址の出土遺物についてみてみたい。

第1号住居址の出土土器を見ると、土師器では甕・壺・高坏の器種があり、須恵器には坏蓋がある。(001) はこの時期の一つの特色をなすものであろうか、胴が大きくふくらみ、器高が低いのは特徴的である。(002) は口唇部に一条の凹みが走り、端部がいくぶん外に突き出たもので古式土師器にも見られるような特徴を有している。3点の高坏はいずれも破片で多くを語ることはできない。須恵器の坏身の立ち上がりは (010) がもっとも内傾をゆるさず、(012) は口径15.7cmを測りかなり大きい。以上の須恵器からみて、第1号住居址は6世紀前半の所産と考えた。[註2]

第3号住居址の出土土器をみると、土師器では甕・壺・埦形土器・高坏・甑があり、須恵器では坏蓋・鍔がある。土師器の甕・壺では、口縁部の外弯が顕著であり、これもこの時期の特徴として捉えることができよう。(026) の埦形土器は口縁部と胴部との境が明瞭で、甕・壺と同じように口縁部の外弯が顕著である。高坏の中で (028) はこの資料一点の出土であれば、5世紀の古式土師器に伴うものとも見えるようなものである。(029)の高坏は形状も製作技術もかなり退化したものであるが、両者が同じ住居址から出土したことは事実であり、同じ時期に共伴を見るものであろう。2点の甑は、底部に仕切りをもち、両側に孔をもったもので、一般的な形状を呈している。(031) には補修孔が見られ、量的に少なかったのか、大事に使用されていたことをうかがわせる。須恵器の坏蓋をみると、第1号住居址出土のものにくらべると、立ち上がりの角度が3点いずれもゆるやかになってくる。したがって、第3号住居址は第1号住居址にいくぶん後行すると考えるのが妥当であろう。先にも述べたように、一応、両者を6世紀前半から中頃の所産と考えておきたい。

県内の住居址で須恵器が出土したことを報告された例としては熊本市下南部遺跡第５・13号住居址[註3]、同市大江青葉遺跡第６・18・19・21号住居址[註4]、上益城郡益城町櫛島遺跡第２号住居址[註5]、下益城郡城南町沈目遺跡第28号住居址[註6]などの報告例が知られ、土器の共伴関係もよく類似している。いずれの住居址も６世紀という年代が推定されているが、須恵器の坏蓋の立ち上がりの特徴をもって先後関係を比較すれば、本遺跡の住居址は前記の遺跡の住居址に多少先行する時期のものと述べることができよう。

さて、３軒の住居址で見られる構造面における状態を可能なかぎり述べておくこととしたい。プランは第３号住居址で見られた隅丸方形が一般的なものであろうが、第１号・第２号住居址は異状な形状を示し、例外的なものとして捉えておきたい。第３号住居址の大きさは5.08m×3.5mであり平均的なものであろう。柱穴は大きさや深さ、それに設置場所に規則性がないことがむしろ特徴として述べられるかにある。壁面は残存部があまりに少なく特色めいたものはひきだせないし、壁溝も設けられてはいない。床面に貼り床等の痕跡は認められないが、かなりの固さを有し、日常の生活の中で踏み固められたものと考えている。第３号住居址の南西隅に床面よりもいくぶん高い面が見られ、弥生時代後期の住居址に特徴的に見られるベッド状遺構を彷彿させるが、時間的な空間がありすぎるし、直接的な結びつきはさけておきたい。住居址内から出土した土器についてはさきほど記したが、このほか焼土やカーボンがある。つくりつけの竈の存在は確認できなかった。問題となるのはカマド形土器の破片と思われる土器片の出土である。実測ができかねる破片があるので、一応写真で報告している。カマド形土器は全国的な出土例からみて、かなりの時間差があることから、後世の混入遺物とすればいとも簡単であるが、他に後世のまぎれ込み遺物がほとんどないだけに不可解といわざるを得ない。出現時期や形状等につき今後の問題としておきたい。なお、造りつけのカマドは、前記、櫛島遺跡[註8]、大江青葉遺跡[註9]、下南部遺跡[註10]で住居址に付設されていることが確認されているし、沈目遺跡[註11]においても付設の可能性がもたれている。いずれの遺跡も本遺跡に比べていくぶん後行する時期と考えたが、その差は非常に短いものであろうし、本遺跡の時期に付設されていたと考えてもよいだろう。

Ｃ地区はトレンチ調査で終わり遺跡の実態を明らかにするまでには至らなかった。Ｃ－１・Ｃ－５トレンチでの出土状態をみると、Ｃ－５トレンチ東側の傾斜面に見られた貝殻は、東側には伸びず傾斜面に限られている。Ｃ－５トレンチに出土した貝殻は、これらのものが崖下に落下したものと考えることができよう。そしてこの貝殻は、調査時の崖面上から120～130cm下位にあり、この高さが当時の生活面かと推定される。この120～130cm下がった部分から茶釜・羽釜・五輪塔片・模造銭・人骨片などが出土している。これらの遺物は、多分に後世に石垣を築いて土地の造成をなした時に、低い傾斜面にあたるＡ－１トレンチ付近が盛土された折に、客土とともに運ばれたものと考えている。したがって生活道具の羽釜や茶釜とともに五輪塔や

模造銭などが一緒に埋められたものであろう。

茶釜・羽釜とも瓦器であり、瓦と同じく中世時代のものと考えられ、五輪塔や人骨片が混じっていることから付近には墓地があったことは間違いないであろう。『肥後国誌』に記載された正壽寺迹が、あるいはこの付近にあったものかもしれない。なお、現在の正寿寺はこの地から西側へ約150 m下がったところに建立されている。

（江本）

正壽寺迹　古禪刹也開祖ノ名不分明天正ノ始絹脇刑部左衛門薩州ヨリ花ノ山城ニ出張セシ時ニ建立スト云二世善殊カ時天正十三年七月五日甲斐宗運病死ス其子宗立遺訓ヲ遵守セス同八月十日花山城ヲ攻落ス此住僧善殊モ花山城ニテ戰死ス此時寺院モ廢セリ今廢迹ノ一草堂ニ彌陀佛ヲ安ス又一石碑アリ銘左ノ如シ

於花山戰死生年四十四歳　主衆四人
正壽寺二世勝田善殊菴主禪師　宗意禪門
天正十三年乙酉八月十日己時也　道秀禪門

此外ニモ古キ石碑アレモ文字消滅シテ不分明

（補）翁巷云花山城ハ中山手永下江村ニアリテ即チ此寺迹ハ花山ノ下ナリ絹脇カ事等ハ下江村ノ條ニアリ故ニ爰ニ贅セス

註 1．原田敏明他「干拓および海岸線進展図」『熊本県の歴史・歴史地図』文画堂　1957
　　松本雅明「古代」　『城南町史』　城南町史編纂会　1965
註 2．小田富士雄「須恵器の編年」『九州考古学研究』学生社　1979
註 3．大城康雄・広瀬正照『下南部遺跡発掘調査報告書』　1979
註 4．丸山武水・瀬丸敬二・高橋信武『大江青葉遺跡』　1976
註 5．緒方勉「櫛島遺跡」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告第18集　熊本県教育委員会　1975
註 6．江本直『沈目』熊本県文化財調査報告第13集　熊本県教育委員会　1974
註 7．塩屋勝利・力武卓治『片江辻遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集　福岡市教育委員会　1977
註 8．註5に同じ
註 9．註4に同じ
註 10．註3に同じ
註 11．註6に同じ
註 12．森本一瑞・水島貫之『肥後国誌』下巻　P193　下益城郡河江手永

第Ⅳ章　周辺の遺跡

1．長谷寺の五輪塔

長谷寺泰雲山　禪洞家八代郡谷村悟眞寺末寺和州長谷寺ヲ移メ草創スト云モ縁起什物等悉ク失却シ開基年代モ不分明寺中ニ開山是睡ノ塔石アリ碑銘ニ當寺開山親叟是睡大和尚天文二戊戌年三月十五日トアリ又同所ニ應長元年持金剛覺珍聖靈行年トアリ其他文字消歇シタル圓石アリ又鵠玉室常金禪定門慶長五年八月ト銘アル石碑モアリ里俗此碑ハ當所代官某ト云シ者盗賦ノ爲ニ害セラレタル古墳ト云下江村中山千本花ノ山城主絹脇刑部左衛門カ寄附ノ寺●モ有之ト云共及斷絶本尊十一面觀音ノ像ハ安阿彌カ作ト云年貢地也

今回調査を行ったＢ地区の東側に接するように長谷寺泰雲山がある。『肥後国誌』[註1]によれば左の様に記してある。

県指定文化財として著名な木造十一面観音立像は、長谷寺にまつられていた仏像の中の一つで、現在は近くにある御観音堂におかれている。鎌倉時代快慶作とも安阿彌作とも伝えられる優美なもので、この仏像については、『熊本県の文化財第一集彫刻・書跡』[註2]に詳しい。

長谷寺の境内には数基の五輪塔や宝篋印塔の残欠がある。(1)～(3)は小堂の前に並べられ、(4)は南側へ少し離れた果樹園の横に置かれている。

(1)は小堂に向って左側の五輪塔で、火輪と地輪は同一のものと考える。それは火輪の床面と地輪の上面の双方に接合のための凹みを施しているからである。空風輪は前者にくらべて風化が激しく、水輪は石材に違いがある。台石も当初のものではない。一応、空風輪から地輪までの高さは107.5㎝である。空風輪は一個体で、空輪はいくぶん下ぶくれで、風輪は椀形をなし、火輪と接合するための凸部を有している。火輪はいくぶん軒反りがあり、上面に空風輪との接合をなす凹部がある。下面にも接合のための浅い凹部を施している。水輪はほぼ真円の上・下面を一部カットした形状にあり、四面ともに「ㄊ」の梵字がある。地輪には右の様に読める刻銘がある。

徳治第三曆
初圖上旬□
以上戌白音?

(2)は小堂に向って右側にある五輪塔で、別個のものを積み重ねている。空風輪は風化が激しい。空輪は(1)にくらべて丸みがある。火輪は３個積まれている。水輪には四面に「ㄊ」の梵字がある。地輪はなく、台石は当初のものではない。

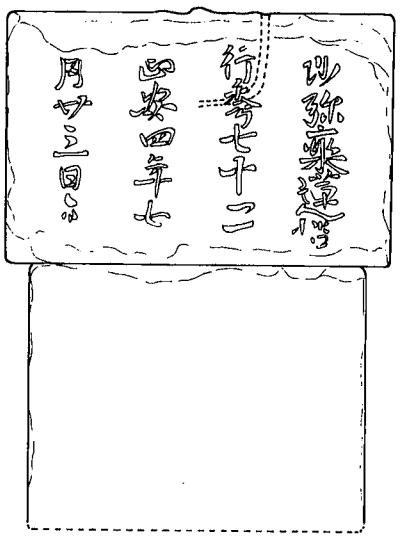
(3)は地輪で、(2)の五輪塔の奥に１個だけ置かれている。幅35㎝、高さ28㎝で左の様に読める刻銘がある。

天授五年
沙弥太空
九月卅日

(4)は(1)～(3)の五輪塔のある位置から南側に少し離れた果樹園の横にあるもので、地輪だけが２個積み置かれている。上に置かれた地輪はかなり大きなもので幅59㎝、高さ39㎝を測る。上面には径21㎝、深さ15㎝の凹みが施されている。刻銘は右の様にある。下の地輪には刻銘はな

沙
弥
乗

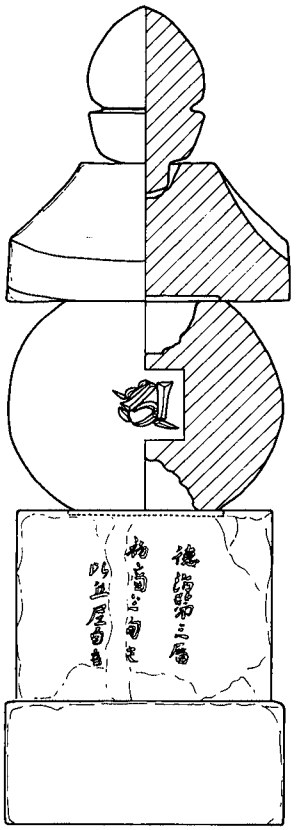
3



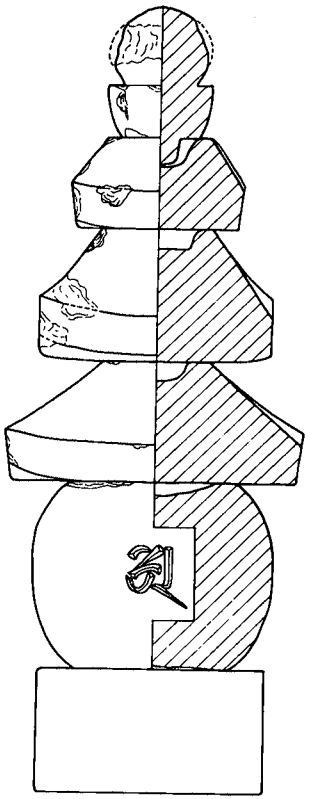
4

0 10 20 30cm

第17図　長谷寺五輪塔実測図（3・4）



1



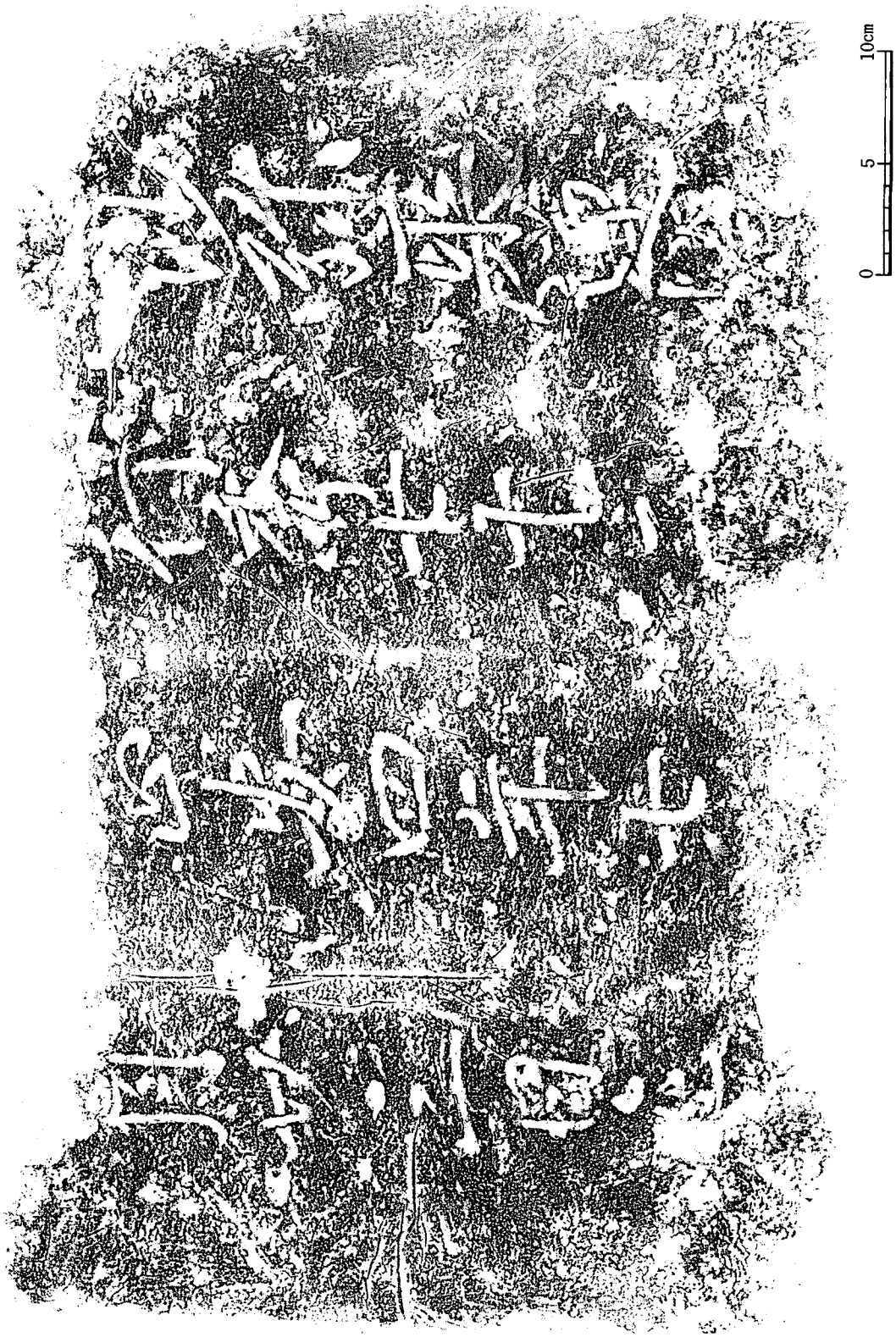
2

0 10 20 30cm

（2・3）は高木正文実測

第16図　長谷寺五輪塔実測図（1・2）

第18図　長谷寺五輪塔拓影



第19図　長谷寺五輪塔拓影

い。

いずれの五輪塔も長谷寺に係るものであろうが、徳治、正安とも鎌倉時代で天授は南北朝時代のものである。このほかにも付近には五輪塔が埋没している可能性が強い。快慶または安阿彌作とつたえられる立派な木造十一面観音立像の仏像や、前記五輪塔の出土から、長谷寺は中世時代に大いに栄えていたものに違いない。

2．娑婆神峠の石畳道

下益城郡小川町中小野から豊野村下郷へと抜ける道は県道下郷―新田である。この道の最も高いところが娑婆神峠であるが、この峠越えの道は、以前はよく、自転車での往来もなされていたということである。現在は荒れがひどく人一人がやっと通れる程の山道と化している。

この道は石畳道であったが今はその一部を残すだけである。

石畳道がつくられたことについては『肥後国誌』[註3]に左の様に記されている。

娑婆神山上下ノ坂ハ嶮岨曲折纔カニ一騎タモ通行不容易岩徑盤環タリシカ寶暦十四年ノ春ヨリ廻江手永鰐瀬村ノ立善ト云ル勸進ノ僧願ヲ起シテ毎朝小野近村ヲ繞リ鐘ヲ叩キテ飯米ヲ求メ晝ヨリ後ハ道ヲ夷ラケ少シモ餘米アルヰハ貧民ニ與ヘテ力ヲ戮セ岩ヲ碎キ土石ヲ荷フテ其功ヲ成就ス

わずかに残された石畳道は峠への途中に見られ、幅約1.8m、長さ約40mにわたって残存している。谷水によって、ほとんどが壊れたものであるが、ところどころに板石をなした凝灰岩や平たい面を持った石灰岩の残欠が見られる。石畳道に用いられた石材は石灰岩と凝灰岩で、石灰岩は付近に産出するものである。谷川があるため小さな橋をかける必要があるところには凝灰岩の加工を加えた板石を用いている。凝灰岩は近くから運んできたものであろう。

同じく『肥後国誌』[註4]には右の様に記されている。小川から豊野へ抜ける当時の主要な道路であったことをものがたる。　（江本）

按白髪山未タ其所ヲ詳ニセス地志畧曰白髪山或ハ益城郡娑姿神峠トス（一ニ鯖神嶺ニ作ル）國志曰八代郡北種山村ニ白上山ト云所アリ所謂白髪山是ナリト政名按ニ北種山ノ枝村ニ白谷村アリ其後ノ山ヲ白谷山ト云聖廟アリ白上ニアラス風土記ニ假名付ナケレハシラカ又シラカミト訓テ後ニ上ヲ谷ニ轉シ誤レルカ鯖神嶺ハ今益城郡小野村ニ屬シ同郡矢部砥用甲佐堅志田等ヨリ小川町ニ出ルト便路ナリ古ハ此嶺モ八代郡ノ内ナリ二説並ニ考フ所アラン蓋上世ノ事其詳ナルコト得ニ知ルヘカラス

（補）宗運軍記響原合戰ノ條云相良義陽ハ十二月二日ノ辰ノ刻ニ小川小野守山山崎迄燒立テ其日北風強ク吹ケル故結勺燒ケ兼山崎村ハ半分燒ケ尚其殘レルヲモ又々燒ヘキ由申ケルヲ止メテ共儘差置キ娑婆神ノ嶺ヲ越ヘテ各々具足ヲヌキ響ノ原ニ幕打廻シ兵粮ヲ支度ス云々即チ此也

註 1．森本一瑞・水島貴之『肥後国誌』下巻 P191　下益城郡河江手永

註 2．『熊本県の文化財』 第1集―彫刻・書跡　熊本県教育委員会　1979

註 3．森本一瑞・水島貴之『肥後国誌』下巻 P192　下益城郡河江手永

註 4．註3に同じ

第V章　む　す　び

下益城郡小川町は北を松橋町、南を八代郡竜北町に接しているが、松橋・竜北両町は著名な遺跡が多く存在しているところである。小川町には両町に比すと遺跡が少なく、わずかに昭和33年に発掘が行われ報告がなされた年ノ神古墳が知られる程度であった。九州縦貫自動車道建設計画に基づき、現地の踏査が行われ、小川町で3ヵ所の調査が行われることとなった。北側から年ノ神遺跡・中小野遺跡・アケサン古塔碑群である。年ノ神遺跡は路線に接して年ノ神2号墳があり、路線に墳丘ないし、周溝等がかかるかどうか疑われたし、小規模の貝塚も見られた。本遺跡には数ヵ所に貝殻の出土するところがあり、貝塚の存在が考えられた。アケサン古塔碑群は板碑があり、調査を行う必要があった。以上の3遺跡の発掘調査が道路工事に先だち、昭和49年に実施されることとなった。

年ノ神遺跡では、中世館跡が検出され、年ノ神2号墳と併せて調査が行われ、中小野遺跡においても古墳時代住居址と中世遺物が検出された。アケサン古塔碑群も含め、小川町に新しい遺跡が発見され発掘調査が行われ、小川町の歴史を知る上にいささかの資料を提供したかに思われる。

さて、中小野遺跡における発掘調査の成果はすでに述べてきたとおりであるが、再度確認して結びにかえたい。

A地区では住居址3軒と溝状遺構とを検出した。第1号住居址と第2号住居址は不規則な形状を示すが、第3号住居址は隅丸方形の形状をなす住居址であることがわかり、第1号住居址と第3号住居址からは相当量の土器が出土した。土器には土師器と須恵器とがあり、土師器には壺・甕・高坏・埦形土器・こしきがあり、須恵器には坏蓋と甕とが出土した。第1号住居址と第3号住居址との遺物、とくに須恵器を比較してみると、坏身の立ち上がりの状態から判断すると、第1号住居址がいくぶん先行するようである。両者の須恵器は小田富士雄氏の編年によればⅢAとされるもので、6世紀前半から中頃に相当しよう。また、土師器の出土があり、この時期の土器共伴の貴重な例として捉えることができよう。住居址は3軒と数少ないので構造ほか性格などは、多くを知ることはできなかったが、住居址内から須恵器が出土し、比較的時期の定かな住居址の例として捉えられよう。住居址は地形から判断して、東側の山手に向っては、これ以上広がることは考えられず、当時として最も高い位置にあったものと思える。耕地面積から見れば、もっと多くの住居址があって集落をなしていたと考えるのが妥当であろうが、仮に存在したとすれば、現在、民家のある西側であろう。ただし、近くには年ノ神古墳を除き、古墳の存在が明らかでないので、大きな集落があったかどうかについては疑問とせざるを得ない。先の歴史的環境の中でも少しふれたが、自然環境の問題も含め、古墳時代のみならず、不知火干拓が行われる以前については今後の調査による解明を待たねばならないだろう。

A地区の中を東走する県道下郷―新田は娑婆神峠越えの山道であるが、中世からの主要道路である。宝暦十四年(1965年)、鰐瀬村(現在の下益城郡城南町)の僧立善が石畳道をつくりあげたとされる。長年の山水によってほとんどが壊れてしまっているが、一部は往時のおもかげを残していてくれるし、ところどころには石材が見られる。

3軒の住居址の南側で検出した溝状遺構の中には青磁の破片が出土し、小字として残る「城丸」もあり道路沿いに居館があったであろうことを推定させる。惜しむらくは、耕地整理のためおそらく存在していたに違いない古墳時代の住居址ともども遺構がすでに消滅してしまっていたことである。

中世時代の栄えは、長谷寺の木造十一面観音立像の所在によって確かめられるし、境内に残された五輪塔によっても明らかである。とくに正安四年の刻銘がされた地輪は大きく立派なものである。

C地区は結果的に中途までの調査しかできなかった。崖面に見られた貝殻は中世の土鍋や土羽釜等の遺物に伴なうものと思われ、巴瓦の出土もあり、正寿寺が建立されていたところにあたると思われた。

(江本)

矢ノ下・目抜遺跡

第Ⅰ章　序　　説

1．遺跡の位置と環境

本遺跡は、行政区画のうえから熊本県上益城郡御船町大字甘木字矢ノ下および目抜（めんげ）に属する。この遺跡の所在を国土地理院発行（昭和49年）の五万分の一に求めれば、「御船」図幅の北より21.0cm、西より6.5cmの交点あたりに相当する。

熊本県は東に九州の脊梁山脈が縦走し、白川、緑川、球磨川、そして菊池川などの多くの河川が西流して海にそそぐ。従って地形は西になるにしたがって漸傾し、中部地域の熊本の周辺では、御船町のあたりになると火山灰台地があらわれ、そして、やがて平野部へと移行する。本遺跡はあたかも丘陵の裾部にあたり、水田面へと移り変るところにある。遺跡のすぐ南西部には矢形川が流れ、川はまもなく赤井川に合流し、そして江津湖より流れ出た加勢川の水流に加わり海へ注ぐ。

本遺跡の向背の甘木台地には甘木貝塚をはじめ、弥生住居址群があり、また箱式石棺なども出土している。甘木集落は古くからの集落と思われ、その西端（本遺跡のすぐ東）には中世城址甘木城（西甘木城）がある。甘木はまた鎌倉時代の高僧俊仍が幼時育まれたところとして知られている。

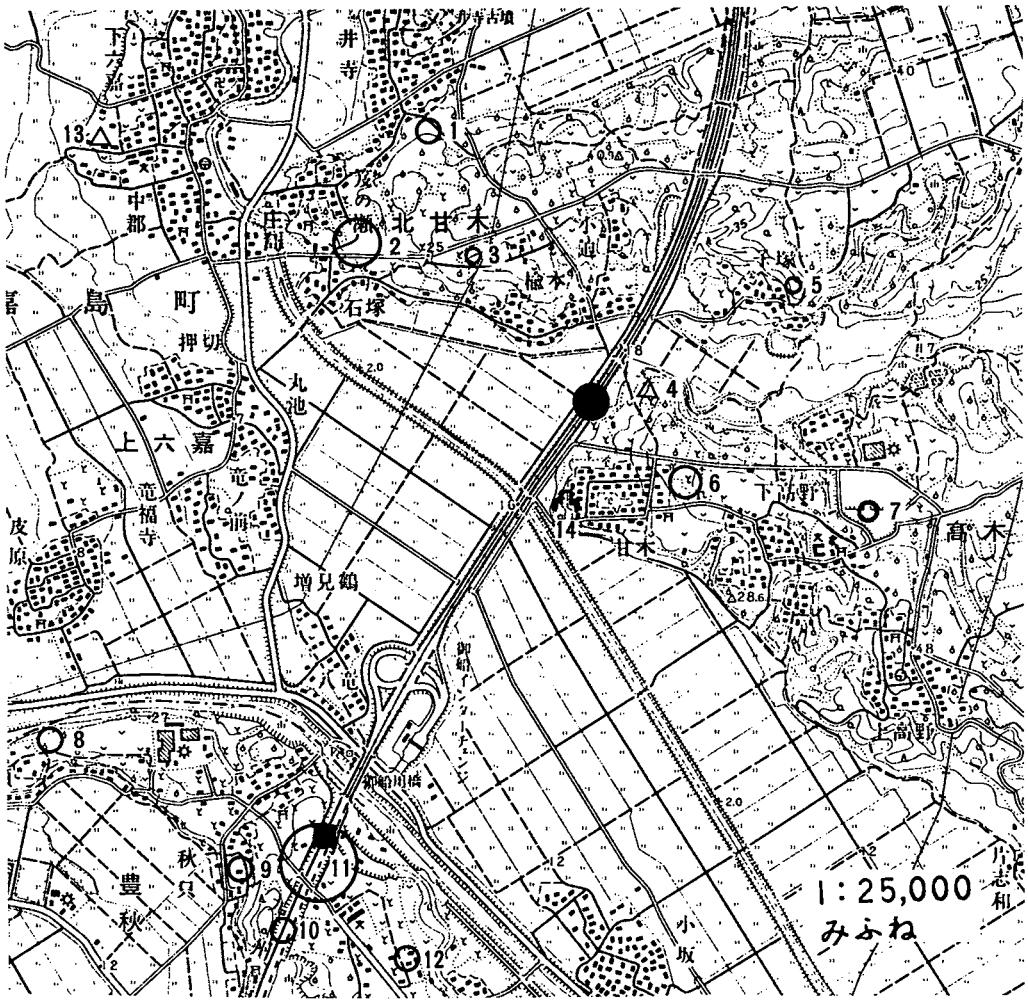
一方遺跡の谷一つ距てた北側の台地は北甘木で、ここにも弥生の甕棺群、石棺群が出土している。また紫原（むらさきばる）には御前塚（ごぜんつか）があり、更にその北には上官塚などの古墳がある。国指定の井寺古墳は、もう一つ先の井寺集落の上方にある。

2．調査に至るまで

昭和45年早春、九州縦貫自動車道（託麻―松橋）の工事に先立って道路計画路線内の文化財分布調査を実施した。その報告によると、

> 甘木字「矢ノ下」及び「目抜」に古墳状の盛土をするものあり、三ヶ所の何れも畑の隅に位置し、畑の草や、石を捨て、漸時盛り上ったものと考えられるが、そうでないこともあり得る。
>
> 南側のが径５ｍ、高さ1.3ｍ。中央2.5×６ｍの楕円形、高さ１ｍ。最も北東よりの土手上のが1.5×４ｍの楕円形に近く、高さ１ｍ位。又このあたり一帯より、須恵、青磁破片が少量ながら出土する。

として踏査の概要が述べられ、検討事項として「試掘の上、検討を要する」としている。また

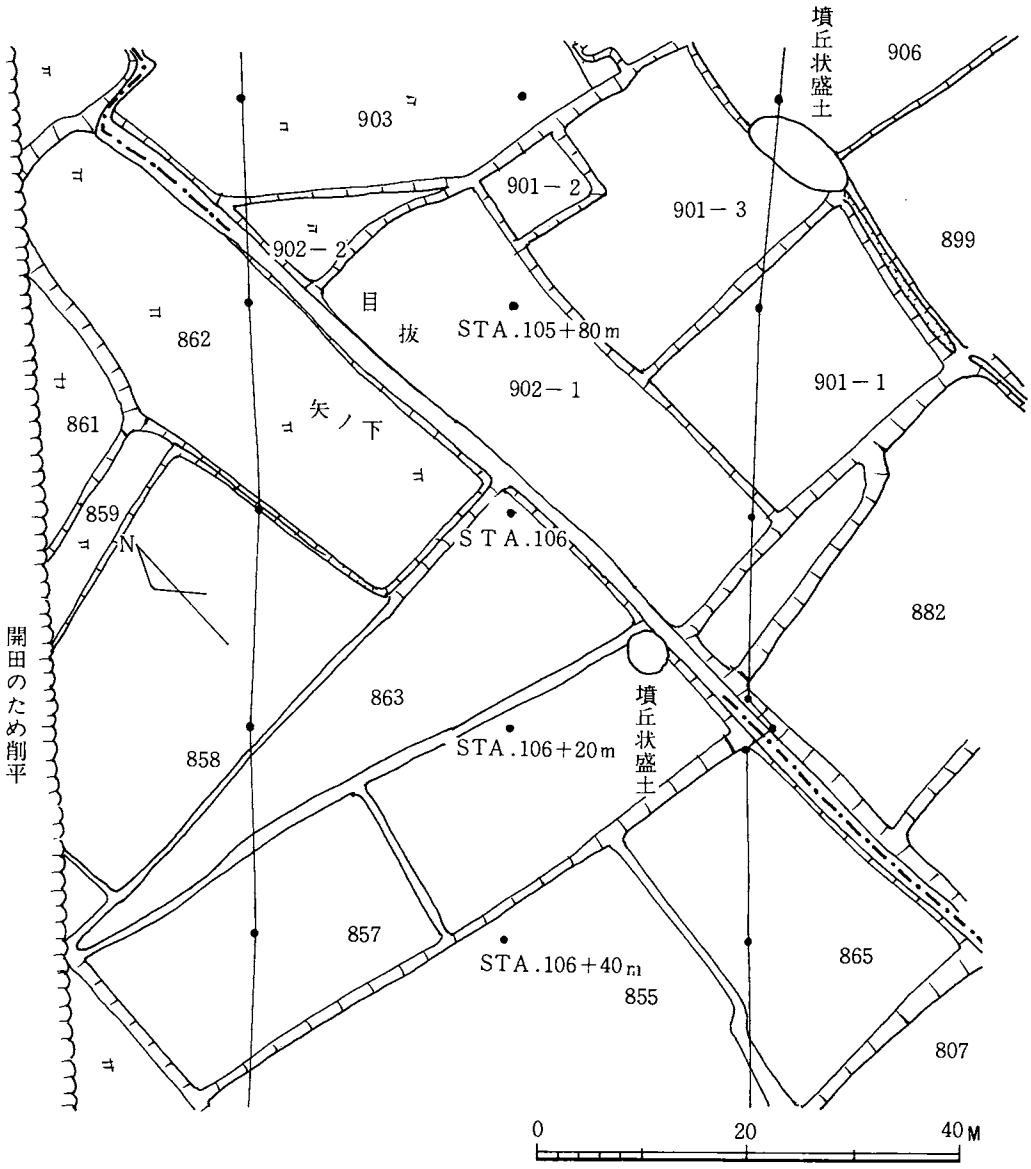


●矢ノ下・目抜遺跡

■長塚古墳（前方後円墳）

1. 上宮塚古墳
2. 剣原遺跡（甕棺・石棺群）
3. 御前塚古墳
4. 甘木貝塚
5. 二子塚古墳
6. 甘木遺跡（石棺）
7. つづの山遺跡（経塚・泥塔）
8. 御所塚古墳
9. 秋只古墳
10. 帰帆山古墳
11. 久保遺跡
12. 小坂大塚古墳
13. カキワラ貝塚
14. 甘木城址

第20図　遺跡位置図



第21図　矢ノ下・目抜遺跡（地形と地番）

さらに甘木の遺物散布地として

甘木集落の北西部、やや低くなった耕地に須恵器、青磁の細片が散布する。

などと概要を述べ、「試掘坑を設け、その結果により調査」する必要のあることを述べている。

以上のような踏査所見をもとにして、本遺跡の調査を実施することになった。

第II章　調　　査

昭和45年現地踏査の所見に基づき、昭和47年に至り、甘木地区の本遺跡の発掘調査に取りかかった。調査には、文化課参事緒方勉、同学芸員高木正文があたった。

ここは道路公団標示によるSTA .106（託麻インター起点）の周辺一帯で、手初めに中心杭に沿って1条、これと直角方向に1条の試掘溝を掘った。中心杭に沿った1条はSTA .106＋0mからSTA .106＋40mあたりまでの間約40m、他の1条はSTA .106＋20mの中心杭より東の幅杭まで約18mで、それぞれ溝幅は2mとした。

1. 溝と土壙

試掘溝の発掘により、溝と土壙が検出された。これを手掛りとして周辺へと調査区域をひろげ、溝4条と4基の土壙を調査することができた。

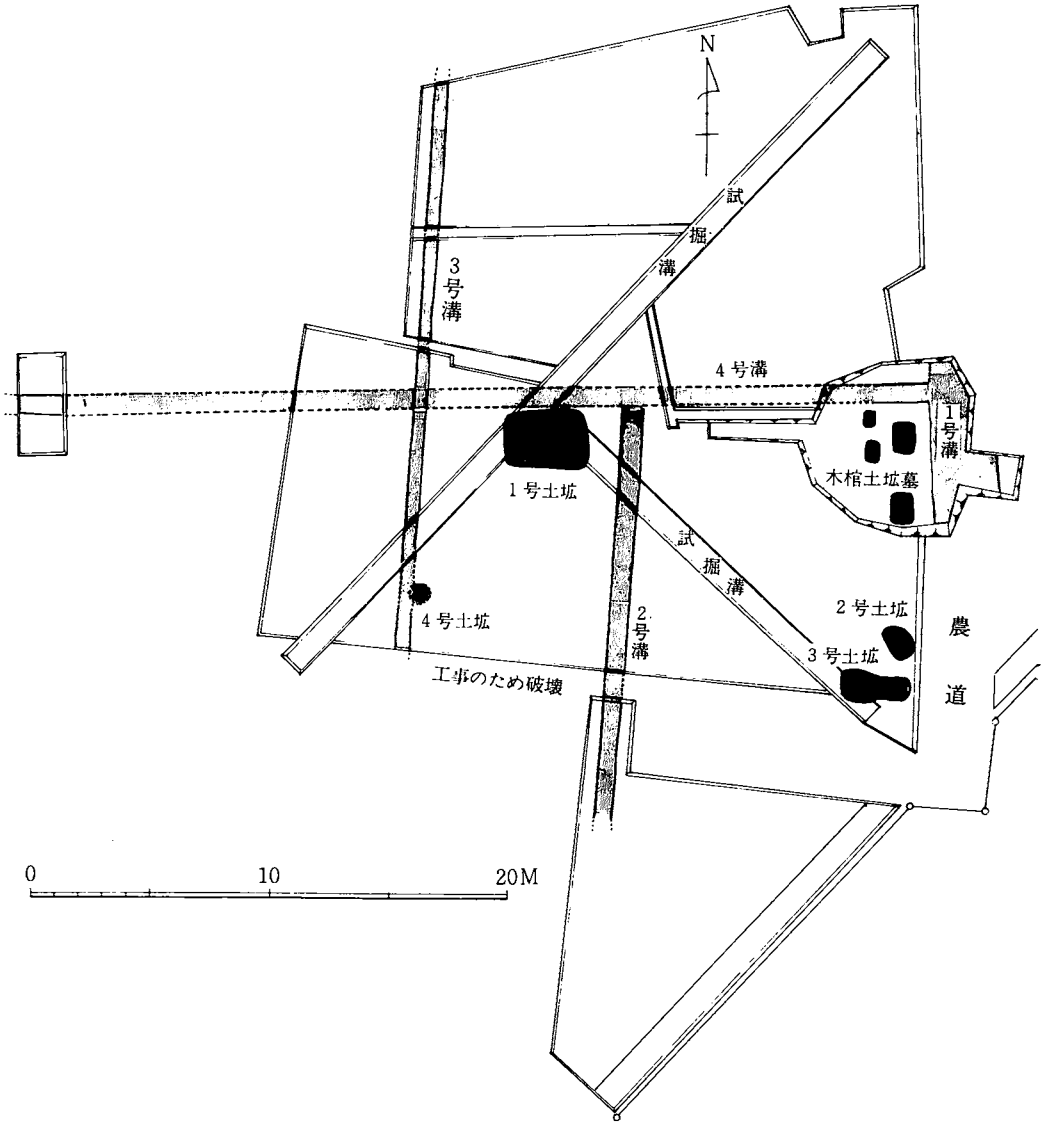
(1) 溝

溝は南北方向に3条（東から1～3号)、これと交叉して東西方向に4号溝がある。このうち1号溝は、一部しか検出しなかったが溝幅2m80cmと最も幅広である。2号溝は溝幅80cm、長さにして17m余検出した。これは7号溝と直交しているが、さらに北へ延びるものと思われる。3号溝は溝幅60cmで、幅が最も小さい。全長24mを発掘したが、南北はさらに延びるものと思われる。4号溝は1～3号溝とそれぞれ直交している。これは部分的に未検出の部分もあるが、他の溝と同様直線状に掘られていることは間違いない。

これらの各溝はいづれもII層上端から掘込み、断面がU字形に近く、年代的には比較的新しいものと思われる。また遺構相互関係の知れるものとして、木棺土壙の上に乗っていた盛土より古い。1号溝が現に使用している農道の下に埋没しているのも時代判定の資料となろう。

これらの溝は予め計画・設計された用排水のための農耕用溝と思われるが、溝の配列が現在の畑の畦畔の線にのるのも興味深い。同様の配列として、御船町久保遺跡[註1]がある。ここは台地上の遺跡で畦畔に沿った数条の溝が発見された。この溝中より歴史時代の須恵器や土師器が出土した。

(2) 土　壙


N
試
掘
溝
3
号
溝
4 号溝
1
号
溝
木棺土坑墓
1 号土坑
試
掘
溝
2 号土坑
4 号土坑
2
号
溝
3 号土坑
農
道
工事のため破壊
0
10
20M

第22図　遺構配置図

4基の土壙を調査した。しかし、4号土壙は道路工事のため、土木業者により削り取られ、単に確認に止めざるを得なかった。

1号土壙は2号溝と3号溝の間、4号溝の南側から発見された。3.6m×2.5mの隅丸長方形、深さ10cm位の土壙である。壙中より磁器の破片や近世瓦（メイタと呼ばれるもの）が出土した。

2・3号土壙は不正形をした土壙で、中から黒曜石の剝片が出土した。恐らく縄文時代の土壙と考えられる。

註1 「久保遺跡」8頁第2図遺構分布図参照　熊本県教育委員会　1975

2. 墳丘状盛土と木棺土壙墓

踏査の際墳丘状盛土が3基あった。うち1基は道路予定地から外されたので調査の対象としなかった。

STA. 105＋70mの東側の幅杭近くにある盛土は、一部が道路敷になるため、その部分の発掘を試みた。盛土は4.2m×1.8mの長楕円形で、高さ約60cmである。発掘の結果、単なる砂利の集積であることが知れ、それ以上の調査はしなかった。盛土の残余の部分には、他の1基のように木棺土壙墓のある可能性が全然ないわけでもないが、状況的にはその可能性は極めて少ない。

他の1基はSTA.106の中心杭の近くの農道脇にあるが、盛土が円形で最も整っていた。下から木棺土壙墓が出土したので、以下それについて述べる。

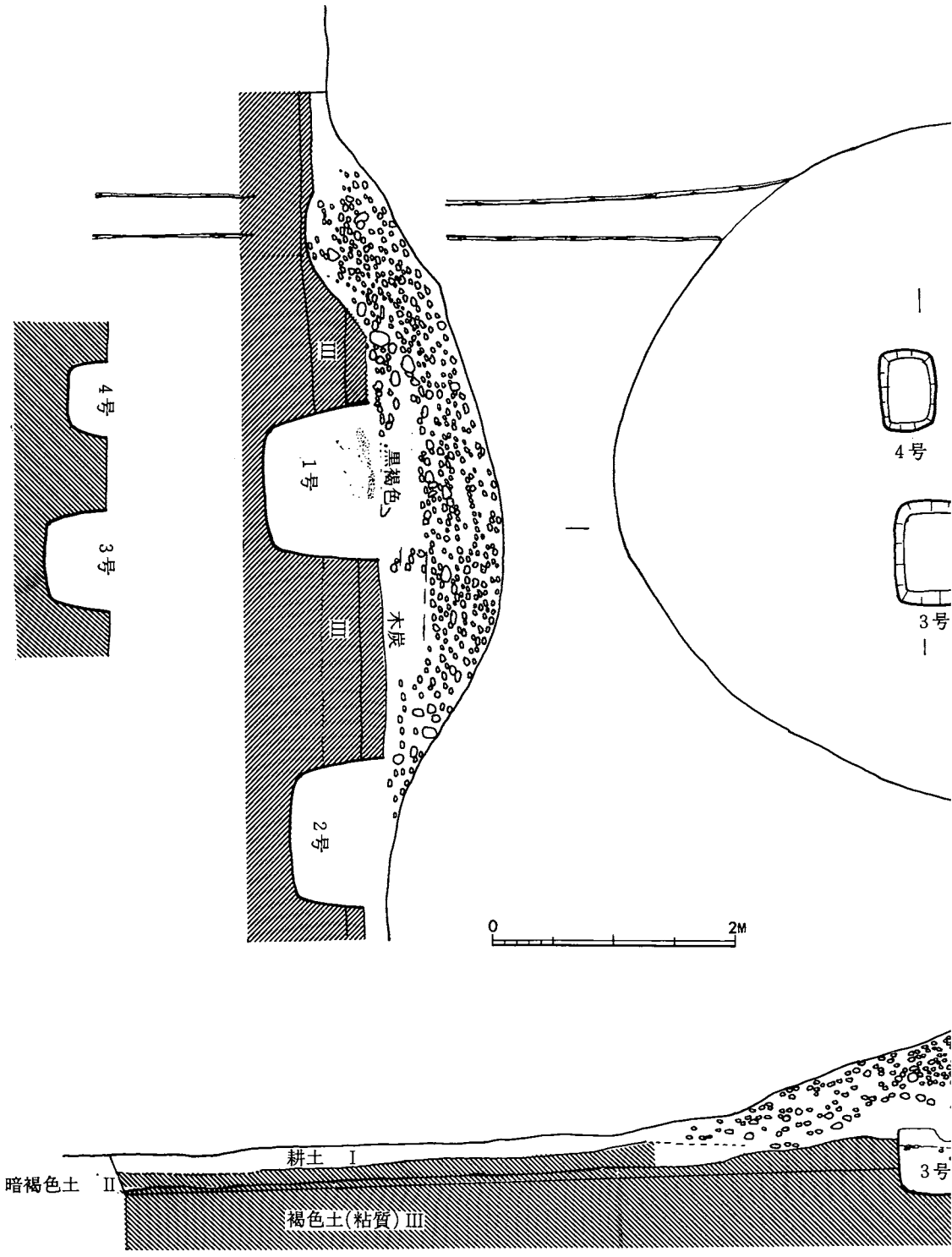
木棺土壙墓

木棺土壙墓のあった盛土は直径約6m、高さ約1mの円墳状をなしていた。この下から木棺土壙墓が出土した。

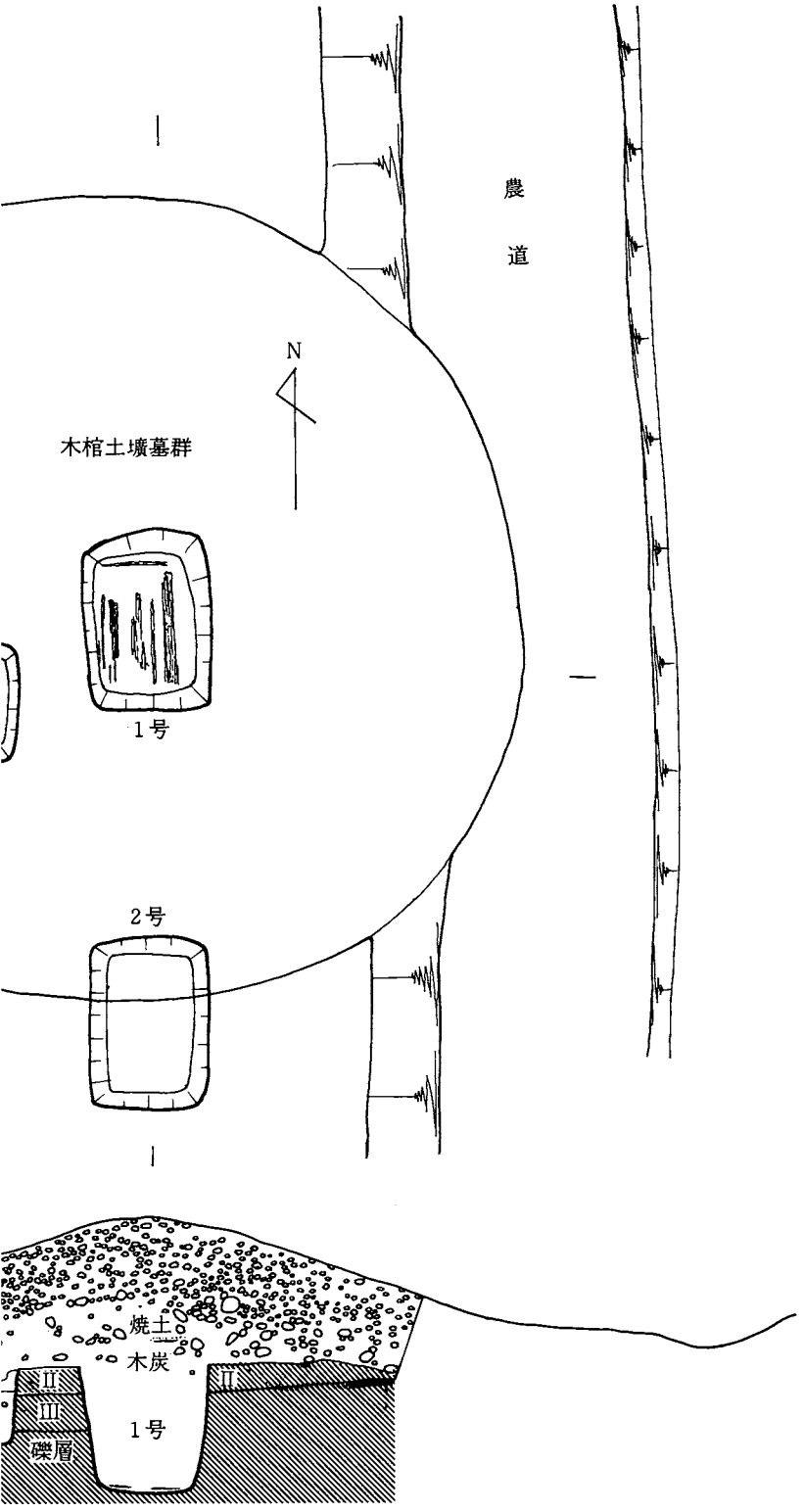
調査は盛土を鈎ノ手状に1/4ずつカットして、仔細に土層の状態を調べながら発掘した。そして最終的には盛土を全部取り除き、土壙の精査をした。盛土の砂礫に混って瓦、陶磁器などの破片が無造作に混入していて、その状態から周辺の畑地の耕作の都度取除き、積上げられたものと思われる。

盛　土　土層の断面のうえから余り明らかでないが、盛土は第Ⅱ層の上にのっていることは確かである。盛土の中は大部分が礫で、5～10cm位の大きさの礫がぎっしり詰っていた。墓壙の上には殆んど礫がなく、墓壙の掘込みの上20cm位のところに木炭と焼土の層があった。これは葬祭に関係のあるものかと考えられる。

1号墓　1号墓は盛土の中央部に長軸を南北にとり127cm×88cm、深さ86cmの墓壙に木棺が埋められていた。壙の掘り込みは下がいく分狭い。土壙の下から10cm位は漆黒色の腐植土で、その中から木棺が発見された。木棺は長軸方向に底板がならび、北側の木口に横板があった。底



第23図　木棺土壙墓


農
道
N
木棺土壙墓群
1号
2号
焼土
木炭
II
III
1号
礫層

板の西よりの部分に人骨が南北方向にのり、その上に一枚の板がのっていた。この板はおそらく棺の蓋にした板が落下したものと思われる。

以上のように木棺、そして人骨を確認することができたが、それらの遺存状態はよくなかった。しかし木棺の板目の方からして、木棺の大きさは90cm×50cm位であったことが考えられる。

2号墓　1号墓の南3mのところに、これと並んで2号墓があった。長軸は南北を向き、墓壙の位置は盛土からはみ出していた。墓壙は125cm×84cm、深さ76cmで、大きさ、形状とも1号墓に似ていた。墓壙中に木棺、人骨等は遺存しなかった。

3号墓　1号墓の西南1m20cmのあたりに3号墓があった。86cm×66cmの長方形の墓壙は、長軸を南北にして他の各墓と変りない。墓壙の深さ76cm、墓壙中に木棺、人骨は残っていなかった。

4号墓　3号墓の北約1mのあたりに4号墓があり、墓壙の規模は最も小さかった。形状のうえから他の各墓壙と変りなく、65cm×44cmの長方形、深さ34cmであった。墓壙中に木棺、人骨は確認されなかった。

3．出土遺物

土壙中よりの出土遺物については既に述べているとおりで、1号土壙より瓦破片と磁器片が出土した。いづれも近世以降のものである。2・3号土壙が黒曜石片が出土し、縄文時代後期～晩期のものではないかと考えられた。

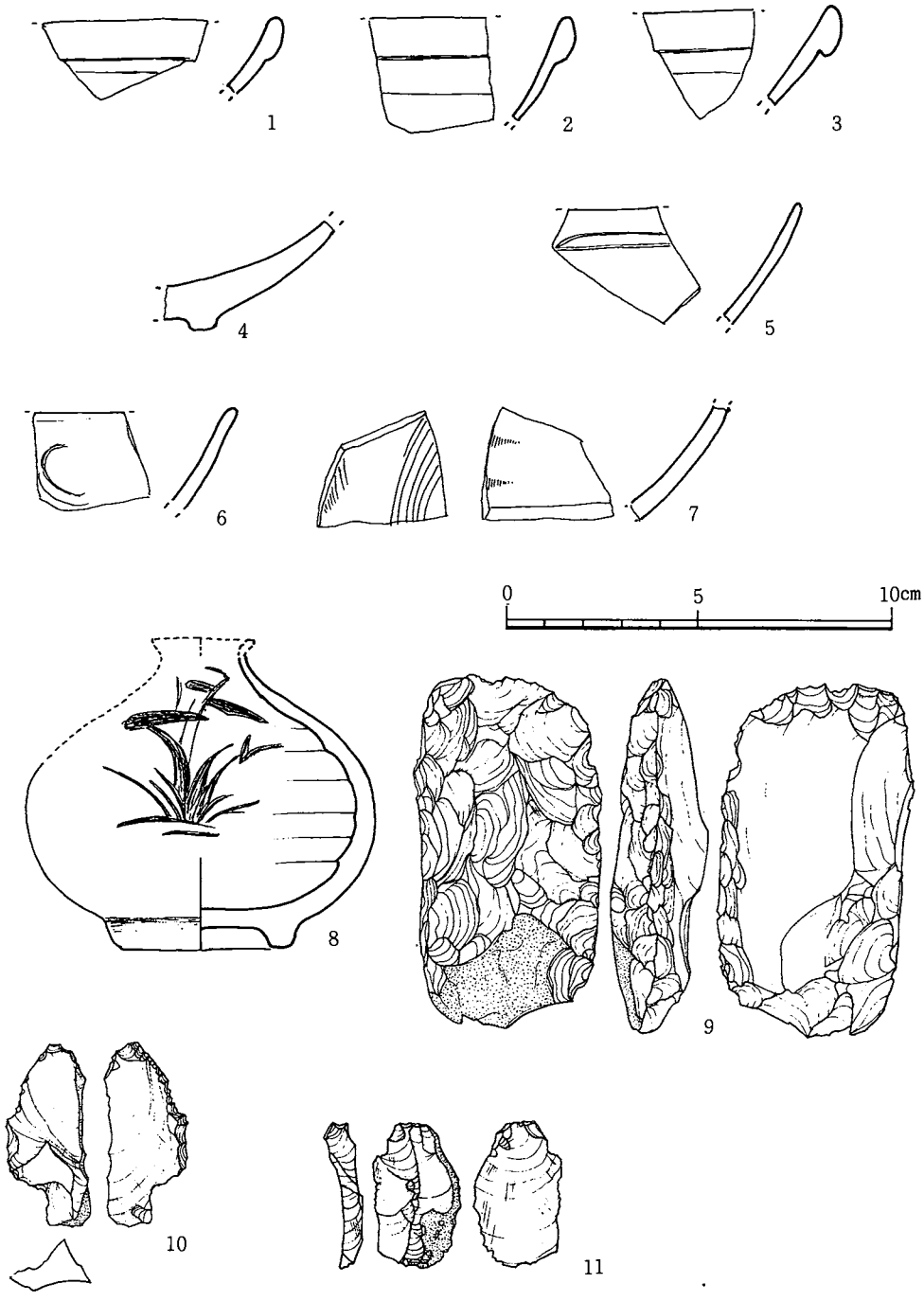
遺物について木棺土壙墓が出土した墳丘状盛土中より、礫中に混って遺物が出土したことは前に述べているとおりである。総量にしてかなりの量に達したが、いずれも破片で図示にたえるものは少ない。第24図はそのうち主なものである。以下図により説明すれば1～4は白磁である。玉縁で高台は低い。5～7は青磁で緑白色を呈し、施文がある。7はいわゆる猫描文である。

以上いずれも舶載磁器で、産地を中国華南に求められ南宋時代のものとみられる。

8は油壺で、口縁と肩から胴にかけて欠失している。灰色の器面には細かな貫入が入っており、肩には草花の絵柄が描かれている。絵柄の色調は灰緑色であり、やわらかな気品をただよわせている。

染付のある陶磁片は、この他にも多量出土しており、いずれも近世以降のものとみられる。

さらに墳丘状盛土の礫中には打製の石器も混入していた。第5図9～11がそれで、これもおそらく後から周辺の畑から投げ込まれ、木棺土壙墓上に積まれたものと考えられる。9は安山岩を材質としたスクレーパーで縄文の古い時期と見られ、10・11は黒曜石の剝片で刃部に使用痕がある。これは縄文晩期のものであろう。



第24図　盛土礫中混入の石器と陶磁片

第Ⅲ章　まとめ

本遺跡から溝、土壙そして木棺土壙墓が検出された。溝はすでに述べたとおり農耕用の用排水の溝と考えられる。その配列、方向には注目される。一つの規格性と法則性が認められるからである。

土壙については近世のもの、縄文期のものが発見された。本遺跡の南域については、調査中道路建設業者により破壊されたが、この一帯は近世期の生活の場であったことが考えられる。

墳丘状盛土が2個所あった。東南の一つはいわゆる砂利塚で、周辺の畑から排出した礫などを捨て、それがやがて塚状のものになったものと考えられる。STA.106の中心杭の近くにある盛土は形が整っていて、しかも、盛土の中心部あたりから木棺土壙墓が出土した。そのことから、盛土と一体をなす遺構ではないかとも考えられた。それも調査が進むにつれ、盛土とは関係のないことがわかった。

畑の片隅に墳墓がつくられる。その数も4基に達する。木棺土壙墓の上に地面より多少の土盛りがなされたことは、土層の断面から読み取れる。焼土、木炭のあるあたりまで土盛りされ、焼土、木炭は葬祭の際、火を燃やしたものともみられ、そのうち畑の片隅にあった墓地もいつの間にか畑等から出た石の捨て場と変り、墓が供養礼拝の対象から遠ざかったものと考えられる。それは現に地域の人々の中に墓があったとする伝承が残っていない。

木棺土壙墓は合計4基、1号墓から木棺片と人骨が出土したところから、箱形に組合せた木棺であることが判明した。他の3基も同様に木棺であることが考えられ、共にいずれも長軸が南北に向く。憶測をたくましくすれば、北枕にして埋葬したのではないかと考えられる。

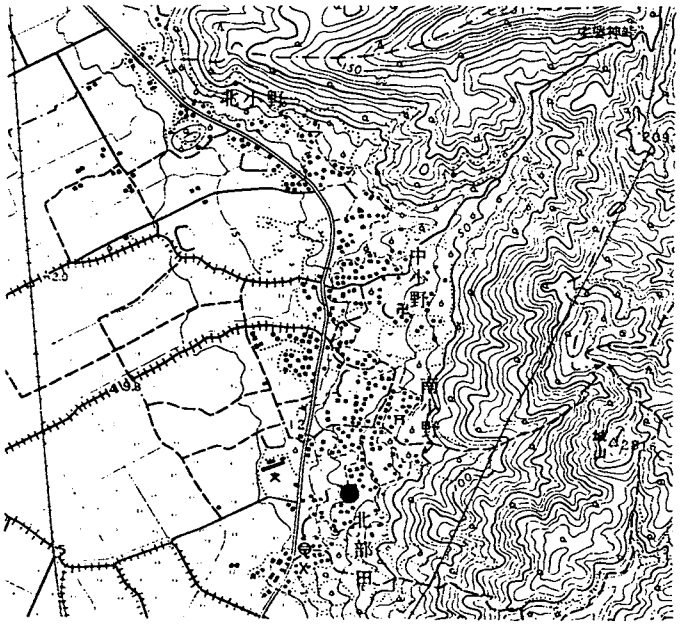
木棺土壙墓について、直接その時期を示すものはない。決め手はないが葬法等からして近世以降のものと考えられる。

（高木・緒方）

アケサン古塔碑群

第Ⅰ章　調査概要

アケサンの板碑は、熊本県下益城郡小川町大字南小野字御手洗に存する（第25図参照）。板碑は通称「ミタライサン」と称する湧水池の東端に、碑銘面を西に向けて立っていた。九州縦貫自動車道の建設に伴い、板碑の東にある秋葉大権現の堂宇が新設され、旧地点から新堂宇の境内に移された。



第25図　遺跡位置図（1／5万）

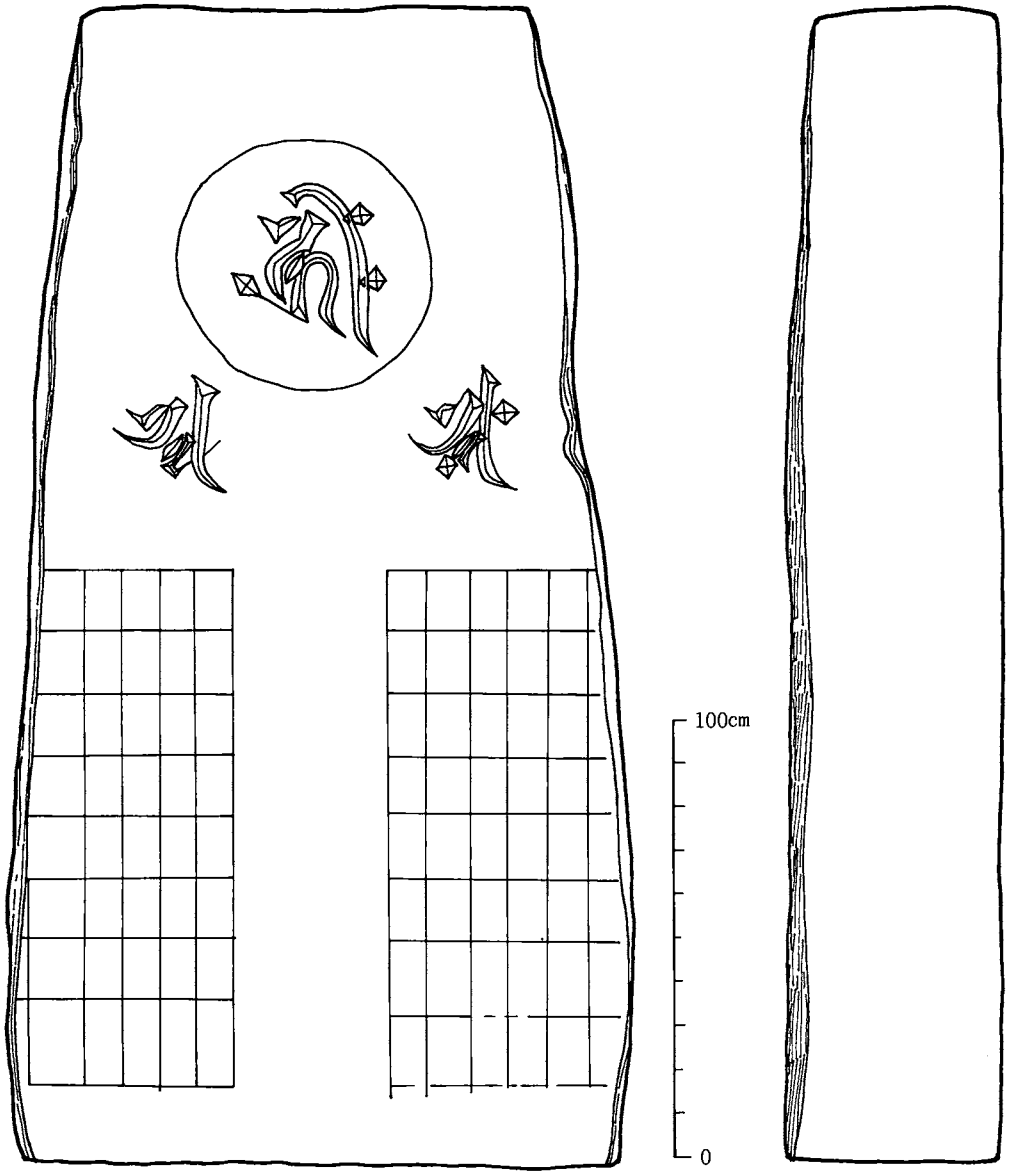
調査は昭和49年5月3日から同年5月10日にかけて実施し①実測図の作成、②採拓による銘文の判読、③写真撮影、④アケサンをめぐる伝承の採集、をおこなった。調査分担と調査者は以下のとおりである。

実測図・拓本の作成
島津義昭・上妻信寛・板楠和子
伝承の採集　　安田宗生
銘文の判読　　板楠和子

なお、本文を記すにあたり、昭和54年5月2日安田、島津の外に横尾泰宏が再調査をおこなった。銘文の判読は、板楠の検討したものを基にして島津、横尾がおこなった。なお、花岡興輝氏の助言を得た。記して感謝の意を表する。

第Ⅱ章　板碑と銘文

硬質の凝灰岩を用いて板碑をなす。銘面は平滑に研磨されているが、側面および裏面（銘文の逆面）は荒い鑿痕が上から下方向に多く残っている。正面観は四辺形をなす。基部に比して頂部幅が狭いため、安定感を抱かしめる。全高132cm、最大幅71cmをはかる。側面観は、やや裏面がかまぼこ状に凸状をなし、最大幅26cmをはかる。現在、板碑の上に、五輪塔の水輪を半截したような凝灰岩の笠を乗せているが、本来的なものかどうか疑わしい。この板碑は相当の重量があり、平坦であれば、そのまま地上に建てておくことも可能である。しかし、銘文面の衆生名を記している枡から下端まで、12cmしかなく、基部を地中に埋めて立てていたのでなければ別に基壇が設けられていたのであろうか。



第26図　板碑実測図

第27図　板碑全景

銘文は、①上半の種子　②中央部の願文　③左右の結縁者の法名にわかれる。

種子　直径約30cm、幅0.5cmの日輪に弥陀（キリーク　hrih）、向って右に観音（サ　sa）、左に勢至（サク　sah）を表わす。それぞれの種子は薬研刻りで力強い。刻りは深く約0.5cmをはかる。

銘文　中央に彫られている銘文は、２行縦に読むのが通常の読みかたであろうが、上段と下段にはっきりした区別を認めることができる。しかも、銘文の中心をなすものは、上段の２行にある「一念弥陀仏、即滅無量罪、現受無比楽、后生清浄土」と読める部分である。ここで「后生」とあるのは一般的には「後生」と書かれていることと同様である。この銘文と同様の銘文は各地の板碑や五輪塔に多くみられる。阿蘇郡小国町下城にある笠塔婆の銘文をはじめ、熊本市城山上代町高野辺田の自然石図像板碑、福岡県筑後市西牟田流天満神社の自然石梵字板碑の銘文などの例が報告されている。この点から見て、アケサンの板碑の銘文も、一般的な銘文であるといってもさしつかえないであろう。

つぎに、下部の銘文は摩滅や剝落のため解読が困難であるが、向って右の行の一部が「穏后生善處」と読める。これも、各地の板碑銘文に「現世安穏、後生善處」（玉名郡菊水町横枕の六地蔵塔ほか）とあることからも、銘文の類似性をみることができる。そのほかでは、「衆生滅罪」（荒尾市平井岩本橋々畔の六地蔵塔竿石ほか）などが一般的な銘文として報告されている。また、向って右下には「右志□□□□者」とあるが、これは「右志者」か「右志趣者」、あるいは「右意趣者」で始まるものと思われるが、剝落のため判読できない。

なお、造立年代は享禄五年（１５３２）11月２日と判読した。年号の数字がはっきりしなかったが、「壬辰」の年から推読した。ただ、11月２日は改元後（天文一）約３か月経過しており問題はあるが、肥後国は都から遠隔の僻地であり、また製作日数等のことなどから、改元前の年号が彫られることもあったのではないだろうか。

結縁者の法名　中央の願文の左右にそれぞれ８段５行の40個の枡を設け、総計80名の法名を記す。向って右側の左側４段目から左下にかけて風化が著しく進み、判読しがたいものが多い。

向って左の法名は左下のとおりである。

僧 却	祐 金	妙 經	道 心	道 秀
妙 芳ヵ	妙 金	妙 㕘	妙 泉	浄 仙
正 心	道 □	道 □	浄 園	妙 薫ヵ
妙 仙	妙ヵ 香	妙 昷	妙 真	道 金
浄ヵ 珎	道 □	道 立	道 笑	玅ヵ 泉
妙 永	□ □	妙 鏡ヵ	□ 源	□ □
妙 林	妙 才ヵ	道 繁	道 俊	妙 流
□ □	□ □	妙 幸	□ □	道 □

向って右の法名は右下のとおりである。

妙 躰	珎 永	妙 善	浄 香	□ □
妙 養ヵ	常 心	妙 薫ヵ	□ 泉	□ □
妙ヵ 元	□ 挙ヵ	妙ヵ 秀	妙 □	□ □
道 心	□ □	□ □	□ □	□ □
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □

第Ⅲ章　関連調査

1．湧水池に祀られる神仏

「アケサン」の語義は不明である。ここに湧水池があり、ムラの重要な水源となっている。この湧水池の上手に一宇の堂があり、観音・阿弥陀・秋葉の３体が祀られている。

しかし、阿弥陀仏は本来この地に祀られていた訳ではない。合祀に到った経緯は不明であるが、大正３年頃に、「馬場」という所から移されたものである。

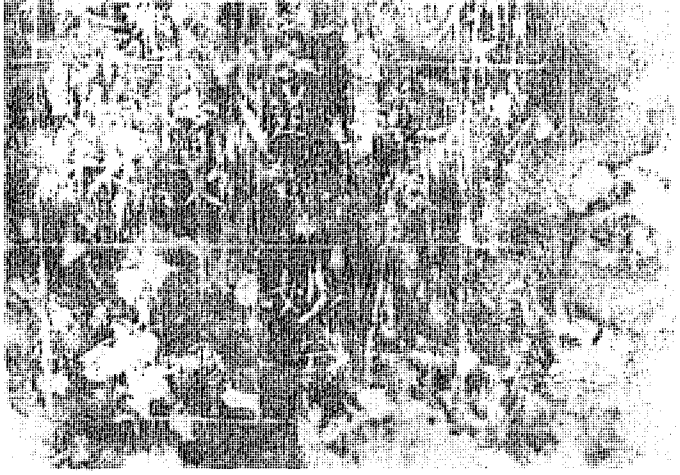
阿弥陀様の祭祀は特定の３軒のみでなされていた。そのいきさつもよく分からない。昭和49年段階ですでに２軒が転出してしまっており、個人祭祀の形態になってしまっていた。

祭日は新暦１月10日である（以下、とくに明記せぬ限り暦はすべて新暦で示す）。中小野の正寿寺（浄土真宗）の住職が仏前で読経するだけである。

観音は古くから現在地に祀られていたとされる。非常に小形の仏像である。

祭りはムラレヴェルで行われている。各戸から一定量の米を集め、これを粉にして団子を作

第28図　板碑拓影（全体）



第29図　板碑拓影（結縁者の法名）

る。これを供え、その後子供達に配る。

祭日は春の彼岸の中日である。かつては唄や踊りなどがあって大いに賑わったというが今はそういうことはなくなっている。

秋葉様は昔ムラ内に火事が続いたので勧請したと伝承されている。勧請の時期は不明であるが、それ程古いことではないといわれている。何処から誰が勧請したのかも明らかではない。

祭日は秋の彼岸の中日である。ムラレヴェルの祭祀で、司祭者は中小野の長谷寺（ちょうこくじ）（曹洞宗）の住職である。祭りには各戸から人が出ていた。内容は観音様とほぼ同じである。余興として相撲が行われ、近隣のムラからの来客も多かったといわれているが現在はその面影もない。

前述の如く、堂の前に湧水池があり、ムラの貴重な水源であるが、この一帯をミタライサン（御手洗）と呼んでいる。春の観音、秋の秋葉両方の祭りを指して「ミタライサンノマツリ」と称することもある。このことは観音、秋葉が早くからこの地に祀られていたことを示唆するものかも知れない。

けれども、堂そのものは秋葉様を祀るためのものであったと考えられる。堂の額は秋葉大権現となっている。アケサンという語もあるいは秋葉さんの訛ったものかも知れない。

観音が堂のなかに祀られている理由は不明である。御手洗の周辺に祀られていたのかも知れないが、戸外に祀られる観音としては小形すぎる。ただ、水神としての性格を有するものが水源にあったということも考えられなくはない。湧水点などに神仏を祀る例は小野部田地区に多く認められるからである。それらの事例についても報告しておきたい。

南部田　山縁部に湧水点がある。この水は戦前にあっては山田の灌漑用水として必要不可欠であった。戦後、山田が耕作されなくなってからムラの飲料水として利用されるようになっている。

この湧水点に小祠があり、妙見といっている。祠は古くは木造のものであった。そのため度々修理せねばならないということで昭和39年頃に石祠にかえたという。御神体はみることが禁じられておりどのような像であるか不明である。ただ、扉を開くとなかにはかならず蛇が一匹入っていると信じられており、その事実を体験したというムラ人も居る。この神が水、あるいは農耕と関連をもつものであることを暗示する。

祭日は7月18日である。妙見祭りと呼ばれている。ムラレヴェルの祭祀となっている。ただし、この地から水道を引いてから(昭和38～39年頃) この水道を管理する妙見水道組合が主宰する形式をとっている。ムラの各戸からも参加する。

祭りの前日、祠、水源の周辺部を掃除する。また、祭りに用いるサカキ（サカキであればよい。本サカキでなくともよいとされている）もこの日に集める。取りに行くのは経験を積んだ男性が選ばれる。特定の資格等はないという。取る場所も特定されていない。何処の山で取っても構わないとされる。

祭りの当日、サカキでヒモロギを作る。ヒモロギは1～1.2m位の高さのもので、これにシデをつける。結び合せる時は麻紐を用いることになっている。

このヒモロギの前にお神酒を供え、守山八幡宮（南部田にある）の神官が祝詞をあげて儀式を終える。それから区長宅に一同集まって直会となる。組合が司祭するようになってからは組合長宅で行われている。

祭りに参加せねばならないのは区長以下、ムラの役職者全員と、ヤマダモチジュウと称される山田の所有者である。山田を所有する家は10軒内外である（南部田の所有する田は、平坦地で40町、山田は2町程度である）。その他のムラ人も参加することになっている。但し、身内に不幸のあった家では参加を控える（かつては1年間は祭り事に加わることを許されなかったが、現在では30日を経過すれば構わないとされる）。

北部田　北部田地区の自治組織は中・瀬戸・南の3組に分かれている。

中組には湧水池があり、ムラの人々は共同で利用している。この傍に薬師様が祀られている。ムラ人はこの薬師をオヤクシサンと呼んでいる。薬師は水神であるといい、7月12日に祭りを行っている。

瀬戸組には四手観音が祀られている。その傍は湧水点であり、ムラの重要な水源となっている。

祭日は7月17日である。祭りのことをカンノウサンの祭りと呼んでいる。

祭りの当日、朝食前に各戸から人が出て共同井戸の掃除を行う。終ると井戸の中央に竹の筒（タカンポという）にお神酒を入れたものをさげる。

昼頃、摂取寺の住職がやってきて読経する。摂取寺が祭祀に関与するようになったのは比較的新らしい。大正末から昭和初期にかけての頃からである。それ以前には寺が関与することはなかったとされる。本来、この祭祀に寺社は関与していなかった。なぜ寺がかかわりをもつようになったかは不明である。

また、昼頃子供組（元来15才以下、今は中学生以下で構成されている）は蛤等の貝殻に菜種油を入れ、これにトウシミ（灯芯）をつけたものを祠の前の石段の両側に置く。これに火をともすのである。セントウロウ（千灯篭）といっている。

南組は弁財天を祀っている。ベンテンサンと呼んでいる。傍に湧水池があり、南組の主要な飲料水となっている。同時に、高倉溜池に引かれ灌漑用水としても利用されている。

祭日は7月18日である。当日、各戸より人が出て湧水点一帯を清掃する。それから米と塩を供えて祭りを行う。

中小野　馬喰谷（ばしょくたん）と呼ばれる谷間に水源がある。ここに妙見が祀られている。妙見はそれ以外に前田、榎原両溜池にも安置されている。妙見は石像であるが、像の姿は地蔵である。亀に乗った妙見像ではない。

中小野地区は４つの組に分けられている。祭りは座で運営される。座は組単位で引き受け、組がウケマエとなる。座は一年交替である。廻る順は、正寿寺島（しょうじゅうじ）→向島（むこう）→水見島（みずみ）→東島（ひがし）、となっている。

祭りはウケマエに当った組の小組合長が中心となって行う。小組合長が各戸より一定額の金を徴収する。この金をオミキセンという。これで祭りに必要な供物などを買い揃える。寺への通知は一週間前に行うことになっている。

祭日は６月18日であった。昭和45年頃から５月18日に変更された。田植時期が早くなったためであるという。以前は６月に田植をしていたが現在の品種は１ヶ月早く植える。そのために祭り日も実際の田植期に合せた。この祭りは田植期になされるものであるからである。

祭祀は上記の３ヶ所でなされていた。祀る順は、馬喰谷→前田溜池→榎原溜池、であった。現在は榎原溜池での祭祀を行っていない。中止の時期は不明であるが、長谷寺住職によれば第16代の住職の時代には祭りを行っていたとされる（現住職は第18代目）。また、中止した理由はよく分からない。両溜池は水稲栽培に重要な役割を果しているが、伝承によれば、榎原溜池は前田溜池よりも新らしく作られたものとされている（時期は判明しない）。そうすると、祭りは古い水源から新らしい水源へという順に廻っているといえる。

祭りは妙見の祀られている場所に竹を１本立てる。その竹の左右に竹の筒を各１個さげる。この筒のなかに酒を入れる。また、竹の上端部から干魚を１皿さげる。魚の種類は決まりがなく、干魚でありさえすれば何でもよいとされる。その前に線香を立て長谷寺の住職が読経する。それが終ると水面に酒を注ぐ。同様のことを両溜池でも行う。これが終了すると一同寺へ戻って宴会となる。この行事が終了するまでムラ人は酒を飲んではならないことになっている。

この祭りはムラレヴェルでなされている。参加するのはムラの役職者全員、及びムラの有志である。各戸から参加することは義務づけられていない。

北小野　湧水点は竹崎にある。これは北小野、竹崎両地区の主要な水源となっている。ここに妙見が祀られている。祭りも妙見祭りといっているが、小祠に安置されている仏像は地蔵である。地元の人もこれを地蔵と呼んでいる。小祠の、向かって左側に、「安政十辛丑四月吉日」、右側に「寄進竹崎村庄屋吉左衛門、総百姓中」裏面には「釈梅英童子、釈浄永童子」、と刻まれている。この仏像の祀られ方をみても明らかに地蔵として意識されていることが分かる。では何ゆえここの祭りを妙見と呼ぶのか不明である。妙見は地蔵と本来異なった個所に祀られていたのかも知れない。あるいは神体を異にしていたのかも知れない。祭祀をみると地蔵の前で妙見の祭りがなされている。

祭りは田植終了後の７月18日となっている。行事内容は先に述べた中小野とよく似ている。但し、祭りに関与するのが神官である（山王神社、日吉神社とも呼ばれている）。従って、線香のかわりに御幣、お経のかわりに祝詞があげられる。

それから、この祭りにはムラの役職者全員、区長、評議員、及び水番２名はかならず参加しなければならないことになっている。ムラレヴェルの祭祀であるが各戸から参加せねばならないということにはなっていない。水番の2名はかならず湧水点から汲んだ水を飲まなければならないことになっている。水番は正月11日のハツヨリ（初寄）の席上で決められる。任期は１年である。その仕事内容はムラの田の用水管理が主たるものである。このことは妙見の祭りが稲作とかかわりをもったものであることを示唆しているといえよう。

このように、湧水池や溜池など、ムラにとっての重要な水源になっている個所に神仏を祀り、祭りを行うことが小野部田地区に広く認められている。

この祭祀は県下に広く認められる「川祭り」とは別個の行事である。小野部田地区においても川祭りは期日をたがえてなされている。

川祭りはいくつかの点において妙見などの祭りと異なっている。

まず、祭祀の対象となっている地点が多いことである。

第２に、祭祀が子供組を中心になされ、寺社がこれに関与していないということである。

第３に、その日時は不特定となっており多くは苗代作りの頃（土用時期）や田植後になされることが普通である。

たとえば、北小野の川祭りは上記の妙見を始め、ムラ内にあるすべての水源を祀って廻る。祭日は定められていないが苗代作り直前（土用のうち）の真竹の若芽の出る頃に行われている。祭りには若竹で編んだ水ザルを作る。水ザルは桶状のものである。このなかに神酒を入れる。これと御幣を一緒にしてそれぞれの地点に供える。この行事は子供組が中心となって行われる。

北部田の瀬戸組では子供組と、大人が別個に祭りを行っている。竹の筒に神酒を入れたものを竹にさげ、それを山の湧水点、瀬戸溜池、あるいは共同井戸などに供えて廻る。子供組が廻り終ると大人達が同様のことを行う。時期は一定していないが田植直後になされる。

このように湧水点での祭りと川祭りとは異なっている。両方の祭りとも水と関係する祭祀である点では共通している。しかし、その意味は違っているとも思われる。川祭りの方は子供の水難よけとして強く意識されているが、一方にはそれが認められない。それ以外の相違点は明確にし得ない。ただ、小野部田地区における湧水池の祭りについて次のことが指摘できよう。

湧水点に祀られるものとしては妙見が多い。妙見は中小野の長谷寺においても祀られており、水神とされている。妙見は水神であるという事例は小野部田地区だけでなく、県下全般にいえることである。若干、それらの事例について報告しておきたい。

熊本市内には妙見を祀るムラが点々とみられる。その大部分は水と関係ある地点に祀られている。

註1

戸島町北向下に３個の自然石を配した神体があり、これを妙見と呼んでいる。この地はこの附近の唯一の水源である。

小山町字小山居屋敷にも妙見が祀られている。尖石3個が神体となっている。この妙見の祠堂の背後は凹地となっており昔の井戸跡といわれている。

長嶺町大字南字居屋敷にも妙見社が存在している。祀られている所は川岸の段丘面であり、湧水点が近くにある。

沼山津の中津代里の小堂にも妙見が祀られている。男女神像各2体が鎮座している。この附近は湧水地帯であり、現在でも井戸は浅くても自噴する。妙見は火の神とされている。

健軍町下村の妙見に小堂があり、この祠を妙見社といっている。その附近に湧水池がある。

飽託郡北部町太郎迫の太郎迫神社の祭神は妙見とされている。神社の脇は豊富に水が噴き出している。この湧水はいかなる旱天時にも枯れることがないといわれている。また、旱魃の折には近郷の村々から人が集まり雨乞いをしていた。妙見は水神であると伝承されている。

玉名郡菊水町の日平にも妙見が祀られている。神体は自然石であり、その横は湧水池である。

球磨郡五木村には2ヶ所妙見が祀られている。梶原の妙見はムラの唯一の水源となっている湧水点にある。清楽における場合も同様である。

このように、湧水池に妙見を祀る例は多い。同様の事例は玉名、鹿本、上・下益城、阿蘇、八代、球磨、及び芦北の各郡一帯に認められる。

水源以外の所に妙見を祀るムラもみられる。阿蘇郡西原村小森には妙見が3ヶ所祀られている。そのうち2ヶ所は湧水点にあるが、他の1ヶ所は田の用水の取り入れ口に祀られている。上益城郡益城町寺中の妙見は用水路の入口附近に安置されている。ここでも妙見は水神であるといっている。

このように、県下における妙見は水と深く関係するものである。明和9年（1772）に編纂された『肥後国誌』をみると、妙見が県下に広く認められ、水神と考えられている例もある。その所在は第7表の通りである。

このうち、前述の熊本市における自然石3個を配した妙見は火の神とされている。3個の自然石という神体は明らかに火の神である。火の神とする事例は稀であるが湧水点に祀られていることは注意されてよいだろう。水と火とはきわめて共通するものであるから火の神となっていてもおかしくはない。ただ、事例が少ないことや地域的に接近していることもあるのでより詳細な調査がなされなければならない。

それから、男女神像一対の妙見は山の神とも考えられる。これも調査不足であり、改めて調査がなされなければならないと思われる。かかる例外はあるが、大部分は水神、もしくは水と関連ある神として妙見を祀っている。一般にいわれる星との関係は語られておらず、そういった行事もみられない。

今一つ妙見と関連ある祭りとして「星祭り」が挙げられる。県下にも点々「星祭り」と呼ばれる行事が存在している。祭日はいずれも節分の日である。

しかし、この星祭りは妙見信仰とほとんど関係がないようである。まず、この行事はムラレヴェルの祭祀になっている例はきわめて稀であり、ほとんどが個人レヴェルの祭りである。その内容は「家内安全　五穀豊穣」のお札を配るだけであり、星との関連を示す行事は認められない。更に、この星祭りを行うのは寺社であり、特定の宗派によって多くなされているという傾向も認められない。

このように、県下の妙見は星とは関係がなく水神として意識されているといえる。かかる点からすると小野部田地区の妙見も県下に一般的なものの一つであるといえよう。

次に、小野部田地区の妙見と八代市宮地の八代神社との関係の有無である。小川町における秋祭りは八代神社の祭礼と共通したものとなっている。

旧小川町は加藤清正によって創設されたと伝えられており、3町から成っている。この町の秋祭りは旧暦10月15日（現在は新暦10月15日）に行われている。この祭りにはガメ（亀）、獅子、及び奴が登場する。

亀は2×1.5m位の大きさの頭をもったもので、頭部に1人、甲の部分に6人が入り、亀の周囲を20人程の男性が外から支える。

獅子は雌雄2頭立てである。1頭に2人入るものであるが、古参の者が頭、新参者は尻の部分を受け持つことになっている。獅子舞の演目は、オーヒ、ツリダシ、ハナワリ、タマビ、ニテン、の順に演じられる。雌雄の獅子の玉争いが中心となっており、最後に雄獅子が玉をくわえる形式をとっている。

なお、この獅子頭は楠をくり抜いて作られたものである。これは小川神社に神が到着した際、社殿がまだ完成していなかったので神は一晩船中に泊られた。その船を繋いだ木が楠であったと伝えられている。この楠は神木となっている。小川神社の祭神は阿蘇四の宮で、海上よりこられたとされる。

奴は子供が中心で道中を行う。道中をトコセイという。14～20名位で構成され、先頭に毛槍、傘鉾2名が立つ。

行列はこのトコセイ、獅子、亀の順に組まれる。明治32年頃までは獅子の前にコシウマが子供達によって出されていた。

このような祭礼は八代神社と共通している。両者の間に何らかの関係があったと考えられる。この妙見信仰が隣接する小野部田地区にも波及していったと考えられる。八代妙見と関係ある[註2]妙見は「白木妙見」など「白木」を冠することが多いようである。

それから八代妙見に関してもこれが北斗七星を祀ると教義上説かれているが、水との関係を示唆する資料、伝承のあることは注意されてよかろう。八代妙見もまったく水と無関係という[註3]訳ではない。

中小野の長谷寺の妙見は白木妙見であり、この点から八代妙見との関係をもつと思われる。

ただ、その姿は亀の上に乗った形ではない。このように神名と像の形態がかならずしも一致しないということは前述の事例からもいえよう。これは妙見に限ったことではない。アケサンの秋葉様も不動の姿をしている。しかも、秋葉様は火伏せ神であるというが作神様ともいっている。秋葉様が農耕と関係する神となっている。このようにみてくると、妙見も農耕—殊に水田耕作—とかかわりをもった神として考えられているのかも知れない。ただ、この妙見を広めた時期やその役割を担った者などについては不明である。『肥後国誌』などをみると、この周辺地域に修験者の活動の跡が窺えるし、熊野、白山大権現といった修験道関係の神仏が認められる。これら修験の活動も注意してみる必要があろう。

以上、簡単にアケサンとその周辺部における石像物に関する民俗調査の結果について報告した。

しかし、これら水源等に祀られる神仏は県下に多くみられるが、それらの祭祀については調査不充分でよく分かっていない。これらを明らかにするためには各湧水に伴う伝承を詳細におさえてみることが必要であろう。湧水はしばしばその湧出にかかわる伝承をもっていることがある。それとそこに祀られる神仏をあわせて調査せねばならないであろう。今回の調査ではその点まで行うことができなかった。

註1　熊本市内の妙見に関する記述は、『昭和46年度熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会、昭和48年、56、66、117、172頁を参照した。市内にはまだ多くの妙見が祀られているがそれらの紹介は省略した。

註2　八代妙見社と同様の妙見来朝の由来をもつ下益城郡豊野村の小熊野妙見社に『小熊野国木山妙見宮祭礼の旧儀』という文書が残されている。この書によれば妙見は亀蛇に駕して渡来した異神であるとされている。また、八代妙見社からこの文書を見にやってきたことが記されている。この文書については板楠和子氏の教示を得た。

註3　妙見が水神としての性格をもっていることは妙見を水徳神とする説のあることからも窺える。八代妙見宮にかかわる史実として湧水の発見の話が伝えられている。更に、八代宮祭礼に山中の泉に神幸行列が立ち寄ることになっている。この泉は弘法大師の力によって湧出したものとされている。いわゆる弘法清水の伝説である。八代妙見が水とのかかわりをもっていることは注意してよかろう。

また、前述の小熊野神社の史料には雨乞いがなされていたことが記されている。このことは北部町の太郎迫神社の事例と共通している。雨乞いを行うのは妙見を祀る神社に限られている訳ではないが、妙見と水とが深くかかわっていることを示すものであろう。

それから、小熊野神社の場合は山伏が祭祀に関与していたようである。このことから修験との関係も一応考慮してみる必要があろうかと思われる。

妙見信仰がいつ頃広められたかということははっきりしない。慶長年間の検地帳の字名として妙見がみられる。この時期に妙見が入っていたと思われる。ただ、その頃の信仰の広がりは不明である。近世になって加藤清正が入国して妙見信仰が広められたということは確認できない。

第7表　『肥後国誌』にみられる妙見

郡	手永	村名	現行政区	名称	祭日
飽田郡	五町手永	亀井村	熊本市	妙見社	11月15日
		太郎迫村	飽託郡北部町	〃	9月19日
	池田手永	牧崎村	熊本市	〃	9月9日
		池上村	〃	妙見堂	
託麻郡	本庄手永	本山村	〃	妙見宮	9月19日
		戸島村	〃	〃	10月18日
		大江村	〃	妙見社	11月15日
		小山村	〃	〃	10月18日
山本郡	正院手永	吉松村	鹿本郡植木町	妙見宮	
		内村	〃	〃	
		中浦村	〃	〃	
		下野村	〃	妙見社	
		下大清水村	〃	〃	
		円台寺村	〃	妙見	
		小吉松村	〃	〃	
合志郡	竹迫手永	板井村	菊池郡七城町	妙見宮	
	大津手永	瀬田村	〃　大津町	妙見社	9月18日
菊池郡	河原手永	四町分村	菊池市	妙見宮	11月13日
		上妙見村	〃	〃	10月18日
	深川手永	山崎村	菊池郡七城町	妙見社	
山鹿郡	中村手永	上御宇田村	鹿本郡鹿本町	妙見宮	
		下御宇田村	〃　〃	妙見社	
		山内村	〃　鹿央町	〃	
	山鹿手永	城村	山鹿市	妙見森	
玉名郡	内田手永	焼米村	玉名郡菊水町	妙見宮	
		日平村	〃	妙見社	
	中富手永	岩原村	鹿本郡鹿央町	〃	
	坂下手永	山下村	〃	妙見森	
	南関手永	肥猪村	玉名郡南関町	妙見宮	11月20日
		相谷村	〃　〃	〃	
		上板楠村	〃　三加和町	〃	11月7日
		岩村	〃　〃	妙見社	
		吉地村	〃　〃	〃	10月8日
	小田手永	原倉村	〃　玉東町	妙見宮	
		坂門田村	玉名市	〃	
		向津留村	〃	〃	
		小天村	玉名郡天水町	〃	
	荒尾手永	樺村	荒尾市	〃	
		原万田村	〃	妙見社	
宇土郡	郡浦手永	浦上村	宇土市不知火町	妙見宮	11月13日
		網引村	宇土市	〃	10月18日
		恵理村	〃	妙見社	
上益城郡	鯰手永	井寺村	上益城郡嘉島町	妙見社	10月18日
	沼山津手永	沼山津村	熊本市	妙見宮	
		平田村	上益城郡益城町	〃	
		戸次村	菊池郡菊陽町	〃	
	甲佐手永	西寒野村	上益城郡甲佐町	〃	

郡	手永	村名	現行政区	名称	祭日
上益城郡	木倉手永	南木倉村	上益城郡御船町	妙見宮	
		南田代村	〃　〃	〃	
		水越村	〃　〃	〃	
		東水越村	〃　〃	妙見社	10月18日
		北上野村	〃　〃	〃	
	矢部手永	中島村	〃　矢部町	妙見宮	
		原　村	〃　〃	妙見社	
		犬飼村	〃　〃	〃	
		菅　村	〃　〃	〃	
		北中島村	〃　〃	〃（二宇）	
下益城郡	中山手永	中小路村	下益城郡中央村	妙見宮	
		上江村	〃　豊野村	白木妙見社	10月18日
		糸石村	〃　〃	白木妙見宮	
	砥用手永	越早村	〃　砥用町	妙見宮	
		小崎村	〃　〃	妙見社	
	杉島手永	吉野村	〃　城南町	〃	
		七島村	〃　〃	妙見宮	
	河江手永	内田村	〃　松橋町	妙見社	
		南部田村	〃　小川町	〃	
		萩尾村	〃　松橋町	〃	
八代郡	高田手永	植柳村	八代市	妙見社	
		北片野川村	〃	〃	
		松崎村	〃	〃	10月21日を11月1日に改む
		下井上村	〃	竹原妙見宮	9月9日
		宮地村	〃	妙見宮	
	野津手永	宮原村	八代郡宮原町	三宮妙見社	6月晦日・9月9日
	種山手永	柿迫村	〃　泉　村	妙見宮	
阿蘇郡	内牧手永	蔵原村	阿蘇郡阿蘇町	〃	

第7表　説明文

『肥後国誌』に記載されている妙見をみてみると、その大部分が「社」とか「宮」となっている。それ以外の表記としては、単に妙見となっているものが2、森が2、堂が1つであり、その数はきわめて少ないといえよう。

社、もしくは宮と記されている妙見を調査してみると、社殿等を有していない、あるいはきわめて小さな祠に祀られているものも認められる。たとえば、日平の妙見は神体が大きな自然石でその下は湧水点となっている。祠堂はなく小さな鳥居があるだけである。このような事例も「妙見社」と記されている。このことからみて『肥後国誌』の記述形式がある程度統一されていたのではないかと思われる。少なくとも、祠堂を有するものはすべて社か宮としているようである。

なお、このことは寛文9年（1669）に書かれた北嶋雪山の『国郡一統志』における記述と比較すると対照的である。両書の記述の相違は第8表に示したとおりである。

第8表　両書の対照表

村　名	名　称	『国郡一統誌』名称	備　考
亀井村	妙見社	妙見	
太郎迫村	〃	〃	
牧崎村	〃	〃	
本山村	妙見宮	妙見天神・妙見森	
戸島村	〃	妙見石	
大江村	妙見社	妙見	
円台寺村	妙見	妙見	
瀬田村	妙見社	妙見	
上妙見村	妙見宮	妙見	
山崎村	妙見社	〃	
下御宇田村	〃	妙見	
山内村	〃	〃	
焼米村	妙見宮	妙見	
岩原村	妙見社	妙見大菩薩	
相谷村	妙見宮	妙見	
上板楠村	〃	〃	『国郡一統志』は板楠
岩村	妙見社	〃	
吉地村	〃	〃	
向津留村	妙見宮	〃	『国郡一統志』は向鶴
小天村	〃	妙見森	
樺村	〃	妙見	
浦上村	〃	妙見	
網引村	〃	〃	
西寒野村	〃	妙見森	
南木倉村	〃	妙見	
南田代村	〃	〃	
水越村	〃	〃	
北上野村	妙見社	〃　二所	
原村	〃	〃	
犬飼村	〃	〃	
菅村	〃	〃	
北中島村	〃　二宇	〃　二	
中小路村	妙見宮	妙見宮一・妙見森一	
糸石村	白木妙見社	妙見	
小崎村	妙見社	小崎大明神・本地妙見	
吉野村	〃	妙見二社	
七島村	妙見宮	妙見阿弥陀	七島村は碇村の内
萩尾村	妙見社	妙現	『国郡一統志』は南萩尾
植柳村	〃	妙見	
松崎村	〃	〃	
下井上村	妙見宮	〃	
宮地村	〃	白木山妙見社	

第8表　説明文

この表は『肥後国誌』と『国郡一統志』に記述されている妙見の名称を比較したものである。両書に載せられているものだけを挙げているので比較し得る事例は『肥後国誌』にみられるものの半

分程でしかない。『肥後国誌』の事例は『国郡一統志』を大きく上廻っている。しかし、村名が一致しないものが多いことは両書の記載の際の選択基準が異なることに起因しているからかもしれない。あるいは他の事由によるものであろうか。この点は明らかにし得ない。

両書の妙見の名称についてみてみると、名称の一致する事例はきわめて少ない。国誌の社、宮という記述が目立っている。何らかの記述上の統一がなされた可能性がある。一統志の方は単に妙見と記されていることが多い。これも著書の判断によって名称が統一されたようである。一統志の妙見記載例は第9表に掲げたとおりである。一統志における記述はいくつかの基準が設けられていたようである。そのことは第9表の所で述べる。

第9表　『国郡一統志』にみられる妙見

郡・村名	名称
飽田郡　牧崎	妙見
亀井	〃
太郎迫	〃
玉名郡　小天	妙見森
向鶴	妙見
中坂門田	〃
山北	妙見森
樺村	妙見
南関	妙見　三所之二森
相谷	妙見
下岩	〃
大田黒	〃
板楠	〃
西吉地	〃
焼米	〃
安楽寺	〃
下鍛治屋	〃
岩原	妙見大菩薩
山鹿郡　鍋田	妙見森
下御宇田	妙見
山本郡　山内	〃
円台寺村	〃
賀茂	〃
菊池郡　水嶋	妙見森
辺田	〃
山崎	妙見
岩本	〃
上妙見	〃
下妙見	妙見天神一社
阿蘇郡　田上	三坂妙見
上久木野	妙見
中久木野	〃
白河	〃
苅屋	〃
北里	〃
秋原	〃
阿蘇郡　満願寺	妙見
合志郡　瀬田	妙見
鳥栖	〃　二所
瀬田	〃
託麻郡　大江	妙見
戸嶋	妙見石
本山	妙見天神・妙見森
益城郡　桐原	妙見石
入佐	妙見
麻生	〃　二所
成君	〃
井無田	妙見森
鶴底	〃
菅	妙見
目丸	〃
犬飼	〃
小原	妙見石
永田	妙見
原村	〃
寺川口	〃
田小野	妙見森
大野	妙見
南中嶋	〃
北中嶋	〃　二
三箇村	〃
猿渡	妙見森　二所
勢井	妙見
南田	妙見森
係石	妙見
上郷	白木妙見社・同上宮・中宮
中小路	妙見宮一森一
出目	妙見
西馬場	〃
神園	〃
大岩野	妙見森
中村	〃
南木倉	妙見
南甘木	妙見森

郡・村名		名称	郡・村名		名称
益城郡	南上野	妙見	益城郡	鰐瀬	妙見森
	北上野	〃　二所		上鹿野	妙見
	南田代	〃			
	水越	〃	宇土郡	三角浦	妙見
	小崎	小崎大明神・本地妙見		網引	〃
	世持	妙見		浦上	〃
	中横田	妙見森			
	西寒野	〃	八代郡	宮地	白木山妙見社
	南萩尾	妙見		井上	妙見
	吉野	妙見阿弥陀		松崎	〃
	塚原	妙見森		植柳	〃
	平原	〃		野津	三宮妙見

第9表　説明文

『国郡一統志』の妙見をみると、その記述の仕方は3つに大別できそうである。

第一には、明らかに社殿等を有するもの、あるいは社等に妙見を祀っているものについては社名を挙げている。白木妙見社、妙見宮、あるいは妙見天神社といった記載になっている。

第二には、神体とか神仏名の明らかなものについてはそれが記されている。たとえば、妙見石というのは神体の形から記されたとみられる。神仏名としては妙見大菩薩とか妙見阿弥陀といったもの、あるいは小崎大明神本地妙見という記述がみられる。それ以外に三坂妙見、三宮妙見といった例も認められる。

第三には、単に妙見、または妙見森と記述されているものが非常に多い。これは上の二つの分類に入れられぬものをすべて含めているようである。小祠（神体を納めるだけの厨子のようなものも含め）や、明確な神仏像を有していないものがここに分類されていると思われる。但し、現在調査してみると、太郎迫のように神社の祭神として妙見が祀られている例も認められる。雪山が調査した段階では妙見を祭神としていなかったのかも知れない。より詳細に検討すべきであろうが現時点では明らかにし得ない。同様の例が他にもあるのではないかと考えられる。個々の事例について調査を行う必要があろう。

2．板碑周辺の石造物

秋葉大権現の境内には地蔵像の厨子と供養碑がある。厨子南面には「寛政4年、奉寄進、沢水若者中」とあり、下益城郡豊野村大字安見字沢水から寄進されたものである。供養碑には、「南無地蔵王菩薩」（正面）「享保2丁酉3月吉日」（南面）「小川町岩崎新平」（北面）と彫られている。さらに、向って右手の奥には、文化年間から昭和初期までの約30基の墓石塔をもつ古墓地がある。

第Ⅳ章　まとめ

アケサン板碑の調査を通じて、明らかになった点と、今後の問題点について言及する。

①アケサン板碑は、凝灰岩の板石を加工した「弥陀三尊」を刻んでいる。

②板碑の形態および銘文などは、肥後の通有のものと相違点はない。但しこの板碑に基壇が存した可能性もあるが明らかにしえない。肥後の板碑に共通する銘文、すなわち「一念弥陀仏、即滅無量罪、現受無比楽、後生清浄土」については、多田隈豊秋著『九州の石塔』（西日本文化協会、昭和50年７月20日）や熊本県文化財調査報告第37集『下城遺跡Ⅰ』（昭和54年３月31日）などに報告されている。

③板碑の原位置はどこであったろうか。それに関する伝承もない。勿論、現在地の周辺に元より存したとみてもよい。板碑と湧水池の関連について聞き取りを実施したが、両者を関連づける伝承はなかった。そうしてみると、板碑の東に存する堂宇との繋りが考えられる。しかし現在の堂宇の本尊・什物などには板碑の示す16世紀半まで遡るものはない。今後、更に検討を要する問題である。

附論 1

つづの山遺跡

—泥塔と経塚—

調査・執筆者　緒方　勉
高木正文

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……89
Ⅱ　泥塔発見と調査の契機……91
Ⅲ　調　　査
　1．調査前の状況……91
　2．検出した遺構と遺物……92
Ⅳ　まとめと考察……98

I　遺跡の位置と環境

白川・緑川・加勢川と大小の河川が熊本平野を東から西へ貫流し、有明海に注ぐ。平野の北西部に金峰山、南には雁回山（木原山)、そして宇土半島基部の山々が谷ふところを東に弯入するあたりに飯田山・船野山の山なみがある。これは熊本平野のまわりをとりまくところの一つの修景である。

飯田山（標高431m）の山裾がなだらかに西に延びるあたり、いくつかの村々が点在する。その一つに御船町下高野の集落があり、「つづの山遺跡」はここに所在する。集落のある下高野神社との間には小さな谷が入り、遺跡は谷向うの小丘陵上に占地する。

本遺跡は行政区画のうえから熊本県上益城郡御船町大字下高野（旧高木村）字上原に属し、この位置を国土地理院発行の五万分の一、図幅「御船」に求めれば、南から15.3cm、西から7.8cmのあたりに相当する。

本遺跡に関連ありそうな周辺の遺跡について一瞥すれば、次のとおりである。

つづの山遺跡の東に聳える飯田山は天台宗の名刹である。山頂近くに造立された堂塔は、往時の面影を今に伝えている。無雑作に積まれた石段、足もとに気を配りながら登りつめると山門があらわれる。閑静な寺域を進むと正面に本堂があらわれ、両側には百済伝来とされる層塔がある。塔は九層からなり、様相からして室町期を降らないものとみられる。さらに、両側には塔碑が並ぶ。雄大な豪潮の宝篋印塔はおのずと寺格に重みを与えている。本堂横には山王、愛宕山があり、向背の男坂を登りつめると山頂には池と白山神社がある。池は半ば埋っているが、飯田山が且て火山であったことの証しとみるむきもある。門前を横切る道路にはかつての宿坊（飯田村）が軒を連ねていたが、時代の遷移には抗し難く、昭和初期に姿を消した。

船野山の西南麓、中砥川の船井川には石仏がある。重量感あふれる阿弥陀如来の坐像で、銘文に「左近太輔」「宝治二年（1248）」と記され、造立年月が知れる。里俗に「衣更えの阿弥陀」とも呼ばれている。石仏は堂宇に治められており保存もよい。ここの裏山一帯の字名に「寺山」とあるのも、このお堂に関りのある呼び名であろう。堂の周りには五輪塔、宝篋印塔の残欠が散乱している。

船野山の北、谷一つ隔てた山稜中に福田寺址がある。ここには多数の石塔が散乱していて、中には鎌倉期の銘文のあるものもあったが、戦後の開拓、農道新設、そして造園ブームと相俟ってその多くは散逸した。

下高野の集落は４つの組に分れている。その一つに安養寺というのがある。ここに同名の寺院があったというが、今では、寺址と伝えるところにはそのあとかたもない。名称からも中世的様相のものと考えられ、『国郡一統志』にもその名が見える。わずかにむらのお堂の片隅に、

■矢ノ下・目抜遺跡
▲つづの山遺跡

1. 赤井城址
2. 舟井川石仏（宝治２年）
3. 飯田山常楽寺
4. 秋永遺跡
5. 櫛島遺跡
6. 井寺古墳
7. 道ノ上城址
8. カキワラ貝塚
9. 甘木城址
10. 安養寺址
11. 久保遺跡
12. 小坂大塚古墳
13. 今城大塚古墳
14. 下山神遺跡
15. 御船城址
16. 光明真言（延文４年）
17. 如法塔（永保元年）

附１第１図　遺跡の位置とその周辺

焼観音として面影を留めている。

高木小学校の裏手には「ももの木どん」というのがあったという。その委細は判らない。その西側には中世墳墓群があり、宅地造成に先立って熊本大学考古学研究室により調査された。ここには方形基壇があり、周りの溝より五輪塔の一部が出土した。

下高野集落の西隣りが甘木である。甘木は「甘木荘」として知られているところで、歴史的地名である。『元享釈書』に甘木県吏源憑、そして後に京都泉涌寺高僧、俊芿律師由縁の地である。むらの西端には堀切を距て中世城址「甘木城」があり、むらのたたずまいにもどこか古い形態を残している。

Ⅱ　泥塔発見と調査の契機

昭和47年７月のことである。筆者の友人の本田哲哉氏（御船町在住）から次のことが知らされた。

下高野の工事現場から土偶とか、埴輪のようなものが多量に出土し、小・中学生達がそれを採集している。それは何しろ昨年９月のことである。連絡がとれず、私に会う機会を待っていた。

以上のようなことから泥塔の出土を知った。早速地元の御船町教育委員会に連絡をとり、善処するよう指導した。その間私も現地を訪れ、現状の観察と情報の収集につとめた。一方町教育委員会より数日を経て数個の泥塔が届いた。いずれも破片で完好なものはなく、相輪と籾孔を欠ぎ、それが直ちに泥塔と知れる状態ではなかった。採集資料を検討の結果、それが泥塔と知れる。県文化課としては事の重大さに気付き、応急の処置として47年11月７日より10日間、現地の残存部分の発掘調査を実施した。

Ⅲ　調　　査

１．調査前の状況

調査に先立って地元の郷土史家高田國勝氏や、旧地主の吉住民次郎氏らから工事前の状況を聞いた。それによると現地は雑木林で、山林中にいく分盛上がった地点があった。地元ではこれを「つづの山」と呼んでいた。二つの小山は東側が径10m位、西側の山が径５ｍで、ここに狐が棲みついていたという。「つづの山のちんばじょ」、「小豆(あづき)坂のたろうじち」と双称されていたが、その意味のほどはよく分らない。小豆坂はつづの山の北約１kmの地点で、益城町、御船町、嘉島町の境界付近で、あたかも飯田山常楽寺への参詣道にあたる。現村の道路脇には石祠があり、近くには数基の古墳もあった。古墳は圃場整備により消滅した。

下高野の集落と小谷を挟んだ丘陵一帯が町の土地開発公社により買収され、企業誘致のため造成工事されることになった。ブルドーザにより北へ向かって押均らされ、私達が知った時には大部分の表土は削り去られていた。

この様な状況下にあって、注意深く開発を見守っていた高田氏はしばしば現地を訪れ、そこから多数の泥塔と共に青銅器を採集した。青銅器は経筒で、蓋と底を失いブルドーザの爪痕が生々しく潰されていた。つづの山の近くから採集されており、このことからつづの山は「経塚」であったとみて間違いなさそうである。高田氏の話によると、周辺には石が四枚あったという。おそらく、経筒を囲んで石がめぐっていたものとみられる。つづの山の周辺から銅剣と頸飾りのようなものが出土し、それを中学生が持って行ったという。しかし、いろいろ聞き込みをしたが、その行方は判明しなかった。頸飾りとされたものは、あるいは経筒の瓔珞であったかも知れない。

この様な状況で、調査前の保全状態は極めて悪く、発掘調査による遺構の検出は危まれた。しかしともかく現地入りすることにした。

2．検出した遺構と遺物

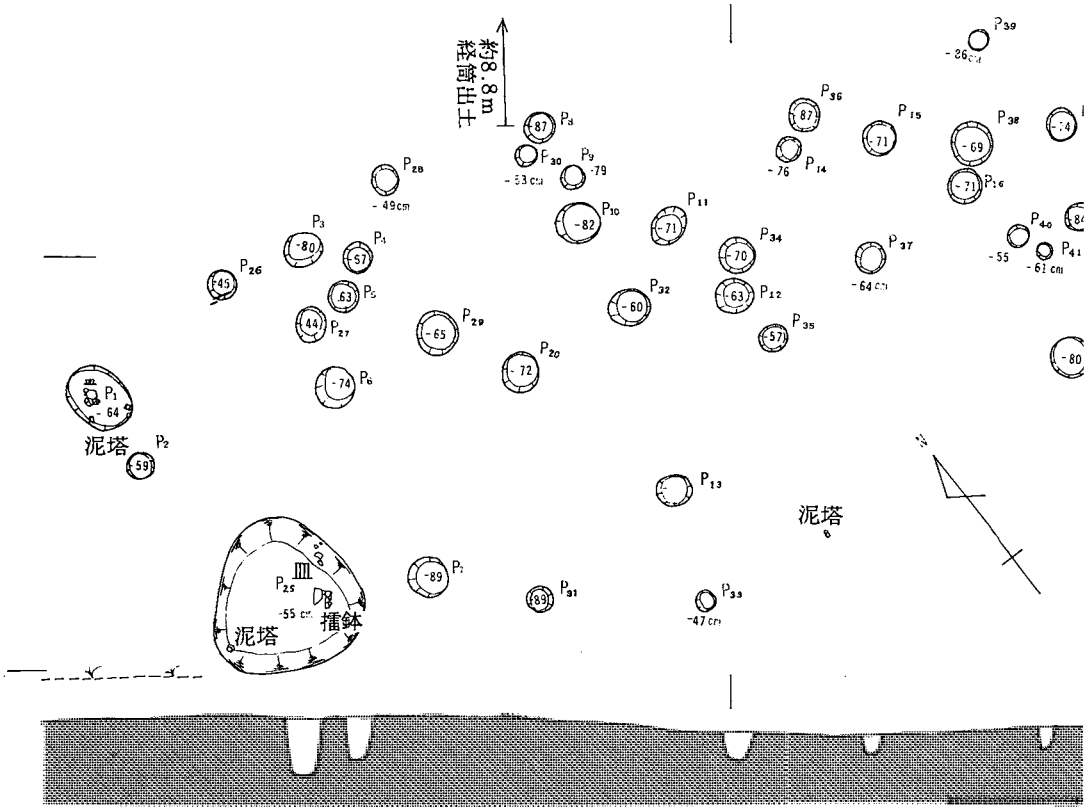
熊本県教育委員会では、昭和47年11月７日より延10日間発掘調査を実施した。調査には文化課参事緒方勉と同学芸員高木正文が当った。すでに述べたとおり、現地は土地造成のため削り取られ、つづの山自体も消滅していた。比較的残りのよいところを選んで発掘した結果が別図（第２図）のとおりである。

精査の結果、第２図のとおり３×６ｍの範囲にわたって49個のピットを発見した。これらピットの周辺はすべて削り去られており、ピット１の北西側は2.4m位のところが削り落され、1.5m位の段落ちになっていた。南側も同様で、これ以上の遺構の追及は望めなかった。北側に「つづの山」があったところから、当然遺構のひろがりは北乃至北東に延び、重要な遺構があったものと思われるが、この地点は大きく削り去らされ遺構の痕跡すら発見出来なかった。前記の高田氏の採集になる経筒はピット８の北東約8.8mのあたりに発見されている。

本遺跡で検出された遺構に大小のピット群がある。その数49個で、大形ピットは擂鉢状を呈するものもあった。これらのピットの中には、建物の掘立柱の柱穴が多数あるものとみられるが、土木工事により削り取られ充分の調査は出来なかった。ピット中、35・37・16・17・44の５個のピットは、東西方向に一定の間隔を保って並び、建築物を想定してよいかもしれない。

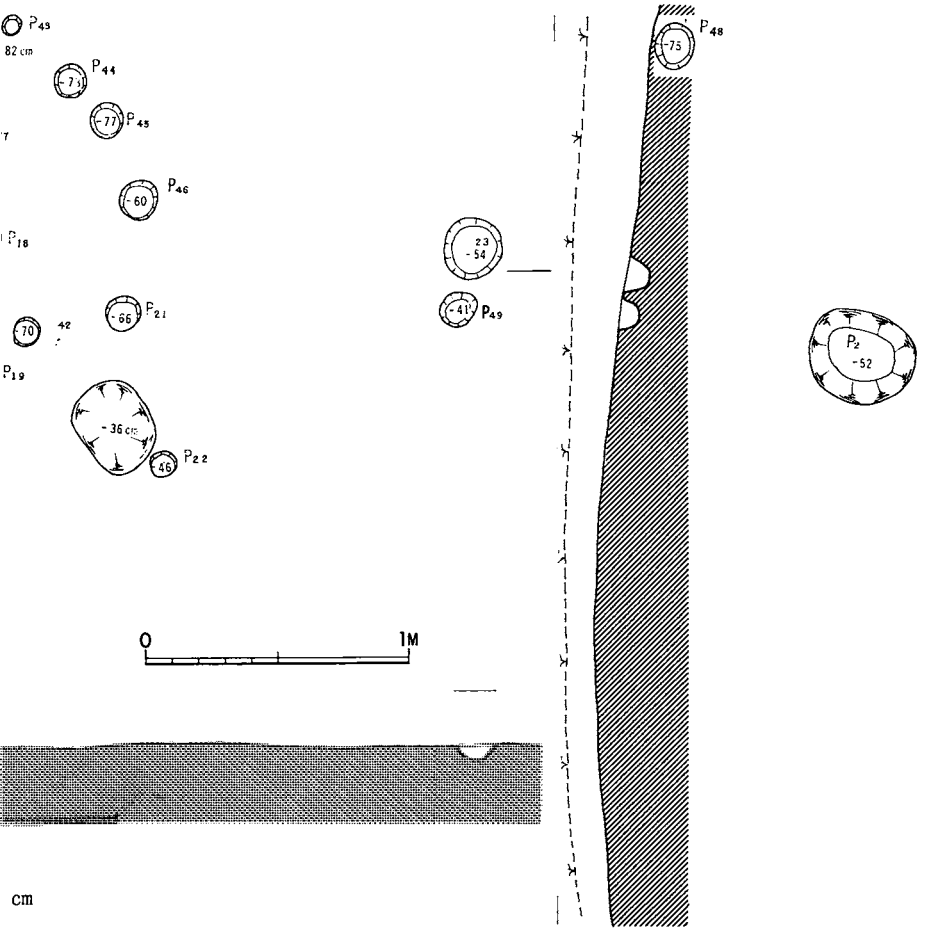
以上のように多数のピットが発見されたが、その中に泥塔などの埋没しているものも多く、これらのピットが、採集された泥塔と無縁のものでないことを物語っていた。以下遺物を出土したピットを列記すれば、泥塔（１～７、９～12、14～23、25）、土師皿（１、13、19、23、25)、瓦質土器（18、25)、鉄器（19、20）がそれぞれのピット中より出土した。

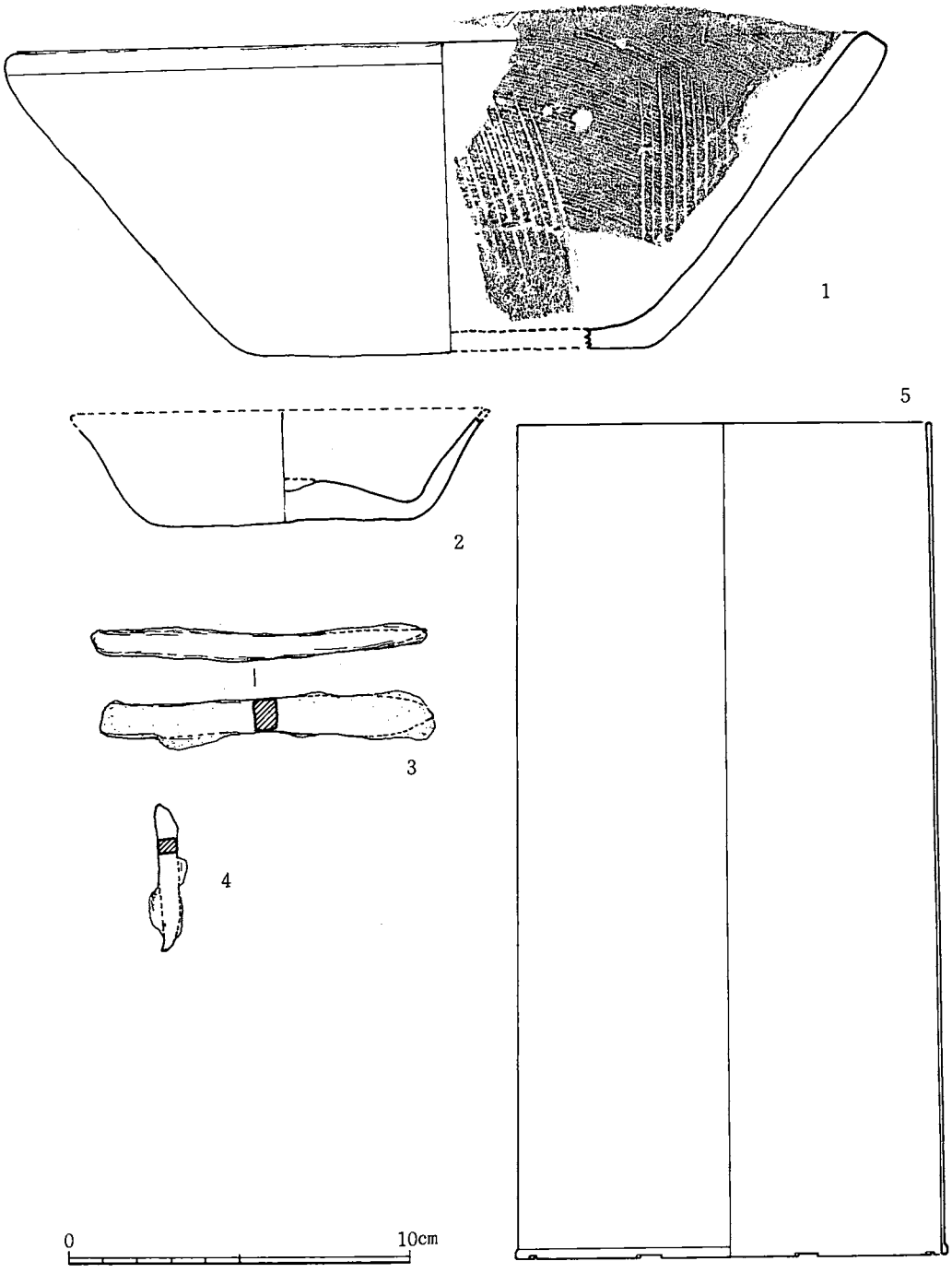
遺物についてまず泥塔があげられる。巷間伝えるところによると、軽自動車一台分ほどの量



※数字はピットの深さ

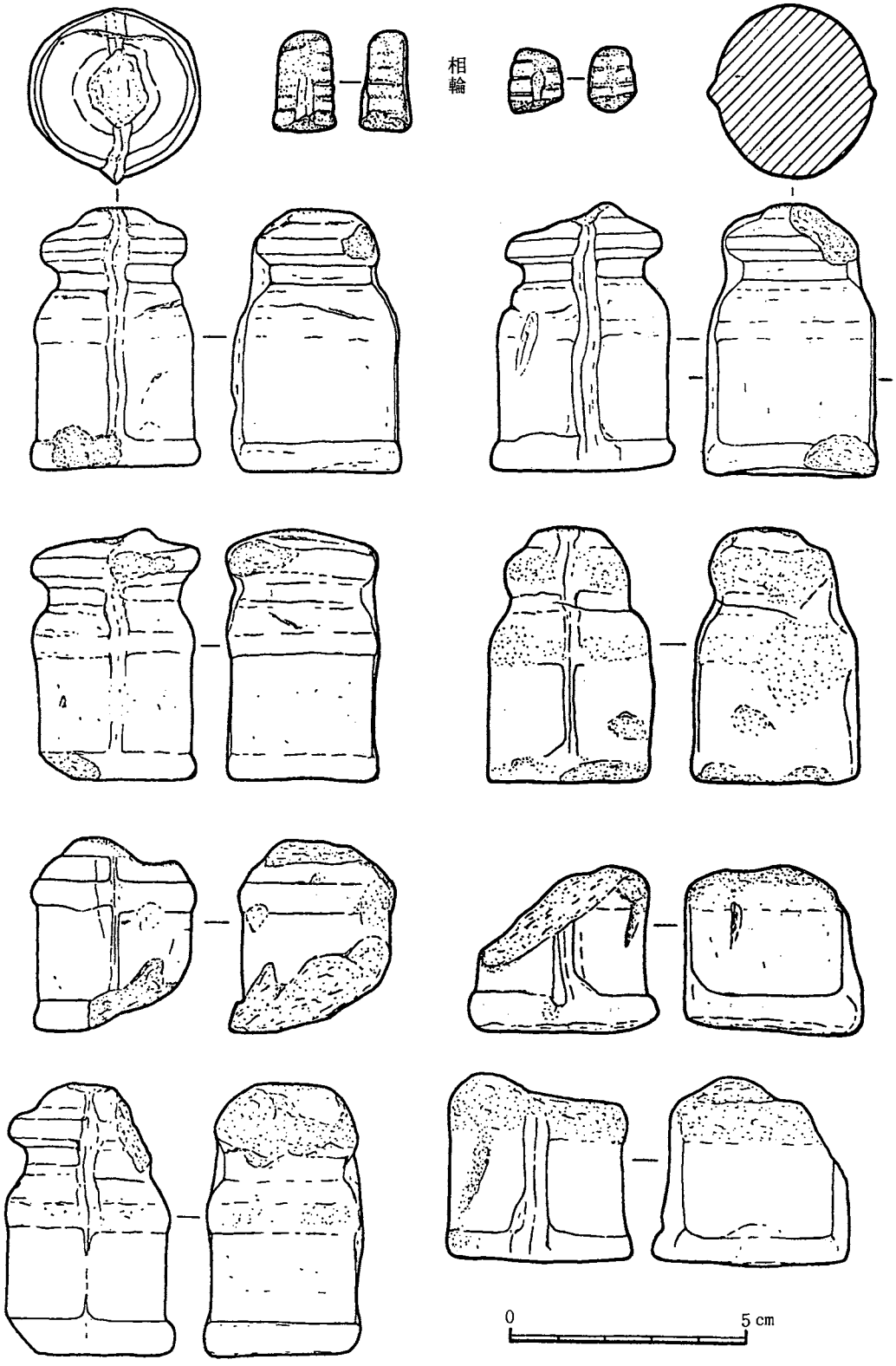
附1第2図　遺構配置図


P43
82 cm
P44
-71
-77
P45
P46
-60
P18
23
-54
-41
P49
-66
P21
-70
42
P19
-36 cm
P22
-46
0
1M
cm
P48
-75
P2
-52



1．擂鉢(ｐ25)　2．土師皿(ｐ１)　3．鉄器(ｐ19)　4．鉄器(ｐ20)　5．経筒(採集)

附１第３図　出土遺物



附1第4図　出土泥塔

があったという。事実持去られた数は確認のしようがないが、相当の数量に上るものとみられる。そこで、地元で採集したもの、旧地主の吉住氏が供養のために再埋葬したものを合せると約368個(完形の1/3位のものを1として数えた場合)におよんだ。

泥　塔（第4図）別図に示したとおり、両側に鰭(ひれ)のあるところから型抜きしたことが知れる。発掘又は採集により得た泥塔は二通りあり、一つは宝塔形のものであり、他の一つは塔形の塔身部の上端を欠ぐものである。これは前者の宝塔形のものが簡略化したものとみられる。

泥塔は径3.3～3.5cm位で、台座にあたる部分がいく分はり出している。塔身と笠のくびれから、それが宝塔形をしていることが知れる。相輪まで残った完好なものはないが、台座から笠までの高さ3.5cm前後、それに相輪の高さ2.5cm余を加えると全体の高さ7cm余であったことが知れる。泥塔には梵字などの陽形型押もなく、また底部に穿孔は認められない。粒子の細かい粘土で出来ており、色調は橙褐色、焼成は余りよくない。

経　筒（第3図5）つづの山周辺から採集したもので底・蓋ともに失われている。厚さ1mm位の銅板で出来ており、上下両端がいく分厚くなっている。経筒は高さ24.4cm、下部直径12.7cm、上部直径12.2cmで上方の径がいく分小さい。筒形の容器を造るのに、銅板をかしめてこしらえたものと考えられるが、表面的観察では接ぎ目やかしめの跡は発見出来なかった。底の接合部に幅7mmの舌止めの切込みがある。

この経筒の蓋は失われており、その形態は明らかでないが、「頸飾りのような物を子供らが拾っていた」との聞き込みもあり、あるいはそれが経筒を荘厳にするための瓔珞であったことも考えられる。また経筒には銘文はなかった。

瓦質擂鉢（第3図1）ピット18と25から出土した。18から出土したものは小破片で、図示しなかった。ピット25出土のものは、図示による復元口縁径26cm、底径12cm、高さ9cmになった。底は平端、直線状に立上がる。口縁部近くは肥厚気味で、上端は平端である。内側の器面はハケ目により調整され、9本単位の刻線が放射状に引かれている。外面は粗く、底部は火を受け煤をかぶっている。破片のため明確でないが、他の事例からみて片口になるものとみられる。

土師質皿（第3図2）いくつかのピット中より土師質土器片が検出されたが図示出来るほどのものは少ない。第3図2は図示出来る数少ないうちの一つでピット1から出土した。この皿は底部が異常に厚く、厚みが1cm余に達する。口縁径約12cm、底は糸切底である。

鉄　器（第3図3．4）2個の鉄器が発見された。ピット19と20から発見されたもので、形からそれぞれ角釘とヤリガンナと思われるものである。角釘は6mm位の四角な断面で、釘頭は折損しており、現長42mmである。ヤリガンナは銹膨れにより、刃部が明確でないが、わずかに刃先が知れる。柄は角形で、刃部に向ってわずかに反る。

Ⅳ　まとめと考察

つづの山遺跡の調査により多数のピット群と多量の泥塔を採集、又は発掘することが出来た。ピット群は建物の掘立柱を思わせるものがあったが、工事により破壊され柱穴の配列を確認するに至らなかった。この地域は、状況的に堂宇が存在しても不思議でない所である。

泥塔供養の記録が平安・鎌倉などの文献に見えるが、その数量が10万基、８万4000基などと記され、多量の数が造立されたことを物語っている。本遺跡にどれだけの泥塔を埋納したかについては定かでないが、地元の人の証言によると軽自動車一台分ほどであったと言うから、如何に大量に出土したかが知れる。調査時取集めた分でも約368個体分はあった。しかし、泥塔出土が熊本は勿論、九州でも類例が少なく、つづの山遺跡のように出土する遺跡も珍らしい。そう言った意味でも、本遺跡は泥塔らしい出土状態を示したと言えよう。

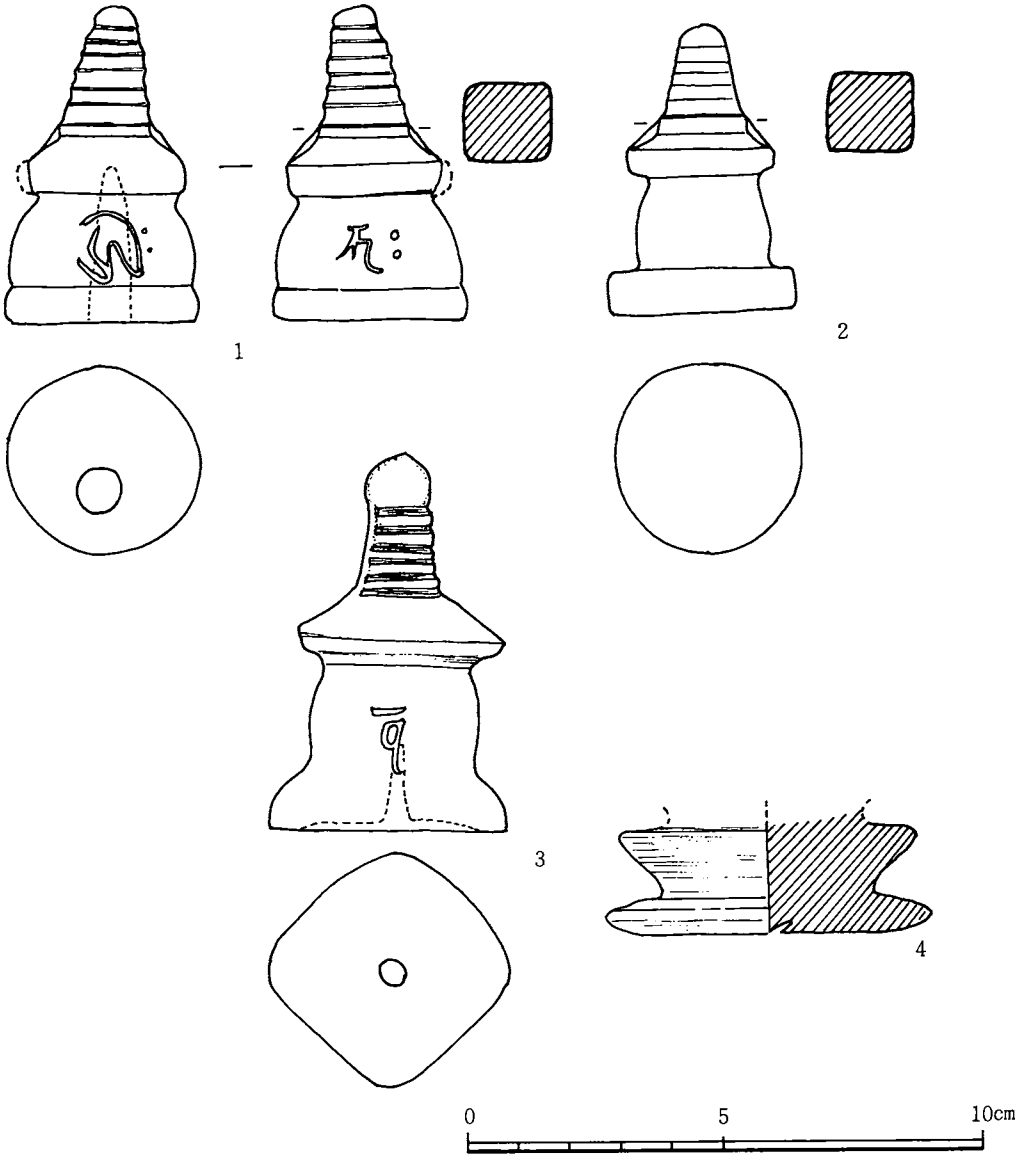
泥塔供養は庶民というより、顯官・貴紳など中流以上の階層にかかわりのあるものとみられている。そこで、ここつづの山遺跡では誰が何のために供養したのであろうか。

泥塔そのものは数こそ多いが、一つ一つ見た場合、梵字、底部に穿孔もなく、形のうえから簡略化されたものと考えられる。出土した擂鉢等からしても鎌倉期頃のものと考えられる。

泥塔を出土したつづの山遺跡は下高野にあるが、この西隣が甘木である。記録にある庄名がそのまま在所の名前となっている。『元享釈書』の俊芿伝中に「十歳州之味木縣吏源憑見其紉敏而無父、養而為子」とあり、俊芿、源憑の名が出てくる。文中味木とあるのは甘木を指している。そこで泥塔供養が、これらの人物と何らかの関わりはないのであろうか。

また吊鐘形をした飯田山は遺跡のすぐ東で、その秀峯を仰ぎ見ることが出来る。山頂近くには無住の常楽寺があり、古くは天台の名刹である。この寺院とのかかわりを考慮に入れる必要があるかも知れないが、今ここに具体的に示す資料は見出せない。

最後に熊本県下出土の泥塔について一瞥してみよう。その出土を伝えるものに熊本市の二例と八代郡竜北町法道寺出土のものがある。熊本市内発見の例として熊本高校校庭採集のものが昭和24年西日本史学六号に紹介されている。第３図４がそれで、小破片であるためその全容が明らかでないが、円盤形をしていて、それが何段にも重なるようで、これが泥塔であれば層塔形になるものと見られる。底には篦切りで平滑、中央部に小孔がある。焼成、胎土ともに良好である。他の一つに徳本明氏所蔵の泥塔がある。これは同氏が熊本市の古物商から買求めたもので、熊本市内の水道工事中出土したとのことであるが委細は明らかでない。泥塔は宝塔形で、台座は方形、底に穿孔がある。塔身には梵字が陽形型押され、上部に相輪と宝珠が伸びる。総高92㎜、胎土中に金雲母を混入している。これは焼成良好な優品であるだけに出土時の詳細が明らかでないことは資料として惜しまれる。



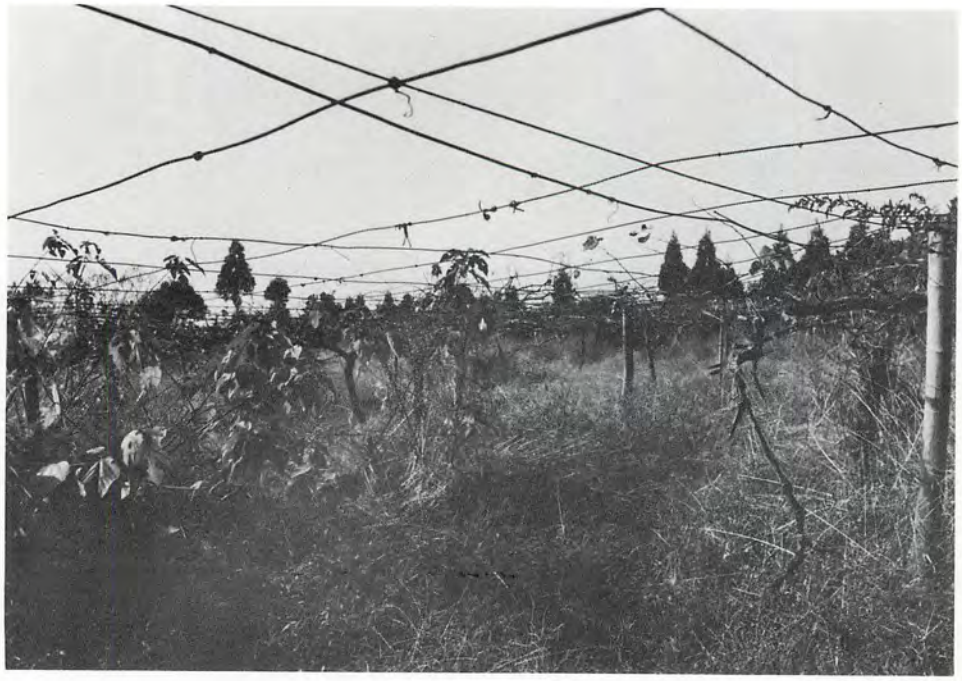
1．2．竜北町法道寺　3．熊本市？　4．熊本市大江熊本高校敷地内

附1 第5図　熊本県内出土泥塔

竜北町法道寺址出土の泥塔２個が、地元野津の宮村剛氏の手元にある。いずれも宝塔形である。その内の一つは円形の台座の底に比較的大きな穿孔がある。塔身の両側に梵字が陽刻され、キリークとバクが両側にある。台座から相輪の上端まで62㎜である。他の一つはこれとほぼ同形であるが、底部の穿孔と梵字が省略されている。総高56㎜である。　（緒方）

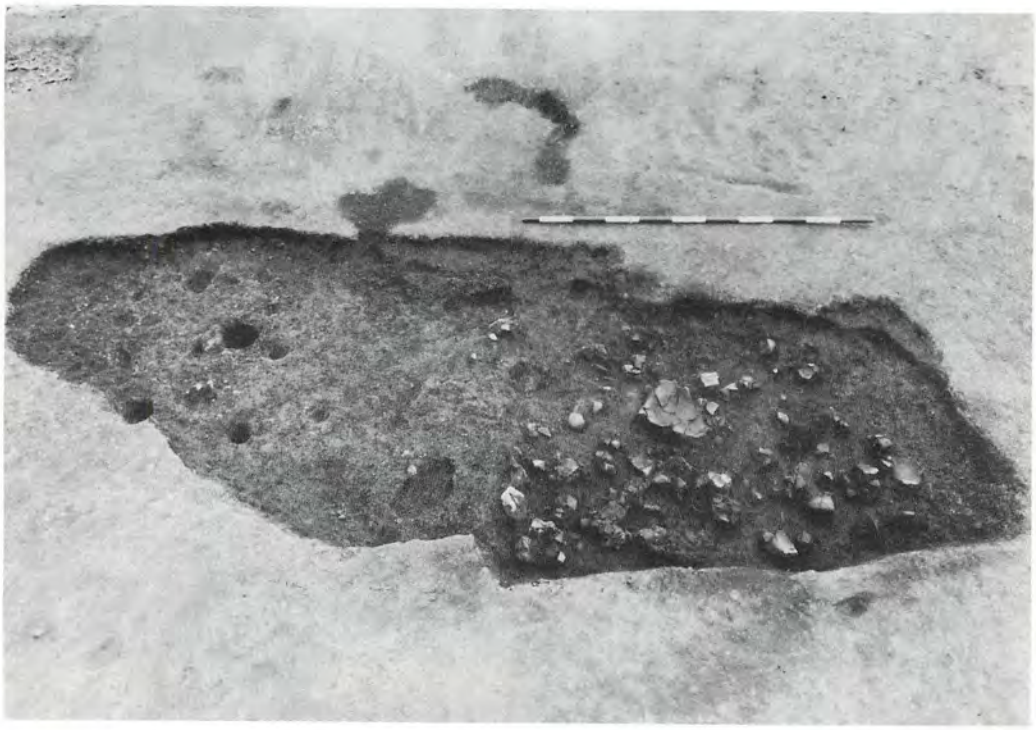
図　　版

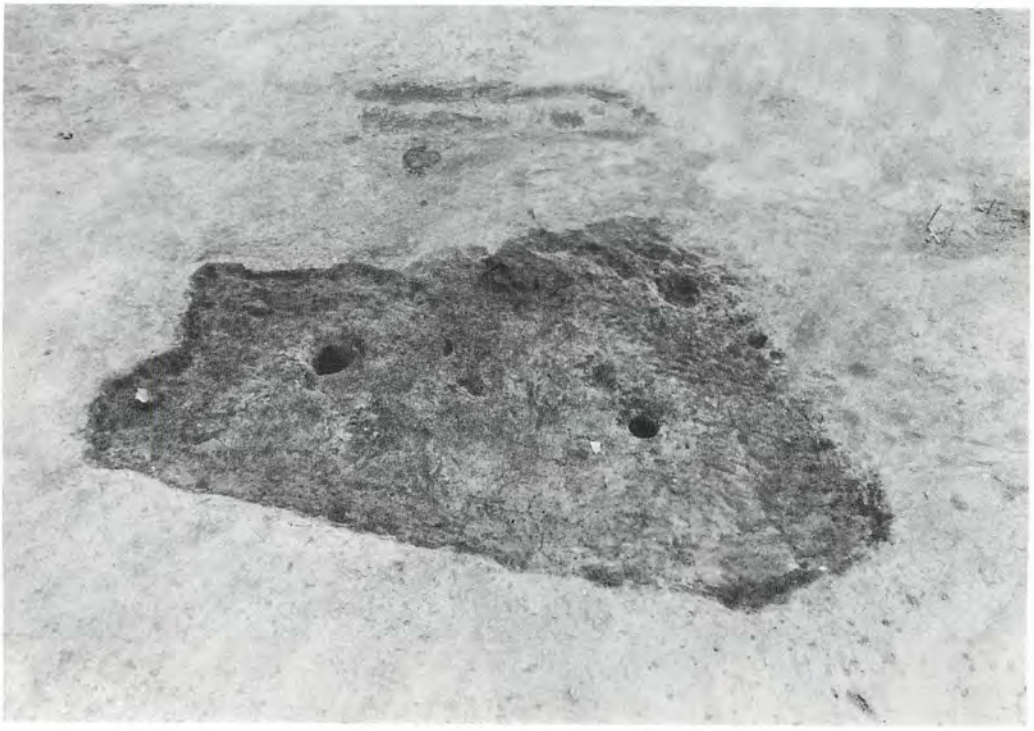
上、下、調査地遠景



上、調査前の状況(果樹園)　下、第1号(左)・第2号(右)住居址の検出状況(東側から)

上、第1号・第2号住居址(南側から)　下、第1号住居址土器出土状態





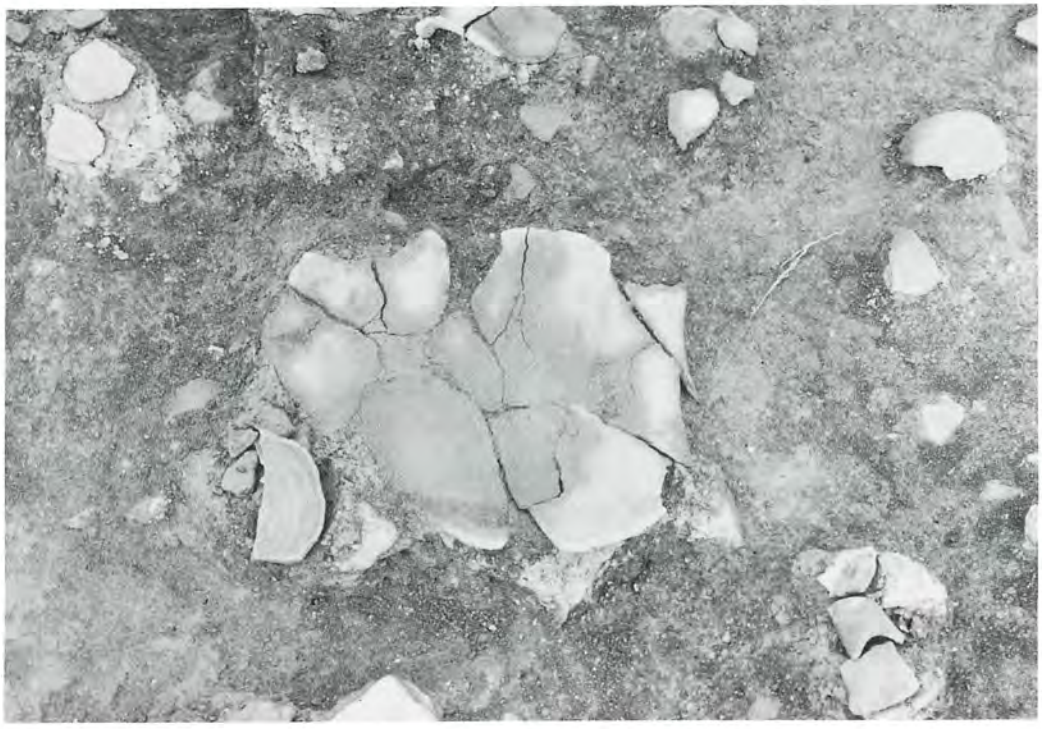
上、第1号住居址　下、第2号住居址

上、第3号住居址　下、第3号住居址遺物検出状況

上、下、第3号住居址断面

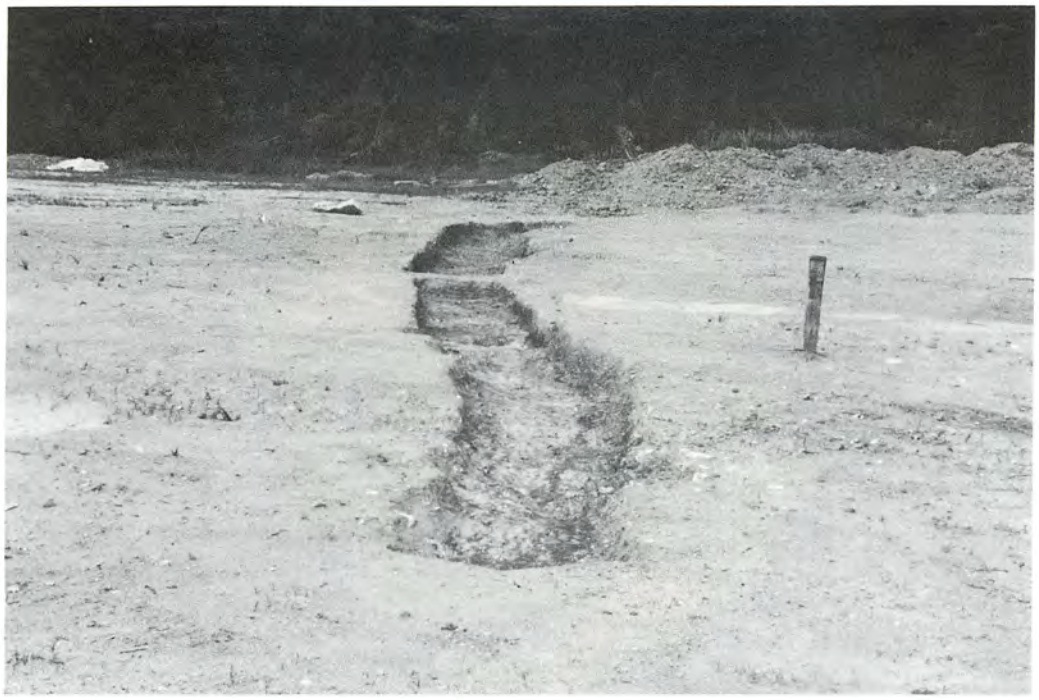
上、下、第3号住居址断面

上、下、第3号住居址遺物出土状況



上、下、第 3 号住居址遺物出土状況

上、第3号住居址遺物取り上げ後の状況　下、第3号住居址ピット状遺構



上、溝状遺構　下、第３号住居址ピット状遺構

001

002

003

第1号住居址出土土器(001～003)：第6図

004

005

007

008

013

006

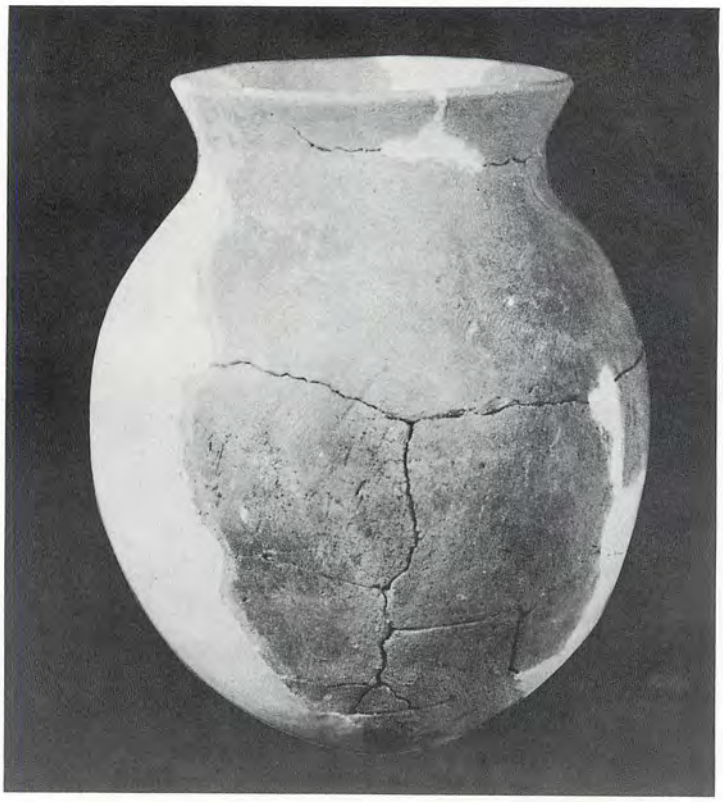
009

010

012

014

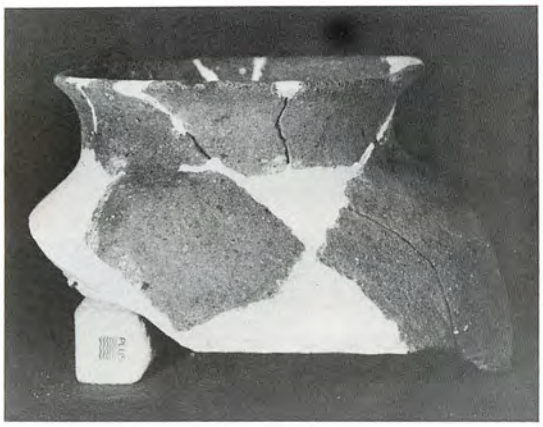
第１号・第２号住居址出土土器(004～014)：第７図



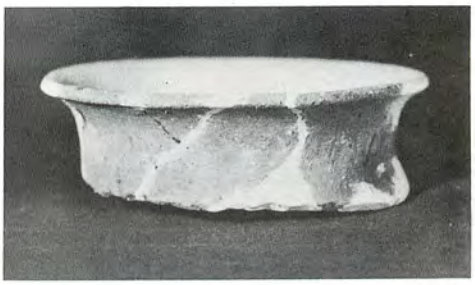
015

016

第３号住居址出土土器(015・016)：第10図

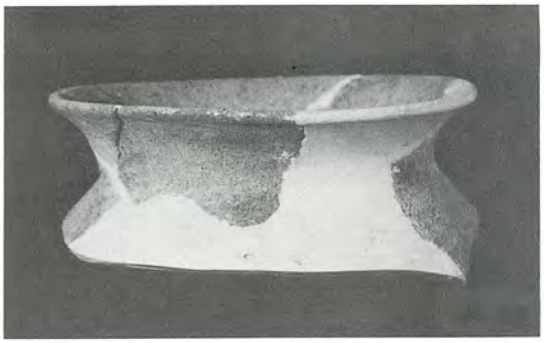


017



018

020



019

021

022

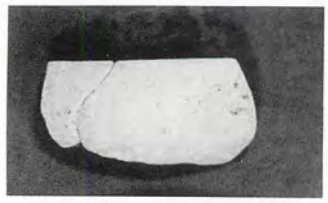
023

024

第３号住居址出土土器（017～024）：第11図

025

026



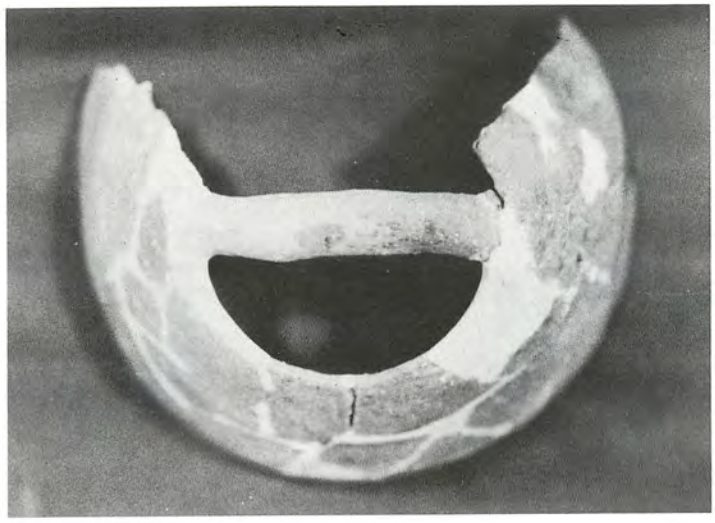
027

028

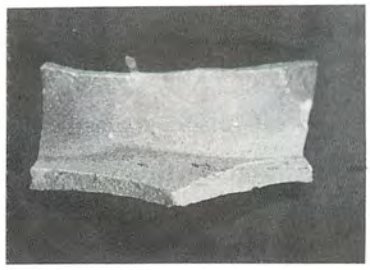
030

029

第３号住居址出土土器(025～030)：第12図



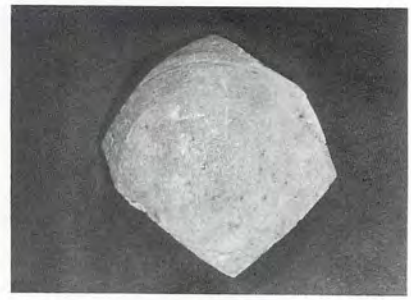
031



032

第３号住居址出土土器(031・032)：第13図

033



036

034

037

035

038

039

040

041

第３号住居址・表土層出土土器(033～041)：第14図

044

043

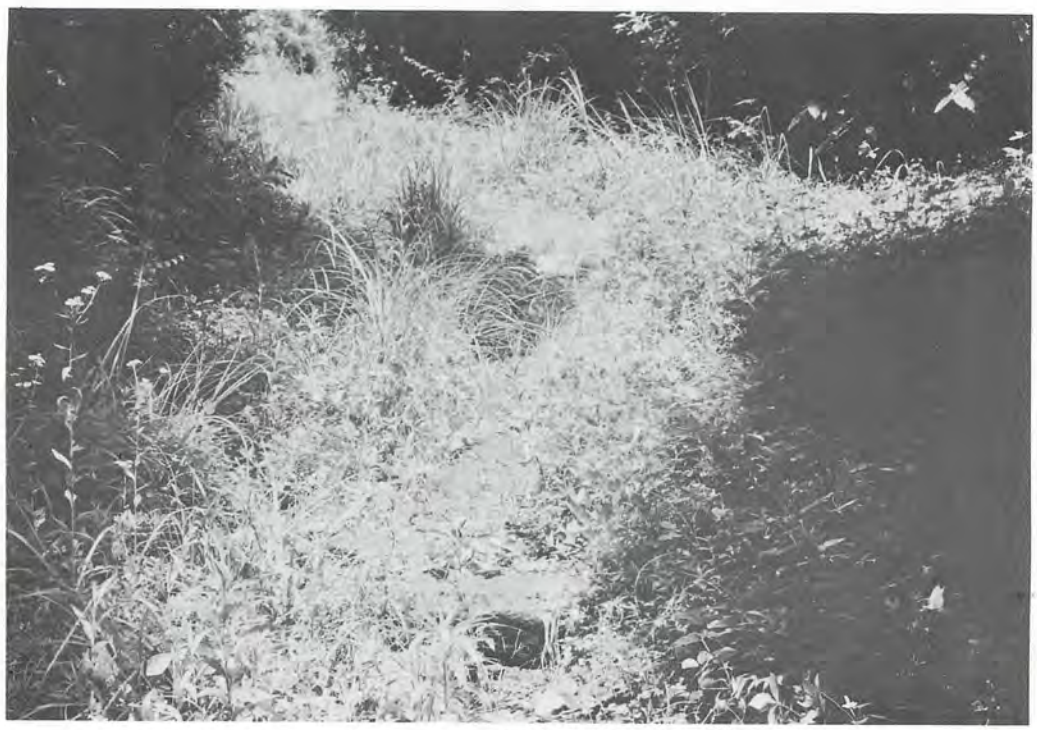
045

046

溝状遺構・C地区出土遺物(043～046)：第15図

上、娑婆神峠の手前にかかる眼鏡橋　下、石畳道の残骸

上、下、雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）



上、下、雑草に覆われた石畳道（調査前の状況）

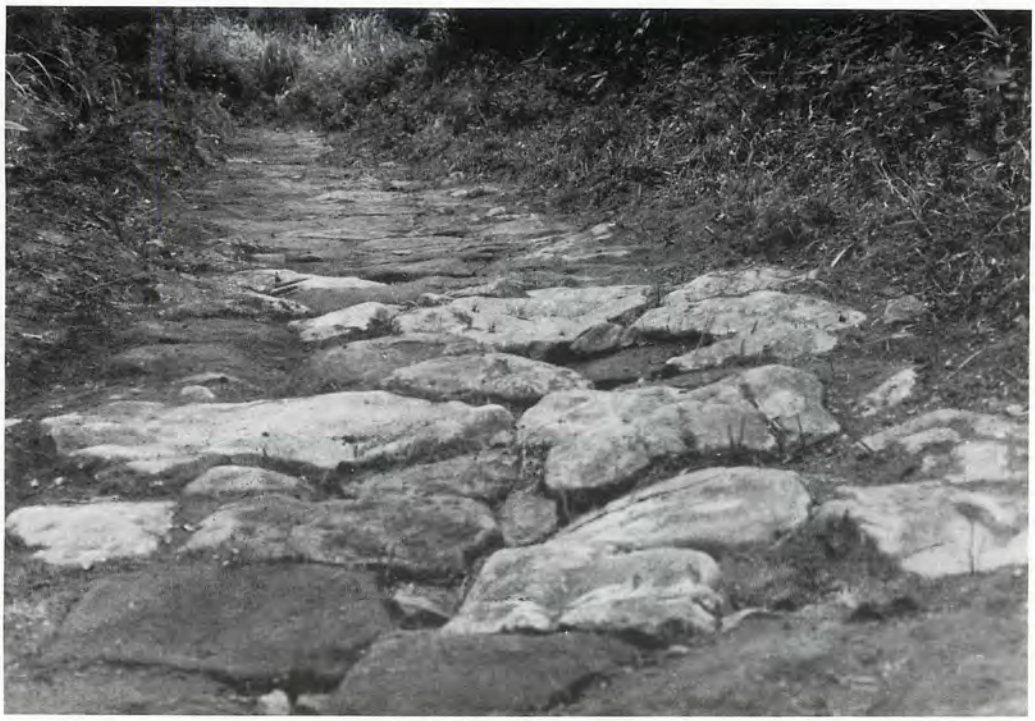
上、石畳道の残骸　下、雑草に覆われた石畳道

上、下、石畳道の残骸

上、下、雑草の除去作業風景

上、下、雑草除去後の石畳道（東側から）

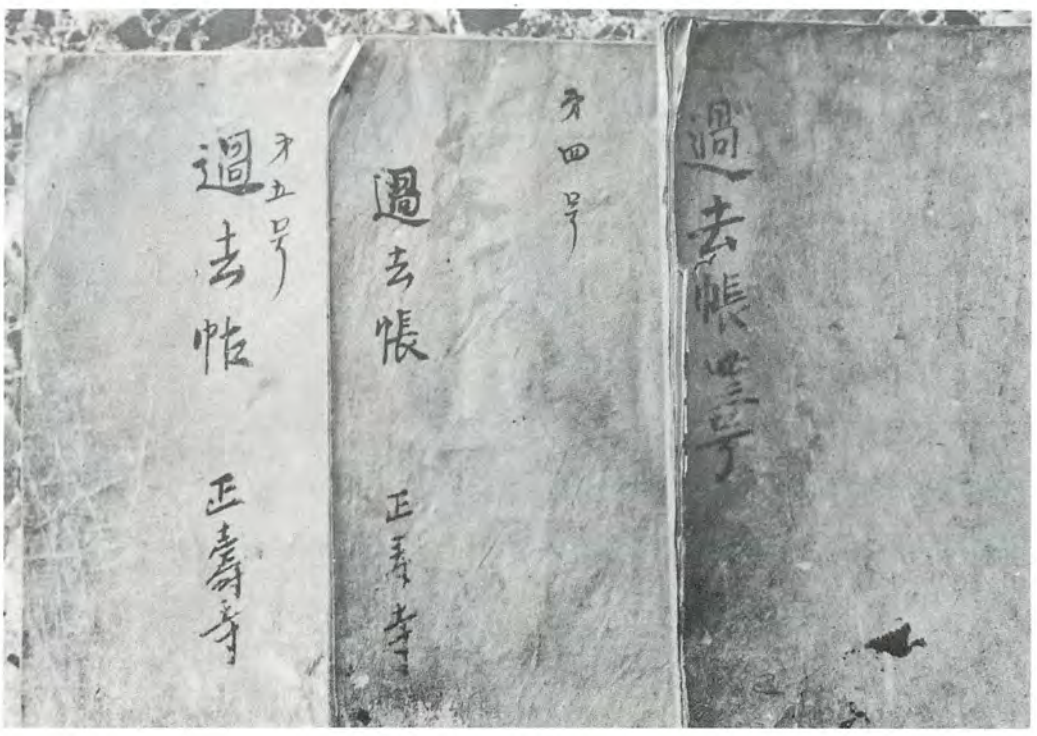
上、雑草除去後の石畳道(西側から)　下、雑草除去後の石畳道(東側から)



上、雑草除去後の石畳道(白い石は石灰岩)　下、雑草除去後の石畳道

上、下、雑草除去後の石畳道

上、雑草除去後の石畳道（西側から）　下、長谷寺の五輪塔



上、長谷寺の五輪塔(正安四年銘)　下、正寿寺に残る過去帳

上、第3住居址出土土器　下、調査に参加した人達

熊本県文化財調査報告　第39集

中小野・矢ノ下・目抜・アケサン

昭和55年1月8日

編集　熊本県教育委員会©
発行　〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　コロニー印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12－37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 39 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：中小野 矢ノ下･目抜 アケサン
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日